
GOD EATER -PL/RAYERS-

阪川ヨシカズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R - P L / R A Y E R S -

【Nコード】

N 2 2 7 4 Z

【作者名】

阪川ヨシカズ

【あらすじ】

それは、神を喰らう者の物語。 いや、神を喰らう者『たち』の物語。

フェンリル極東支部、通称：アナグラに、初の新型神機使いが現れる。 …… 『二人』。そして、それに導かれるように新型神機使いはさらに集まる。

予定された時計の針は、徐々に狂い始める。 さて、狂っているのは世界か、アラガミか、あるいは、人間か。

そして彼らに待つは、
神々の樂園か、
奈落の底か。

1・PLAYERS（前書き）

これはフィクション。こんな世界は存在しない。だけど、それは未来のことかもしれないし、遠く遠く宇宙の果てで現在進行形で存在しているのかもしれない。

それにかかわらず、あなたはこの物語を否定することができる。あなたの『ゴッドイーター』の世界を、壊されたくなければ、すぐに立ち去ることを勧める。

大丈夫、世界は無限に存在するから。

1・PLAYERS

—NOW LOADING・・・

—「READY・・・」

フェンリル極東支部、通称・アナグラ。旧型神機使いは多くいるが、未だ新型は一人もいない。

・・・だが、ついに適合候補者リストの中に、新型神機に適合するものが現われた。

この出来事は一日とせずアナグラ内に広がり、話題の大半はそれに関連するものであった。それほど、新型は重要視されているのだ。

神機使いA「新型が入ってくるけどよ、俺たちの立場はどうなっちゃうんだ？」

神機使いB「焦るなよ。先輩面してりゃいいんだ、俺たちや。それにしてもさ、」

新型が一度に二人も入ってくるなんて、珍しいこともあるんだな。

「睦月ケイスケ」

足が、震える。それとも地面が揺れているのか。そんなことは分かり切っているさ、この足の方がおかしいに決まっているんだ。

あとは、あとはここに、手を置けばいいんだ、手を置く、手を置け。それで終わり。たったそれだけで、すぐに終わる。一瞬で、一瞬で終わる、そうに違いない。

だから、ほら、さあ。早く終わりにしてしまおう。何のために、親父とお袋を説得してここまで来たっていうんだよ。ほら、早くつ。

だけど、強張った体はそう簡単に動いてはくれなかった。

そうこう思案していると、スピーカーから声が聞こえた。それは、女性の声。

女性「どうした？ 貴様はゴツドイターとなるためにここまで来たのだろう？ それなりの覚悟を持ってここまで来たはずだ。――ならば、この程度のことができなくては困る。これからの任務はもったときいだろうからな。

忠告しておく。覚悟がないのならここからさっさと立ち去れ、そんなちやちな覚悟でこの仕事をやっていけると思うな！」

その言葉を聞いて、胸が苦しくなった。俺の覚悟って、この程度だったつけ。もしも、このまま帰ったら、帰ってしまったら。――俺の家族は、どう思つかな。

親父は俺の決断を聞いて、ただ一言、好きにしろって言った。だけどそれだけじゃなくて、その選択に後悔はないか、って訊いてきた。

あの時の俺は、自信を持って縦に首を振ってたけど、今の俺は、どうなんだろう――。

お袋は、……最後まで反対してた。だから、縦に首を振ってくれるまで、俺は何度も何度も頼んだ。そして、最後の最後にようやく、半ば呆れながらも笑って了承してくれた。

――そして今からちょうど一週間前に、神機に適合したという報せが家まで届いた。それはもう、俺は手放しで喜んだよ。その時の母さんの顔は、やっぱり呆れていて、それでいて悲しげで。

それから今朝、家を出るときになって、ようやくお袋がまともに話してくれた。いや、話したというよりは、俺に忠告した。

『死に急ぐなんて本当に馬鹿ね。一体誰に似たのかしら、ホントに……。いい？ 絶対、死んじゃダメだからね。遺物で戻ってきた日にはあの世まで殴りこみに行つてやるから、覚悟しておきなさいよ』

――覚悟、か。俺の覚悟は、こんなもので、この程度で、破れる？ 一瞬の痛みで、俺の覚悟がぶち破れる？

なんだよ。どうして、この程度で俺の覚悟が打ち碎かれるなんて思つたんだろうな。本当に馬鹿みたいだ、俺って。

ケイスケ「俺の、覚悟は。……この程度じゃない!」

俺はそう嘲り笑って、右手を機械の上に、差し出した。

その刹那、爆ぜる音と共に、これまでに味わったことのない、能動的苦痛が腕から体中へ駆け回る。その痛みは体中から汗と涙と喘ぐ声となって搾取された。

いっそのまま、楽にしてくれ。そんな考えを頭の中から追い出す頃には、痛みは最初から存在しなかったかのように鎮まっていた。

——そして、機械の蓋（？）が持ち上がって、俺は腕に輪っかのようなものが嵌まっていることを確認する。そして俺の決意を見届けたかのような声を耳にした。

女性「決断が遅い。任務中は瞬間的な決断が必要とされる、少しの判断の遅れが命取りだ。——フェンリル極東支部へようこそ、……新型ゴッドイーター」

1441 訓練所エリア廊下

——「睦月ケイスケ」

エントランスへ戻る途中、おそらく俺より年上の奴とすれ違う。そして、すれ違う時に彼は質問した。

年上の青年「急に訊いてすまないが、何をされたんだ？」

どうやら、彼も神機の適合者のようで、今から腕輪をつけに行くようだった。そして、正直に答えて不安にさせるか誤魔化すか迷った挙句、「全然どころか一切痛くないようなことをされる」と、はいはい冗談ですけど何か？ みたいな感じで答えた。年上の青年「そうか、それならよかった。感謝する」

そう言っただけは行ってしまふ。——思えば、これが俺とあいつ

の初対面だった。

—— 1 4 4 2 エントランス

—— 「睦月ケイスケ」

少し迷いながらもエントランスに到着する。アナグラの中は想像よりも遥かに広かった。

さて、指示が出るまで待っていればよかったんだっけ。ソファーにでも座っていようか。

—— つと、既に座っている人がいた。とりあえずその横に座ることにする。見る感じ、同年代のような。服は、ああ、居住区で今流行の服だったような。

同年代の少年「ガム食べる？」

ケイスケ「えっ？」

唐突に尋ねられ、少し焦ってしまった。

ケイスケ「えっと、ガム？ ガムね？ えっと、貰えるものなら貰っておきたいな」

俺がそう答えると、彼はポケットをゴソゴソとするが、…どうやら今食べているので最後だったようだ。それを聞いて俺の口から少し溜め息が漏れる。

ケイスケ「それで、誰だ？」

俺はまず聞くべきだった質問をいまさら口にする。さすがに一言目から「誰だ？」は失礼な気がしないこともないが。

同年代の少年「え？ ああ、俺はコウタ。藤木コウタ。少しばかり

「ただ俺の方が早かったから先輩ってことで」

ケイスケ「それは認めない」

「これでも競争心は人一倍なもので。意固地って言われても仕方ないよなあ。」

ケイスケ「それじゃあ、俺も自己紹介しなきゃな。俺は睦月ケイスケ、ぴちぴちの15歳だぜ」

コウタ「あ、じゃあ同い年ってわけか、お互いよろしくな」

それを聞いて、少し安堵する。正直、俺よりも年上の奴ばかりだと思ってたからな。ところで、いつになったら指示が来るんだろうな。

コウタ「上官の人が来て説明してくれるらしいけど『うぎいやああいいいいいいいいアアアアアアアッ……イイイイイヴウウウあああああつ……！！！！』」

彼の言葉をさえぎって、突然、施設内に悲鳴が木霊する。受付やらあちこちやらからざわざわと声が上がったが、

コウタ「な、なな、なんだよ、今のっ……」

はっしとコウタは俺の手を握る。

ケイスケ「おい、手え握るな、痛い、痛いって……！」

あ、あれ、椅子が揺れてる？ なわけないか、揺れてるのは俺だよっ。

コウタ「確か、腕輪を今つけてる奴いたよな、そ、そいつがほ、捕喰されてっ、」

こ、ここは落ち着いてひひ否定しようぜ、お、俺っ。

ケイスケ「だ、大丈夫だと、おももも、おも、思ふうっ……」

——そして、騒がしかったエントランスに静寂が訪れる。だ、誰か何とか言ってくれよ、怖いって。

と、エレベーターから一人の女性が出てきた。……第一印象。でかい。どこかは言わない。第二印象。怖い。取って喰われそう。そして彼女は、俺たちの前で仁王立ちになる。そして、凜とした声で言った。
女性「立て」

……一瞬意味がわからなかったが、立つように命令されているのだと理解し、俺たちは立つ。さながら受刑者のようで、違和感を拭えない。——ところで、この声はどこかで聞いたような気がする。女性「私がお前らの上官を務める、雨宮ツバキだ。……先ほどの声の原因は黙らせておいたからもう問題はないだろう」

あの人沈黙させられたんだ。なんか良心が痛むなあ。そうこう思いながらあくびをすると、ツバキさんが俺をたしなめる。

ツバキ「睦月。何を考えているかは知らんが、上官の目の前であくびなどは控える。二度目は蹴り飛ばすぞ？」

ケイスケ「あ、あつ、すみません」

そうだ、ツバキさん、だっけ。この人は俺に帰れって言ったやつだ。思ったとおりやつぱり怖いな……。

ツバキ「メディカルチェックはサカキ博士の研究室で行われる。睦月は1500から、藤木は1630から。無論、時間厳守だ。……遅れるような真似をしたら、少々手荒な事をするぞ」

うわあ、絶対に遅れない。というか遅れられない。遅れたらたぶん命はない。

ツバキ「分かったなら返事をしろっ！」

ケイスケ・コウタ「は、はいっ！！」

二人の声が初めてそろった。——ツバキさんがエレベーターに乗ってエントランスを去るまで、俺たちは気をつけの姿勢でいた。

——「睦月ケイスケ」

ここで合ってるか、不安になりながらも室内に入る。室内には、椅子に座る初老の男性と、よくCMで見かけるここアナグラの宣伝部ちょ——もとい、支部長。

初老の男性は、ただただ俺には理解できそうにない機械をいじっていて、こちらに気づいている様子はなかった。

支部長「サカキ博士。……サカキ博士」

せんで——、支部長に二度呼ばれて、ようやく応える。

博士「なんだいヨハン、今は——おっと、もう来ていたのかい。予想よりも263秒も早い」

それって要するに制限時間ぴったりじゃないか？ 俺はそこまでルーズじゃありませんっ。

……とは言ったものの、ツバキさんに言われなかったら多分そうしてたと思う。

ケイスケ「それで、めでいかるちえつくって何をするんですか？ まさか、注射とかするんですか？ 他にも注射とか、あと採血とか接種とか点滴とか注射とかするんですよねッ？」

注射は大っ嫌いだ！ ここでサカキ博士がかぶりを振ってくれなかったら本気で泣いてたと思う。

博士「……まずは、自己紹介としようか。私はペイラー・サカキ。

ここフェンリル極東支部で技術屋、もといアラガミ技術開発統括責任者を務めている」

え？ アラガミ・・・ん？ 統括技術？ あれれ？

ケイスケ「なんですその早口言葉みたいな……。俺には縁がなさそうですね」

サカキ博士は、先に用事を済ませたらどうかと、せんで——、支部長に促す。

支部長「サカキ博士が自己紹介をしたから、便宜上だが私もすることにしよう。名前は知っているな？」

ケイスケ「えつと、……ヨハネスう、……えつと、よはねす、ふおん、——宣伝部長？」

あつ、眼光が鋭くなった。もしかしてこれ地雷っぽい？ 地雷だよな？

支部長「……では親切に教えてやろう。私はヨハネス・フォン・シツクザール。ここフェンリル極東支部の支部長を務めている。——

——今後は、間違えても“宣伝部長”と呼ばないように心得ておくように頼む」

へいへい、そうでありんすか、はあ。またややこしい名前付けて、親の顔を見てみたいものだ。……調子のもつてスミマセン。

支部長「さて、本題に移らせてもらおうか。……博士、これまでも重ね重ね言ってきたが、説明中に邪魔はしないように」

ピンポイントに釘を刺した。抜け目がないというか用意周到というか。

支部長「まず、初めに確認しておくが、ゴッドイーターはどのような事をするか、知っているか？」

ケイスケ「ええ、それくらい知ってますって。アラガミをちぎっては投げちぎっては投げ、瀕死になったらホールドラップで足止め

して捕獲用麻酔だ、」

支部長「どうやら一から説明する必要があるようだな」

あれ、違ったの？ いや合ってるでしょ、ゴッドイーターってそういう職業じゃなかったっけ。

支部長「主な仕事はアラガミのコアの回収及びアラガミの討伐だ。

コアはエイジス計画を推進するために使わせてもらう」

——エイジス計画。太平洋上に、周囲をアラガミ防壁で覆われた人工島・エイジスを建設し、生き残った人々を移住させるという計画。テレビで何度かエイジスを見たことはあったが、建設は最終段階に差し掛かっているように思われる。だけど、これだけは、これだけは聞いておきたかった。

ケイスケ「この計画が完成すれば、……みんな、みんな、助かるんですよね。俺の家族も、友達も」

その答えさえ得られれば、きつと心置きなく頑張れるはずなんだ。答えのない戦争ほど、馬鹿馬鹿しくて愚かなものはない。

支部長「——そのためには精進することだ。私からは以上だ、これで失礼する」

そう言葉を濁して、せん——、支部長は退室しようとした。

博士「ヨハン、ちょっと待ってくれないか？」

不意に博士が呼び止め、せん支部長は少し呆れ気味で応える。

支部長「博士、そろそろ公私の区別をつけては、」

博士「彼は、この支部の新型神機使いで、まだ若いから。大切にしてほしい。……君一人のものじゃあ、ないからね」

そう言っ、意味深に博士は笑った。宣伝部長も、笑った。——でも、目は笑っていなかった。

そして彼が退室するまで、俺は放置されっぱなしだった。

博士「よし、準備完了だ。それにしても、データを見る限り、君の潜在能力は私の想像をはるかに超えているようだ。ここまでとは思わなかったよ。……それじゃあ、そこに横になって、リラックスして。三時間後に目が覚めたら、そこは君の部屋のベッドの上だ。それじゃあ、始めようか」

言われたとおりにする。まず、シールつきの電極のようなものを体のあちこちに貼られる。なんだか少しこそばゆい。心電図が揺れるのがここから確認できるけど、いつもより早いのは、きつと緊張しているせいだ。

次に、酸素吸入の機械のようなものが顔に当てられる。そして、ゆっくりと呼吸をしてくれと博士に言われた。

……すると、急にうつらうつらとしてきて、

……博士の声が聞きとれなくなってきた、

……それが麻酔だと気づいたころには、

……電球が突然切れたかのように、目の前が真っ暗になった。

2002 自室

——「睦月ケイスケ」

目は開いたけど、まだ目が覚めきらなかった。頭が冴えないとい

うか、まだぼーっとしてる感じがする。できればもう三十分、たった三十分でいいから寝ていたい。そんな調子で、目が覚めてから既に二時間が経過していた。さすがに、これ以上の睡眠は無粋だな。

それにしても、今さっきから断続的に響くくぐもった音はなんだ？ 空っぽのドラム缶を打ち鳴らすような音が、ドンドン、ドンドンと響いている。……部屋の天井が鮮明に見えてきたとき、それがドアを叩く音だと気付いた。

ケイスケ「あ、あつ、はいはい、いまドアのロック外すから」

少し焦りながらドアのロックを解除する。そしてドアが開くと、いきなり鉄拳が飛び込んできて、俺は咄嗟にかわした。不意打ちかよ、きたねえ奴だなあ、おい。

不意打ち男「……貴様のことは、絶対に許さんぞ」

ただ一言が許されるのならば、全く理解不能と言うだろう。それほど彼の襲来は突然で、俺は彼のことを全く知らなかったのだからケイスケ「おいおい、いきなり襲ってきて名前も言わないってのはないだろ。まずは名乗ってからにしろよな」

俺の言葉に少し頭に來たようで、顔面目掛けて拳を振るった。怒りに任せた拳は、あまりにも避けやすい。静かな怒り、そっちの方が怖い。なんでかって言われたら、その、……お袋かな。うん。

ケイスケ「お前は俺の何が気に食わないってんだ？ とうか先に名前を言ってからにしろ」

それを言ってくれなければ話は進まない。そして彼は質問に答えない。

不意打ち男「理由は分かるな？ 簡単なことだ。貴様は俺に、恥をかかせた。何だか分かるな？」

ケイスケ「いや、だからさ、理由より先に名乗れよ」

すると、少し目線をそらして、……自分の名前が恥ずかしいのかは知らないが、小声で言った。

不意打ち男「——榊レキ、……17だ」

榊？ 博士と関係があるのかな。と、苗字の方はどうでもいい。問題は、

ケイスケ「レキい？ またまた女っぽい名前だなあ。やっぱり漢字で書くとっ——」

レキ「コヨミと書いてレキだ。そっちじゃない」

そっちってどっちだよ、おい。俺も一体何を言いたかったのやら。

ケイスケ「あ、その顔はどこかで確認した覚えがある。記憶領域の中から現在探索中つと。えーとお、確かー、……ああ、絶叫した奴そうかそうか。……んで、俺に逆ギレですか、そうですか」

レキ「違うつ！ 貴様が痛くないと言ったから楽——に構えてたらこのザマだ！」

真面目だったのか、完全に俺の冗談が通用してなかったんだ、正直者というかバカ正直というか、それとまただの馬鹿というか。……だけど、そんな彼の気持ちも察せず、軽い気持ちで答えたのは、俺だ。

ケイスケ「俺があんなこと言わなきゃよかったんだな、……悪かった」

俺が頭を下げると、俺があっさり謝罪したことに少しばかり呆気にとられているようだ。そんな様子をコウタは見た。

コウタ「あ、もう一人入ってきた奴いたんだ。ということはまさかこの人が叫ん、」

レキ「おい、貴様。本気で殴るぞ、もうずいぶん噂になってるじゃないか」

ケイスケ「そりゃああんたがあれだけ大きな声で叫んだんだもの、エントランス突き抜けてラボラトリまで聞こえたそうだよ」

ふと、レキは俺に向き直る。

レキ「おい、そっちの名前はなんだ？」

そっちと言われ、一瞬誰のことかわからなかったが、この場には俺とこいつとコウタしかないのでコウタのことだと判別した。

コウタ「ああ、俺？ 俺は藤木コウタ」

レキ「よし、コウタ。こいつの体しつかり押さえてる。大丈夫だ、すぐ終わる」

むんずつとコウタは俺の体をつかみ、しつかりと羽交い絞めにする。そして、レキは関節を鳴ら（そうとするが鳴らないので、鳴らすフリを）して不敵な笑みを浮かべる。くう、コウタ、俺を裏切ったな――！

コウタ「何が何だか分からないけど、こうした方がいいような気がするんだよ」

レキ「これ一発でチャラにしてやる。貴様の名前はなんだ？」

ケイスケ「え、えっ、……む、睦月、ケイス」

ケを言う前に彼の鉄拳が人中に食い込んだ。そして脳内が揺れて揺れてそのまま気を失った。

―― 2018 ケイスケの部屋

―― 「榊レキ」

レキ「その……すまん。本気でやりすぎた」

ケイスケ「ふあははひんひゅうひはいふほわほああはっは（まさか人中に入るとは思わなかった）」

別に狙ったわけじゃないのだが、ケイスケが暴れたことと、コウタがあまりしつかりと押さえられなかったことで位置がずれてしまったのだ。正確には眉間の少し上あたりを狙ったのだが。ちなみに、人中とは口と鼻の間である。あそこに入ると酷く痛い。

衛生兵「全く、すごい音がしたかと思ったら。もうこういうことはしないでよ！」

小競り合いの後駆けつけた彼女が、彼を介抱してくれた。どうやら衛生兵のようだが。髪はセミロングで、それを髪飾りでまとめているようだった。

レキ「……それよりも、わざとらしい。本当はもうまともに話せるんだろう？」

ケイスケ「ちえっ、バレてたか」

バレバレだ。そして、彼が立ち上がると同時に、腹がなった。コウタはそれがおかしかったようで笑い出す。

コウタ「確か、配給のチケットでいろいろ引き換えてもらったっけ。レキが代わりに引き換えに行つてあげたってさ。ほら、冷蔵庫の中身見てみなよ」

一応、俺ができる償いといえば、これぐらいである。しかし、彼がこの程度で許してくれるか。

彼は冷蔵庫を開けると、冷氣とともに、ささやかな配給品が入っているのを確認する。まず基本的な野菜。でかいトウモロコシに少し驚いた。あと、レトルト食品や、チューブ状のゼリーっぽいドリンク。そして炭酸や野菜などのジュース。

レキ「よし、俺が引き換えてやつたんだから正当な労働賃金としてジュース一本貰い」

ケイスケ「誰がやるかよ！」

俺なりの冗談のつもりだったのだが、真に受けられた。俺が言ったら冗談に聞こえないのか、そもそも冗談ってどんなものだろうか

……？

レキ「とりあえず、俺は自室でゆっくりディナーとしよう。これでも料理は得意だからな」

ケイスケ「ああはいはい、お疲れ様でございました」

小馬鹿にされながらも、俺は部屋を出る。そして腹は、空腹のサインを放った。

—— 2042 エントランス

—— 「睦月ケイスケ」

ツバキさんに俺たちは呼ばれたが、一体何があるというのだろうか？

*「よつ、お前らが新入りか」

突然声がかかって、弱虫の俺はビクツと震える。そして、落ち着いて声がする方向を見ると、一人の男が立っていた。

ケイスケ「え、ええ、はいはい。俺らが新入りですよ」

とりあえず俺は深呼吸をしながら応えることにする。すると彼は、ポケットからタバコを取り出してくわえる。そしてライターの火を、

受付の女性「リンドウさん、エントランスは禁煙です」

—— 受付の女性に咎められ、渋々タバコをしまう。

レキ「それで、どなたですか。……腕輪を見る限りは、神機使いの

ようですが」

レキが彼に質問したら、彼は口元に笑みを浮かべて答えた。
男性神機使い「ああ、そうだ。お前らは多分あねう——雨宮上官
に呼ばれているんだろう？」

あれ、いま姉上つて言おうとしたよな、それってもしかして。

ツバキ「よし、時間には間に合ったようだな——と、リンドウ。
こいつらにちよつかいを出したりはしていないな？」

男性神機使い「いいえいいえ。それでは、俺は少しデートに……」

そう言い残して彼はそそくさとエントランスを抜け出す。間違
ない。あの男、ツバキさんの弟だな。

ツバキ「さて、では訓練に行く。主に神機の操作、特に新型は銃形
態と剣形態の変形操作について理解しろ。これができなければ、一
生ミッシオンには出られんぞ？」

そ、そんなのはごめんだ。しっかり頑張らないとな、何のために
この職業に就いたんだ、俺！

そして俺たちは、訓練所へと足を運ぶ。訓練所はたくさんあるよ
うで、今から俺たちが行くのは、第二訓練所。

一体何をするかドキドキしてきた。このドキドキは不安なのか、
それとも期待なのか。そんなことは分かるわけがないが、俺たちは
戦場への一步を確かに踏み出していた。

2011 第二訓練所

——「睦月ケイスケ」

ツバキ「よし、そこまで」

ツバキさんの声がかかり、俺は足を止める。……神機はこんなにも軽々しいのに、膝が笑っている。体力には自信がある方なんだけどな。

ツバキ「最初は神機に慣れていないから大抵そうなる。じきに治まるだろう」

……とりあえず、一通りの動作を学ぶことができた。通常は一人ずつの訓練らしいのだが、やはり三人まとめて入隊されたのが面倒だったらしく、一度に行ったそうだ。そして、ようやく終了の時間となったので今日はひとまずこれで解散だそうだ。

ちなみにレキ（あとで年上だからさん付けにしろと言われた。殴っておいてそれはないから呼び捨てにさせてもらおう）と俺は、同じメニューをこなしたが、コウタはまた別のメニューだったようだ。旧型と新型の違いってのはこういうところで現れるわけか。

ツバキ「明日の朝はくれぐれも、遅れないように。少しでも遅れたら休憩はなし、予定の時間の二倍は動いてもらうことになるから、覚悟しておけ」

そう言われたら絶対寝坊する気なくなる。早く休みます、ばつちり寝て早起きします。

ケイスケ「ふう、やっと終わったか。あー、疲れたな」

レキとコウタは地面に仰向けになっている。俺はそこまで疲れてはいない——わけではない。だがへばったら負けのような気がする。なのでそういうことはしない。

ケイスケ「んじゃ俺はジュース買ってくるから、コウタも欲しかったらついでに買ってきてやるよ」

レキ「おい、俺は」

コウタの分だけ聞いて訓練所をいったん飛び出した。後ろからばかりやるーって声がかかったけど気にしない、あーあー、聞こえない

の言葉！。

自動販売機の前に到着。さて、コインを投入——あれ？

ケイスケ「こ、これどうやって使うんだよ、おい。硬貨投入口どこだ？ 居住区にあったやつと違うぞ？」

これは参った。さすがに手ぶらで帰るのも悪いし、うーむ、どうすれば買えるんだ……？

*「ああ、お前がうわさの新人か。こんなところで何やってるんだ？」

ケイスケ「え？ あ、え、えっ……と……」

—— 2013 第二訓練所

—— 「榊レキ」

レキ「まったく、俺の分はないってのは冷たい奴だな」

俺は溜め息をついて、そう愚痴る。

コウタ「そりゃあ恨みでしょ。痛そうだったし、あれ」

言い返せない。確かにあれは俺が悪かった。もっと謝っておくべきだったか。

レキ「ところで、聞きたいことがあるのだが。……なぜゴッドイーターになったんだ？」

俺はなぜかそんな質問をしてしまう。やっぱり疲れているみたいだな、今の俺は。

コウタ「なんで……って。かーちゃんと、ノゾミ——ああ、妹のことだけどさ——ノゾミたちをさ、守りたいんだ。……俺が守っ

てやらないと、二人を笑顔にしてやれないからさあ」

——強い奴だ。俺よりも年下のくせに、信念を持っていて、
…とても妬ましくて、自分がとても、

レキ「…情けないな、…俺は…」

自分に向かつて、そう呟いた。俺は、…逃げた。全てを投げ出して、目を背けた。だけど、仕方ないんだ。仕方なかったんだ。
…耐えられなかったんだ…。

コウタ「じゃあさ、レキはどうなんだよ。何か目的があつてなったんだろ？」

コウタの問いに俺は答えられない。だから俺はサツと立ち上がり、神機を持つて黙つて退室しようとする。

コウタ「…おい？ そっちが先に質問したんだから答えてよ」

レキ「——すまない。…今の俺には、——答えられないんだ」
俺はそう言つて逃げるように部屋を去った。

—— 2015 訓練所エリア廊下

——「睦月ケイスケ」

ある神機使い「ほら、こつやつたら出るぞ」

そう言つて彼は腕輪を電子部分に当てる。するとガコン、という音とともに、コーラが2本出てきた。

ケイスケ「支払い腕輪でできるんだ。——そういうの一切聞いてなかったからなあ、ははっ。てつきり現金かと」

俺は苦笑しながらそう呟く。

ある神機使い「ほい、コーラ2本でいいんだろ？」

彼は缶を渡すと、その場から去ろうとする。

ケイスケ「あ、えっと、代金は？」

ある神機使い「そいつは奢りだ、入隊祝い。いつか同じ任務に出られるといいな！」

笑って、彼は立ち去って行った。……入隊祝いなら、悪い気はしない。

ケイスケ「大森、タツミさんか。——いい人だったな」

俺も、彼のような人と任務に出たいと思った。

これ以上コウタを待たせるのは悪いので、さっさと戻ろうか——と。……ん？

ケイスケ「あれ？ レキ？」

レキ「——」

レキは、何も言わずにすれ違う。ということはもうすぐコウタも来るかもしれないな。

……だけど、彼の顔は、あまりいい表情には見えなかった。どうしたんだろうな、一体。

コウタ「あ、いたいた。何してたんだよ、すぐに戻ってくるかと思っただのに」

と、コウタが走ってきて話しかける。

ケイスケ「いやあ、買い方が分からなかったんだよ、ほら、居住区のと違うだろ」

俺はとりあえず弁解して、すぐに分かってもらえた。コウタは自動販売機についてはしっかり聞いていたようだ。意外だな。

ケイスケ「ところでどうしたんだ、レキの奴？ あんまりいい雰囲気

気じゃなかったみたいだよ」

コウタ「いきなりさ、なんで入隊したのかって質問して、答えた後にレキはどうなんだって訊き返したら、あんな様子になっちゃって」
ケイスケ「要するに地雷踏んだってことだな。そのうち機嫌も直るだろ、ほっとけばいいさ、ほっとけば」

コウタは、「そうかな?」という顔をしたが、勝手に納得したように、俺から受け取ったコーラのプルタブを上げて飲み始めた。俺も倣ってプルタブを上げ、揺らしすぎた炭酸飲料の洗礼を顔に受ける。

ケイスケ「うわっぷ」

0629 第二訓練所

——「榊レキ」

ツバキ「時間には間に合ったみたいだな——おい、起きてるのか、お前ら」

立ったまま寝息を立てる二人。こいつら、どこでも眠れるのか? レキ「気をつける。ツバキ上官が爆弾を持ってきたぞ」

ビクツと二人は震えあがり、目を覚ます。ちなみに言っておくと、爆弾ではなくスタングレネードである。

ツバキ「この名称は分かるな、睦月」

ケイスケ「えっと、……閃光玉?」

馬鹿か。それとも寝ぼけているのか?

ツバキ「スタングレネードだ。覚えておくようにな」

ツバキさんは直視しない方がいいと言ってピンを抜き、地面に叩

きつける。すると、閃光がほとばしり、爆音が鳴り響く。目をつぶったが、目の前が白んだし、耳がじりじりとなって痛くなった。

ツバキ「こいつはアラガミにも通用する。使い方は簡単だ。ピンを抜いて、地面に叩きつける。お前らにもできるだろう?」

レキ「無論だな」

俺はスタングレネードを受け取ると、ツバキさんがやったようにピンを抜いて叩きつける。

レキ「うおっ、眩しいっ!」

少し目の前がチカチカしてしまう。閃光と音が収まると、コウタも一つ受けとった。

コウタ「じゃあピンを抜いてっ。えい!」

ワンバウンドして、時間差で閃光を発した。どうやら力が少し足りなかったようだ。これではアラガミに隙を与えてしまう。

ケイスケ「それじゃあ俺も一つもらいっ」と

ケイスケは、ツバキさんからはしとスタングレネードを取って、ピンを抜いた。

ケイスケ「てえい! ……あれ」

思いつきり地面に叩きつけたように見えたが、不思議と反応がない。不発のようだな。

ケイスケ「なんだよお、俺がやった時だけこれってありか?」

そう言っただけケイスケは不発弾を拾い上げようとする。おいよせっ、こいつ、寝ぼけてるのか?!

レキ「ば、馬鹿っ、よ、よせ!」

ツバキ上官が制止しようとするも、彼は聞かない。

ケイスケ「大丈夫ですって、ツバキさん、これぐらいどうってこと、

」

案の定、マグネシウムはその一瞬で反応を連鎖させ、辺りが真っ白になる。俺たちは咄嗟に目をつぶったが、ケイスケは間に合わなかったようで、閃光の直撃を喰らった。

そして再び確認すれば、果たして彼は倒れていた。

コウタ「お、おい、ケイスケ！ 大丈夫かよッ？！」

ツバキ「睦月！ しっかりしろ、睦月！！」

——どうやら、完全に失神しているようなので、俺とコウタで病室まで運ぶことになった。面倒な真似を……。

—— 0652 病室

——「睦月ケイスケ」

ケイスケ「——ん？」

今さっきまで訓練所にいたはずだが……おかしいなあ。なんで俺、寝てたんだ？ しかもここって病室じゃねえか。

ケイスケ「ああ……、……そっか」

寝る前のことを思い出す。確か、不発のスタングレネードを拾おうとしたら、目の前で暴発して、そのまま昏倒してしまったんだっただけ。

ケイスケ「んあ、ツバキさん」

気づいたら横にツバキさんが立っていた。オーラが出てる。キレてるよ、絶対キレてるよこの人。

……そして、とりあえず彼女は一呼吸おいて言った。

ツバキ「普通の奴はあんなことはしない。どうしてあんなことをした？ 私には理解できない」

ケイスケ「いや、あれはその、……知らなくて……」

ツバキ「知らないじゃ済まされないこともある。だが、私が怒っているのはそういうことじゃない。……私の忠告を軽んじたことだ」
ケイスケ「っ、……それはっ……」

要するに、ツバキさんは俺が失敗をしたことを怒っているのではなく、それを防ぐための忠告を聞き流してしまったことに怒っているのだろっ。……甘く、見過ぎていた。

……俺が何も言えないでいると、ツバキさんは溜め息をついて、俺にとって最も恐ろしい言葉を口にする。

ツバキ「——向いてないのかもしれないな、……ゴッドイーターに」

心が抉られた。この感覚を、知っている。入隊した時の、あの躊躇いのとき。……でも、その時とは比べ物にならないくらい、心が痛くなった。

子どものころからずっと、ゴッドイーターにあこがれていた。でも、親にはなかなか言い出せなくて。そして、初めてなりたいた言ったとき、両親そろって向いていないと言った。

あのころのデジャヴ。嘘だ。嘘だ嘘だ。俺は、強くなったんだ。たぶん、いや、きっと強くなれる自信があるんだ。それを否定されて、俺は……俺は。

ケイスケ「そ、そんな、違いますって！ 確かに俺、非常識なところとかたくさんありますし、もっとたくさん迷惑かけるかもしれない！ それに、それにっ——俺、ただの馬鹿ですし！」

吹っ切れてしまう。もはやどうしようもない領域、自分で自分が嫌になる。だから、それを聞いて、ツバキさんが少したじろいだろうに見えた。

ケイスケ「馬鹿だけど、精一杯がんばりますよ！ みんなの邪魔にならないように戦って、誰ひとり傷つけさせない！ あいつらだって、親父も、お袋もっ！ たとえ俺がゴッドイーターに向いていようとなかつと、俺は絶対に、強くなるっ！！」

こうなつたらもうヤケだ。やけくそだ。それはきつと、あのとときずいぶん時間をかけなければ得ることが叶わなかった、覚悟に違いない。なんで今になってこんなにすんなりと出てくるのだろうか？

——そして、そのわけを自分で言いながら理解する。俺がただの、馬鹿だからである。馬鹿の俺が、追い詰められた末に見つけ出した、一つの決意。

そんな俺の熱弁を聞いて、ツバキさんは含み笑いをした。おかしかったのだらうな。笑いたいやつは笑えよ、これが馬鹿の俺の全身全霊の覚悟の表現だ。

ツバキ「いや、……本当に、若いころのリンドウにそっくりだと思つてな。確かに、向いている、向いていないじゃない。強くなる奴は強くなるし、変わらない奴は、いつまでも変わらない。……変われない奴がなぜ変われないか、分かるか？」

俺は考えるが、……やっぱりよく分からない。すると、ツバキさんは答えた。

ツバキ「—— 変わらない奴は、変わろうとしないからだ。変わりたいと思わないから、変わることができない。だから、強くなりたいたいと思う奴は、絶対に強くなる。それが心からならば。」

貴様のような奴は、大抵私がそう言ったらもう少し気の利いたことを言うのだが、それ以上の答えだな、これは。素晴らしいゴッドイーターになれると信じているぞ。……睦月」

ケイスケ「—— は、はい！」

なんだか心が温かくなったような気分。ツバキさんが、こんな人だとは思いもしなかった。……なるほど、だからこそ俺は、ここ極東支部のゴッドイーターにあこがれたんだ。

ツバキ「さて、しっかり休んだのならば、いよいよ本番だ。初めての任務だ。……いいな？ 時間に遅れたらそれ相応の罰は受けてもらう」

やっぱりいつもどおりのツバキさん。でも、それがいい。

だから、自信を持って返事をする。本当は、もう一度ベッドに潜り込みたくなるほど怖いのに。—— でも、覚悟と決意を言ったからには俺は、守るために、強くならなくちゃならない。

ケイスケ「…… はああああ、……ふうふうふう。——
よしッ！」

ゆっくりと深呼吸。そして俺はベッドを飛び出す。

そして病室を飛び出して、……廊下で足を滑らせて思いっきり転んだ。万事オーケー。

1・PLAYERS（後書き）

やっちゃった。やらかしてしまった。・・・処女作にして、歴史がグレーになっていく。

いやいや、こんな調子じゃだめだ。読んでくれている人がいるならば、頑張らないと！　というわけではじめてましてこんにちは。

今回のコンセプトは、『主人公がたくさんいたら？』ですね。無論、本編では一人で、こんなにおしゃべりじゃありません。だからって黙らせておくのはかわいそうでしょう？　いや、この理屈はおかしいか。

まだ一話目なのに、こんなに飛ばしちゃっていいかなあと思う。とりあえずアリサは出そう（笑）

それでは、また次回まで。

2・OPEN FIRE

0712 エントランス

「睦月ケイスケ」

コウタ「おいおい、遅いよー」

ケイスケ「ごめんごめん、寝坊しちゃってさあ」

レキ「……何が寝坊だ、今後はあんなへまはしないでくれよ」

ばつちり俺が下手こいてぶっ倒れたってことはバレてる。そりゃその場に居合わせたんだもんな。

コウタ「それで、初任務ってなんだろう？ ワクワクしてきたよ」

俺は足ががくがくしてきた。あんなに意気込んで病室飛び出してきたのにさ、もっと俺に勇気とかがあればなあ。俺のかいしよなし！

しばらく待っていると、煙草の臭いがした。見ればそこにはこの前会った……誰だったっけな。

レキ「ん……と、確か。リンドウさんでしたっけ」

リンドウさん？ ちょっと脳内散策ーっと。……ダメだ、顔と名前が一致しない。

リンドウ「また会ったな、新入り。お前らを任務に同行するのが俺の任務ってわけだから、今後ともよろしくな」

とりあえず俺はよろしくお願いします、と頭を下げる。続いてコウタ、レキと頭を下げた。

リンドウ「ところで……一つ質問するが、お前ら全員一遍に、任務に連れて行かなきゃいけないのか？」

早速、リンドウさんが頭をポリポリと掻きながら言った。

ケイスケ「ツバキさんがそう言ってたんじゃないですか？ 俺たちは初任務、としか聞いてないんで」

リンドウ「確かに俺はあねう、上官殿に一任されたが……三人はちよいときついぞ？」

リンドウさんは、少し考える素振りを見せる。やはり彼一人では俺たちは手に負えないのか？

女性「あ、リンドウ、ここにいたのね。部屋にいてもいなかったから少し探したんだけど——」

鈴を転がすような女性の声が俺たちの背中から掛かった。もちろん俺たちは背を向けているから見えないけど、リンドウさんはその女性を見て少々表情が和らいだように見えた。知り合いかな。

リンドウ「ちょうどよかったサクヤくん、ちよつと手伝ってくれないか？」

……ああ、なるほど、リンドウさんが何をしたいか分かった。

サクヤ「内容にもよるけど、ところで聞くけど、この子たちが新しく入ってきたのかしら？」

リンドウ「ああそうだ。——おっと、自己紹介を忘れていたな。俺は兩宮リンドウ。苗字を聞けばわかるだろうが、あのツバキ上官の弟だ」

この前のツバキさんの反応で何となく感づいてたけど、あんまり似てないや。

リンドウ「で、こっちが、」

そう言ってリンドウさんは、女性にこちらへ来るよう促す。そして目の前に現れた女性を見て、……男なら誰もが見惚れる体系に少し愕然、そのうえ露出度の高い服を着ていることに啞然、そして胸部に見ゆるは……ゲフンゲフン！ れ、冷静になれ、俺！

サクヤ「私は橘サクヤ。リンドウが迷惑かけたら私に言ってね、あ、でも私よりもツバキさんに言った方がいいかも……」

リンドウ「おいおい、勘弁してくれ」

サクヤさんが笑って、つられて俺たちも笑った。そして一通りの自己紹介を終え、サクヤさんは切り出す。

サクヤ「それで、何を手伝えばいいのかしら？」

リンドウ「こいつらを任務に連れて行きたいんだが、一度では俺一人だけだと手に負えないからな。誰かを手伝ってくれないか」

サクヤさんも俺たちと接触できるチャンスを窺っていたようなので、快くOKしてくれた。

リンドウ「んじゃあ、話し合いでもジャンケンでもなんでもいいからさっさと決めてくれ」

ケイスケ「俺はサクヤさん」

コウタ「俺もサクヤさん」

レキ「フン、……俺も、その、……橘上官がいいが」

リンドウ「っておい、ちよつと待てガキども」

そりゃあこんなおっさんよりかは、サクヤさんと一緒の方がいいに決まってるよな？

あ、少しリンドウさんの顔がこわばってきた。まだ辛うじて笑っているけど、目元が引き攣ってる。

ケイスケ「よし、ジャンケンだ。一番に負けた奴がリンドウさんとデートだぜ」

リンドウ「おい、何の罰ゲームだこれは」

レキ「妥当じゃないか。俺は構わない」

コウタ「うん、いいと思うよ」

リンドウ「そしてなぜ了承する」

リンドウさんのツツコミを無視して、三人の手が同時に出される。さて、誰が負けるのか？　ちなみに俺は結構ジャンケンに強い。結構強いんだよ、ホントに。

自信を持ってカツと目を見開くと。

0817 贖罪の街

――「睦月ケiske」

ケiske「ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶ……」
二人はパーを出した。おかげで俺はこのおっさんと一緒ですか、はいそうですか。

リンドウ「……俺のこと、どう思ってるか正直に言ってくれ。怒らないから」

ケiske「とっても頼りなさそうに見えるし、すぐにリスポンしそうな感じがするぜ」(すごいと思いますよー、俺の上官にはとてももったいないと思いますー)

リンドウ「本音と建前が逆だが」

しまったと思った時には時すでに遅し。微妙に怒っているように見受けられる。

リンドウ「それに俺のことを見くびってもらっちゃあ困る。一応姉上の弟だからな、相当強いぞ?」

確かにそれも一理ある。なんせ彼は『あのツバキさん』の弟だからな……。

ケiske「それじゃあちゃっちゃと始めちゃいましょうか、もうミッションは始まってますよ」

リンドウ「まあ待て。まずは上官から新入りへ出す三つの命令だ。言う通りにすれば何事もうまくいくだろう」

おお、折角だから聞いておこうか。強くなるためだからね。はや

くはやくと少し急かしてみる。

リンドウ「簡単なことだ。『死ぬな』、『死にそうになったら逃げろ』、『そこで隠れる』。『運が良ければ隙を突いてぶっ殺せ』。な、簡単だろう？」

ケイスケ「それ全部で4つです」

それを言っと、リンドウさん自身も気づいたらしく赤面した。やつぱり大丈夫かどうか不安になってきた。ホントに強くなれるのかな……？

……でもこれって、新人全員に言ってるってことは、まさかこれも計算のうち？ そうだったなら、

地味に謀略家かもしれない。たぶんないと思うけど。

ケイスケ「とにかく、そのルールを守れば一人前のゴッドイーターになれるんですよ？」

リンドウ「ああ、命あつてのモノだからな。——それじゃあ、そろそろ行くとしよう。できるだけ静かにしろよ」

リンドウさんがゆっくりと歩んでいく。俺はその後ろをゆっくりと付いていく。そして、目標を視界に捉えた。そいつは、この世にいてはいけない、鬼の形相でそこに居て。

夢中で何かを食べているようで、こちらには気づいていない。よく見ると、……金属の塊のようだが、よく分からない。

ケイスケ「……確か、オウガテイル、でしたっけ。近くで見るとやつぱり迫力がありますね」

リンドウ「しっ、黙っててくれ。できるだけ背後を狙うんだ。大抵のアラガミは奇襲が良く効くからな……」

少しずつ、目標に近づこうとする。足元に気をつけて、出来るだけ気配を消して、ただ音をたてないように進んで、……敵の背後に回り込むことができた。

リンドウ「捕喰の方法は分かるな？ 捕喰形態に切り替えたら一気に喰らえ」

それぐらい分かっている、たくさん訓練でしてきたと、心の中でボヤきながらも捕喰形態に切り替えて、……喰らう。血のような液体が、ピシッと顔に飛び散って少したじろいだ。

だけど、それ以上に気分が高揚して、体が軽くなったような気がする。訓練でもそんな感じになったが、えっと、バースト状態だったつけ。神機が活性化しているらしいからドンドン攻撃するといいそうだ。

ケイスケ「それじゃあ思い切ってくださいますから。リンドウさんは遠くでゆっくりお茶でも啜っててくださいよ」

俺は調子に乗ってそんなことを口にしてしまう。訓練であれだけやったんだ、こんな奴、一人でも片付けられる。片付けられなきゃ、……俺は強いゴッドイーターに、なれないんだ。

リンドウ「本当に大丈夫なのか？ 後悔しても知らんぞ？」

軽い口は、当たり前ですよと言った。

リンドウ「……よし、分かった。危険が迫ったら手助けに行く、それまでは絶対に手は出さないぞ。それでいいんだな？」

リンドウさんの問いかけに縦に首を振って、俺はオウガテイルに『ノコギリ』を振りおろした。彼の手は、煩わせない。

ケイスケ「ちえっ、はずしちまったか。次は当てる！」

突進をかわしてからステップ、そして斬り払い。神機の刃が目標の足に入り込む。

……ところで、どうでもいいことだが。俺がショットでもロングでもなく、バスターを選んだのにはちゃんと理由がある。ちなみにレキには一瞬で看破された。

レキ『強そうだから、だろ』

ケイスケ『な、なんで分かったんだ？』

レキ『おまえの性格からすればその答えしか思いつかなかった。単純というか、浅はかだな』

一発ぶん殴ってやった。年上だからってなめるなよ、同期なんだからな！！ そしたらやっぱり殴り返された。痛かった。

ケイスケ「バスターの大技と言えばチャージクラッシュだけど、うまくいくかな」

そう呟きながら剣に力を込める。バースト状態のときは早く力が溜まるってツバキさんに聞いたからな。自分に自信を持つと、絶対に決める——よし、決める！

ケイスケ「うおりゃあッ！」

だが、惜しくもその一撃は避けられてしまう。そしてがら空きになった懷目掛けて、オウガテイルは針を飛ばした。

ケイスケ「は、針だあ？！ そんなことデータベースには載ってなかったぜ？！」

俺は針を辛うじてサイドステップで回避しつつもリンドウさんに目配せをする。あくまで、手を出さないでいるようだ。……要するに、自分で蒔いた種なんだから自分でどうにかしろってことか。

……てか電話してる？ 電話してるよね！ なんでこんな時に電話なんかしてッ？！

すると突然、身体にえも言われぬ倦怠感が押し寄せる。バースト状態が切れてしまったようだ。それを見計らってか、オウガテイルの攻撃が激しくなってきた。

俺にしてみればとてつもなく危険な状態で、防戦一方、といった感じだが、傍から見ればあまりにも滑稽。舞台の上で踊る道化。

そして込みあがるのはこんな奴にも勝てない、という無力さ。どうすれば勝てるか、という思考が緩慢になってきている。

このままじゃどうにもならない、そう考えた俺は思考を回転させる。相手を足止めするには？ ホールドトラップ？ 駄目だ、仕掛けている場合じゃない！ ならばさらに耐えるか？ だがスタミナが足りない！ どうすりゃいいんだ、どうすりゃ！ 考えろ、考えろ、考えろ考えろ！！

ケイスケ「えっと、えっと、そうだ、えっと、せ、閃光玉！」

慌てるな。スタングレネードだ、閃光玉じゃない。自分にそう言い聞かせながら震える手先で何とかスタングレネードのピンを抜いた。そして地面に叩きつけて、急いで耳を塞ぐ。

敵が奇声を発し、よろめいた。チャンスだってことは分かっているけど、それでどうするんだ、攻撃する？ それとも一時退却？ ああ、落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着けお、ち、っ、けっ！！

ケイスケ「——わッ？！」

俺が狼狽えている隙にオウガテイルは飛びかかってきた。回避が間に合わず、俺はオウガテイルに押し倒される形で地に伏す。そして、その牙が左腕に喰い込んで、俺は苦痛な悲鳴を上げた。

リンドウ「新入りイっ！！」

遠巻きで見ていたリンドウさんがついに耐えかねて駆けつけた。そしてロングブレードでオウガテイルを斬り払う。再びオウガテイルからは体液が飛び出して、彼のロングブレード——『ブラッドサージ』は真っ赤に染まる。……真っ赤な血と、青空の対比。そんな、どうでもいいことを考えてしまう。

そして、オウガテイルが倒れこんだ隙に、俺はリンドウさんに連れられてちょうどオウガテイル目標と反対の地点へ行く。そして俺は地面に倒れこんだ。

ケイスケ「リンドウさん。……思った以上ですね、あいつ……い、いだった！」

死ぬほど痛いってほどの痛みじゃない。でも、擦り剥いた程度の痛みじゃない、……喻えるならば、包丁で指を切ったところに塩を塗りこんだような痛み。

強がってた俺が馬鹿みたいだ。戦場は、そこまで生温くはない。この痛みを以って、それは知らされることとなった。

リンドウ「とりあえず傷を見せる。……よし、これぐらいなら大丈夫そうだ」

リンドウさんは包帯を取り出すと、器用に俺の腕に巻きつける。うまいですねと俺が言ったら、サクヤさんに教えてもらったそうだし、サクヤさんは確か衛生兵だった。

リンドウ「やれやれ……とりあえずこれでなんとかなるだろう。痛みは侵蝕が原因だ、回復錠は持ってきただろ？ そいつを服用すればとりあえず侵蝕をある程度は防ぐことができる。本格的な治療は帰ってからだ、今は我慢してくれ。」

……今さっきは、一人で行くことを許したが、その結果どうなったかは、分かるな？ 一人での戦闘は極めて危険だ。実戦経験のない奴がおいそれで行うのはよせ。……手遅れになられたら俺が困る。

——俺は、お前らが所属する第一部隊のリーダーだからな。メンバー全員の命を背負ってる。だから、誰一人として欠かすつもりはない。新入り、お前らも含めて、な」

……この人、リーダーなんだ。そして、俺は彼の意志の強さに、感銘を受けた。さすが、ツバキさんの弟、いや、さすがリンドウさ

んと言ったところか。——俺の目標が、一つ決まったような気がする。彼のようなゴッドイーターになろう。彼よりも、上を目指そう。

俺は回復錠をポーチから取り出して一錠飲む。リンドウさんの言うとおり、痛みが少し引いた。これなら大丈夫そうだ。

リンドウ「よし、行けるな。今度は俺もサポートしてやる。——ところで新入り、名前はなんだ？」

紹介したのに覚えてないのか、この人は。その辺がちょっとリードアップくないというか。このあたりはならないようにしようか、うん。

リンドウ「睦月、ケイスケ、か。覚えた。改めて、よろしく頼むぞ、ケイスケ」

ケイスケ「分かりました、リンドウさん！」

と、グッドタイミングでオウガテイルは戻ってきた。それを見て俺たちは駆け出す。……と、リンドウさんにストップをかけられたケイスケ「？　なんですか？」

リンドウ「二人で近接で戦闘を行うと、互いの攻撃が干渉しあうことがあるからな。後方支援を頼めるか？　銃形態に切り替えてバレットを打ち込んでくれ。捕食した時のアラガミバレットを使うのも悪くないだろう」

そうとなれば話は別、俺は立ち止まって銃形態に切り替える。ちなみに俺の神機の銃パーツはアサルト。連射機構に惹かれたからだ。質よりも量っていいのかな。

確か神属性以外なら何でもOKだったっけ。とりあえず属性は氷でいいから撃とう。……まず、バレットを選択する。そして、照準を対象に定めて、あとはリンドウさんに当たらないことを祈りつつ、俺は引き金を引いた。

氷の弾丸はまっすぐ、オウガテイルの胴体に喰らい付いて、軽く吹き飛ばす。続いて捕喰時に入手したアラガミバレットを装填する。そして、一発、二発、三発とぶつけた。その針のような弾丸……いや、針そのものかもしれない。あやまたず、それらは全発アラガミに喰いついた。狙いは完ペキだな、俺ってサイコー！

リンドウ「よし、いい感じだ。もうすぐ仕留められるんじゃないか？ とどめぐらいは気持ちよく決めたいだろう、もうこいつは相当弱っているから思いつきり決めてやれ」

俺はリンドウさんが言っていることを察して、剣形態に切り替えて近づく。オウガテイルは起き上がるも、血のようなものを吹き出し再び倒れた（確か、フアンブルだったけ）。それを尻目に剣に力を込め、今さっきの痛みに対する恨みを少し籠めて……思いつきり、振り下ろしてやった。

その一撃は、オウガテイルを真つ二つに切り裂いて、返り血を剣いっぱいに浴びせる。

——もう、オウガテイルは動かない。既に、生命上に必要な活動を停止している。……それでもまだ生きているのがオラクル細胞。そう思うととても恐ろしい。

リンドウ「よし、……任務完了だ」

ケイスケ「——できた。——できたんだ、……俺。——倒せたんだっ……！」

血まみれの手で笑っている俺は狂っているのだろうか？ それとも、俺を狂わせるこの世界が狂っているのだろうか？ 武器を持つて敵を討つことが正義なのだろうか？

そんな難しいことは、今はどうでもいい。ただ、俺は、勝利の余韻を味わうことを、楽しんでいた。

ケイスケ「あいたあ！」

リンドウ「ん？ どうした、また痛みだしたか。それにしても、ここまで派手にやる新入りは見たことがないな。たぶん、おまえが一人目だ」

嬉しいようで嬉しくない。そりゃそうだ、褒めてるようには思えないし。

……と、ヘリが来る。いつの間にかリンドウさんが任務完了の連絡を取っていたようだ。

リンドウ「——ところでケイスケ。コアは回収したか？」

ケイスケ「……………あ」

辛うじて死体が残っていたからさっさと捕喰してコアを回収する。というか本来の目的はこっちなだから、忘れては困る。これで万事OK。俺たちはヘリに乗り込んで、アナグラへ帰投した。

0821 嘆きの平原

——「榊レキ」

吹き荒れる嵐、気候は最悪。ジメジメとしている上に、少し肌寒い。雨足はそこまで強くはないが、俺たちの服を濡らすには十分の量である。

レキ「橘上官、」

サクヤ「あ、私のことはサクヤでいいから。それで、何かしら」

レキ「それじゃあサクヤ上官。……雨が降ってない時の方が、安全に任務を進められると思うのですが」

俺がそう言うと、コウタが俺を小突く。なんだってんだ？

コウタ「知らないの？ ここ、ずっと雨が降ってるんだよ」

レキ「そうなのか。……それは初耳だな」

討伐対象のアラガミについてはしっかりと調べたが、肝心のフィールドについて調べるのを忘れていた。やはり俺は詰めが甘いなど、しみじみ感じる。

コウタ「それにしても変わってるね。時々このあたりで中継行われるからさ、いつも雨が降ってることくらい知ってると思ってただ……」

レキ「悪いが、新聞は経済に関するもの以外は取っていない。あと、テレビはもう家にない。……正直に言うと、昨日エントランスで久しぶりに見たときは小さい頃が懐かしくなった。本当に、あの頃はよかったと思う、……あの頃は……」

場の空気が徐々に重くなっていくことをその身に感じ、サクヤさんが咳払いをしてくれるまで、俺の心の中はどんよりとしていた。レキ「あ、これはその……すみません」

サクヤ「とにかく忘れる、もうすでにミッションは始まってるわ。マップを一度確認してみて」

俺はポーチにあらかじめ入れられていたマップを取り出して、確認する。

レキ「この矢印が、俺たちですか。腕輪のビーコンで位置を表示してるんですね」

サクヤ「そうよ。よく知ってるわね、結構調べたんじゃないかしら」

物覚えはいい方なので、あまり調べたわけではないが、一応『ゴッドイーター・ハンティングガイド』は一通り目を通した。……操作説明書ではないのは確かである。

コウタ「じゃあ、この赤い丸はなんだろう？」

サクヤ「これがターゲットのアラガミ。ほら、ここから見えるでし

よう？ マップだとあっちの方向だから、」

俺たちが向いた方向の先には、紡錘状のアラガミが見えた。このマップは常に腕輪（＝装着者）から視覚情報等を受信しているため、アラガミを視界内にて視認することができた場合、もしくは一定距離以内にアラガミが接近した場合、マップに表示される。逆にいえば視認できなければ場所は分からない。

その場合は超視界錠という薬品を使用するか、もしくは同等の効果を持つスキルのついたパーツを装着することで、腕輪の精度が一定時間向上するため、フィールド全体にアラガミの位置を確認することができる。

コウタ「……おい、レキ、レキい」

レキ「ん？ なんだよ」

コウタ「ん、じゃないよ。何ぼーつとしてるんだよ」

コウタに呼ばれて我に返る。つい講釈垂れてしまったようだ。しかし、誰に話していたんだ、俺は？

レキ「視認できる限りでは、渦を中心として三時の方向に一体、九時の方向に一体。・・・目標は三体だったような」

コウタ「渦の裏に隠れてるんじゃないかな、見えないだけで」

恐らくその可能性は高いだろう。そして、心身ともに準備はできたので俺たちが行こうとすると、サクヤ上官が止めた。

サクヤ「これはリンドウの受け売りなんだけど、一応言つとかなきゃね。えっと、……『死ぬな』。『死にそうになったら逃げろ』、『そんで隠れろ』つ。運が良ければ……えっと、なんだったかしら。運が良ければ？」

しばらく考えた挙句、サクヤ上官は携帯端末を取り出して通信を始める。誰かと話してみたいだ。

サクヤ「……もしもし、リンドウ？ ……えっと、運が良ければな

んだっただかしら？ …… だから、リンドウがいつも言ってる、……
そうそう、それよ。最後の運が良ければの下り。 …… そう、分かつ
たわ、気をつけてね」

そう言っ て通信を終了する。

サクヤ「運が良ければ隙をついてぶっ殺せ、だそうよ。リンドウらしいわね、ほんと」

リンドウ上官と話していたのか。ということは、まさか既にケイスケたちは任務を終えているのか？ …… く、こうしちゃおれん、さっさと俺たちも済ませないと。

焦れる心を抑えて、次にサクヤ上官は連携について話し始める。

サクヤ「あなたがアラガミに張り付いて、援護射撃をコウタと私で行う。回復の方は私に任せて、しっかりカバーしてあげるわ」

レキ「基本的に俺はバレットの方を多用しますが、剣の方も大丈夫ですよ」

俺の神機の刀身はショート。手数でカバーしつつ、消費したオラクルを回復する。そして銃身はスナイパー。射程もあり、貫通性能も他の銃身に優っている。文句無しでこいつが一番だろう。

サクヤ「それじゃあ攻撃を交えつつも後退して撃つ、要するにヒットアンドアウェイだけど、それもいいわね。どちらでも好きな方で構わないわ。 …… さて、長話もおしまい、本気出していくわよ。時間はまだまだ余裕が、」

彼女が最後まで言い切る前に、アラガミの声が木霊する。 …… その声は禍々しいが、たった三体だし、小さい。 …… しかし、サクヤ上官の顔が曇る。

サクヤ「 …… ちょっと急いだ方がいいかもしれないわね。リンドウ的に言うなら、やばい奴が来ているっていうのかしら」

…… どうやら、アラガミの声はこいつらではなかったようだ。そ

の、『やばい奴』が来る前に片づけないとまずいらしいな。
コウタ「準備は万端だよ、サクヤさん」
レキ「いつでも出られます」

そしてサクヤ上官は笑みを浮かべる。それが合図だった。

「任務開始！」

—— 0828 嘆きの平原

—— 「榊レキ」

レキ「あと、一体だな」

コウタ「えっと、どっちだろ、……あれ、あれ？」

コウタは突然マップを見て焦っているようだ。あっちを見たり、
こっちを見たり。一体どうしたというのだろうか。

サクヤ「どうしたの、コウタ？」

コウタ「いやその、マップが訳の分からないことになってて」

自分のマップを確認したが、別に変なことになっている様子はない。
コウタのマップを見ると、……ぐちゃぐちゃで、何が何だか分からない。

レキ「まさかコウタ、壊したわけじゃないよな？」

コウタ「違うって！ 確か、このクーンメイデン……だっけ。背後から攻撃してて、いきなり肋骨が飛び出してきたのを喰らった後から見えなくなっちゃって」

クーンメイデンの肋骨には神経性の毒が含まれているらしい。
主に視覚に影響するらしいが、このような形で現れるとは驚きだ。

サクヤ「これはきつと、ジャミングね。抗ジャミング剤は持つてるかしら」

コウタ「いや、そもそも渡されてないからどういふものか分からないよ……」

それなら自然回復を待つしかないと、サクヤ上官は言う。溜め息をつくコウタに、俺たちがカバーするから少しの間我慢しろ、と励ました。

レキ「——ときにコウタ、一応言っておくが。……肋骨じゃない、肋骨だ。読み間違えないよう気をつけることだな」

コウタが信じられない、と言いたげな顔をする。まあ読み間違いは誰にでもある。

レキ「さて、残すは後一体。『やばい奴』が来る前に早く片付けよう。捕喰して十分にアラガミバレットも溜まっているから、有効活用させてもらうとしようか。サクヤ上官、後ろは任せましたよ」
サクヤ「了解よ」

俺は軽い足取りでコクーンメイデンに近づく。向こうもこちらに気づいたようで、ジャベリンを飛ばしてきた。それをステップで回避し、背後をとる。

4回の切断攻撃からの銃形態への変形、そしてレーザーを1発ぶち込んで、反動で全方位攻撃をかわす。ここまでは思惑通り。さてあと何回繰り返し返せば倒れるだろうか？

その時、背後から自動ホーミングレーザー弾とホーミング通常弾が、数発ずつ飛んでくる。援護射撃か、これはありがたい。さあ、次はどう攻めるか？

……コクーンメイデンは攻撃してこない。ならばこちらから仕掛けよう。まずは、ジャンプ3回斬りからの急降下突き、再び3回斬り、そして捕喰。バーストモードに移行して、さらに攻撃の手を早める。為す術もなく、コクーンメイデンは腹を開いてダウンする。

さて、俺ばかり活躍するのは気が引けるな。

レキ「コウタ！ リンクバーストは知っているかッ？！」

コウタ「うん！ それがどうしたのっ！？」

俺はジャベリンを2発、受け渡す。コウタはそれを受け、リンクバースト状態になった。

サクヤ「これが、リンクバーストね。初めてみるけど、コウタ、大丈夫？」

コウタ「はい！ よおし、みなぎってきたー！！」

変に調子に乗り始める。それだけ、リンクバーストの力は恐ろしく強大なのだろうな。そして、コウタは力を込めて、引き金を引いた。

コウタ「すっごいの喰らえーッ！！」

最早頭のねじが緩みかけているレベルではあるが、『濃縮ジャベリンレベル2』は天を貫き、コクーンメイデン目掛けて地ごと貫く。

……その一撃でコクーンメイデンは力尽きた。

レキ「すごい威力だな、……間近で見えていて、恐ろしいと感じるほどだ」

それにしてもこのコウタ、ノリノリである。俺は一通りの捕喰を済ませて、迎えのへりを待つことにする。

コウタ「もうすぐ来るみたいだけど。——ところでサクヤさん、さっき言ってたやばい奴って何？」

サクヤ「いずれ戦わざるをえない時が来るかもしれないから話しておくわ。……そいつは、ここ嘆きの平原にしか出現することはないの。その名は、ウロヴオロス」

名前からして、おどろおどろしい。肝心の見た目の方はどうなのだろうか。

サクヤ「体軀は悠にこのフィールドの大部分を占めるほどね。高さもそれなりにあるわね」

レキ「っ、大きすぎるっ……！ 確かに、そのようなアラガミが出

たらひとたまりもないな……」

出会ったら即刻逃げなければ危険だ——む？ この赤い小さな四角はなんだろうか？

サクヤ「この四角？ ターゲット以外のアラガミよ。……それってまさか」

俺は、いや、たぶんここに居た全員が何かに祈った。予想が外れているようにと。しかし、やはり神なき時代に願いを聞くものなど、……いないと言うことを思い知らされた。

ドズン、ドズンと、背後から地鳴りが響いて、足がガクツとなる。まさかとは思ったが、ゆっくりと、ゆっくりと俺たちは振り向いて振り向いて、振り向いて振り向いて振り向いて振り向いて。

その体軀は確かに巨大で、俺たちの手に負えないことは明白であった。

サクヤ「——ヘリはまだかしら。もうそろそろ来てくれないと、困るわね」

レキ「リンドウさんは確かなんて言っていましたっけ？ よし、コウタ。言ってみろ」

コウタ「うん。逃げるな、」

レキ「それは違う」

逃げなきゃ死ぬだろうが。っと、そうこう言ってる隙に、ウロウオロスはこちらへ向かってくる。太刀打ちできるわけがない。だから俺たちはリンドウさんの受け売りで、戦略的撤退を決め込んだ。

地面から襲い掛かる触手のようなものを避けながら走る。どこまでも、どこまでも奴は追ってくる。幸いあまり速度はなさそうなので円形状のステージをレースゲームのごとく駆け回る。時々方向転換をしながら逃げ続け、目が回りかけた時に、待ちわびていたヘリが到着したのが確認できた。

サクヤ「はあ、ふう、……やっと来たみたいね」

コウタ「ハア、ハア……た、助かったあ」

レキ「……がふあつ、げほつ、……や、……やっと、うごほつ、……き、来たかつ……げほつ、ごほつ……」

コウタ「レキ、大丈夫？ 息が大変なことになってるみたいだけど、まずコウタが、次にサクヤさんはコウタが手助けしてもらって、最後に俺は二人に手伝ってもらって（実質引き上げてもらったわけだが）、高台に上る。そしてヘリは平原を去った。

ヘリが飛び立って、ようやく息が整ったところで、俺は思ったことを口にする。

レキ「いずれ。……いつかは分からないが、いずれ倒すべき相手になることは、間違いないな」

サクヤ「ええ。そのためには、たくさん経験を積む必要があるわね」
いつか、あいつを倒して、——答えを見つける。俺が選んだ道が誤っていなかったことを証明してみせる。

コウタ「ひくしよい！」

と、コウタがムードをぶち壊す。というか、少し寒いな。吹き込む風が冷たい。

サクヤ「濡れたままでいると風邪ひくわよ。はい、タオル」

サクヤ上官にタオルを渡された。これはありがたい。……それにしても、ヘリコプターに乗ったのは今日が初めてなのだが、ドアがこんなに簡単に開くとは思わなかった。下を見ると本当に生きた心地がしない。このまま落ちてしまうのではないかと、少し不安になる。

コウタ「今どの辺りにいるのかな？ うわっ、瓦礫ばかりでよくわからないや」

コウタがそう言ったので俺も窓の外を見てみることにする。コウタの言ったとおり、よく分からない。この地に本当に昔、人が住んでいたのかすら、疑われるほどである。

——ん。それにしても、……気持ち、悪いッ……。

サクヤ「とにかく、みんな目立つような怪我もしてないし、よかったわ。次もこの調子でいきましょうね」

コウタ「うん、それじゃあ次も頑張ろうぜ、レキ——あれ、どうしたんだよー、レキ？　おーい、大丈夫？」

そしてしばらく、俺は乗り物酔いの恐怖と苦痛を味わうこととなった。

2・OPEN FIRE（後書き）

さてさて、ようやく新型2人が初任務ですね。サクヤさんに今回は協力していただきました。ありがとうございました！。

この流れ、次回はまさか例の人物が登場するか！？ さて、生きるか死ぬか、全ては頭上にかかっている！！ 次回、『華麗なるエリック伝説！』、お楽しみに！

冗談です、すみません。しかし、次回には登場するはず。もちろん任務へはあのキャラも同行するからね。あとは新型キャラももう一人投入すれば豆乳鍋の出来上がり。

それでは次回まで。

3・STRANGER

***** 輸送用ヘリ内

——「N/A」

……オレは目を閉じる。……何も見えない。ただ、バラバラとローターが高速で回転する音だけしか、聞こえない。……本当に退屈だ。

オレは、操縦士に現在地について質問する。彼曰く、現在患者の空母の上空を通過中らしい。目的地まではまだまだのようだ。

仕方なくオレはヘッドフォンを耳に当てて、再生ボタンを押した。……だけれども、邪魔な音は消えない。

やっと、戻ってこれた。長かった。本当に長かった。何度悔やんでも、この心が癒えることはないだろう。謝ってももう遅い。……オレが強ければ、あんなことにはならなかった。

これからやることは、復讐。ただの自己満足。——それでも、『彼ら』の弔いになるのなら……自らの手を血に染めることは厭わない。それが、『オレたち』の罪だから。

不意に機体が揺れる。俺は目を開いて、辺りを見渡した。

……どうやらアラガミの襲撃のようだ。ザイゴート数体、それらを統率しているのはサリエル、いずれも墮天種ではない。ヘリに備え付けられた対アラガミ迎撃用オラクル銃も、ここまで多ければ相手にできそうにない。

——死の覚悟？ そんなものはいらない。ここでオレが、オレ

タチが死ぬはずなど、ないのだから。

……『彼』はこんな時でも悠長に寝ていられる。そして、サリエルのレーザーが操縦士を貫いて、ザイゴートたちは機体前方を一斉に捕喰する。

動力を喪失したヘリは重力という物理法則に従って、殺伐とした大地へ、空母へと落下していく。

この高さから落ちてしまえば、間違いなくこの地に肉片一カケラ余さず捧げることになるな。回避するには、タイミングよくヘリから飛び降りる必要があるだろう。運が良ければ骨の一、二本で済みそうだが、タイミングを外せばオレタチはまず死ぬな。

——と、『彼』がようやく目を覚ましたようだ。そして、事態の深刻さに少々焦っているようだが、幸いにもオレタチは、身動きがばつちりとれる。

そして、地上が見えてきた。オレが地上に近づいているのか、地上がオレにぶつかって来ているのか。そんなことはどうでもいい。ただ、オレタチは生きるために……死ぬために、生きている。寿命を削ってまで、生きて、死のうとしている。

*「——本当に、莫迦野郎だよ、……オレタチは」

本当に馬鹿だなあと、『彼』に嗤われる。別に構わない。生きるためなら、莫迦者と罵倒されようが、痛くも痒くもなんともないからな。

そして地上がオレの目先10メートルほどになる寸前に、オレタチはヘリから飛び出した。舞い降りるようになって、そんなにきれいには降りられるはずがなく。だから、どしゃつと足から、そしてガクツとへたり込んで頭を突っ込んで、……ガシャンと大層な音とともにヘリが落下して、それでおしまい。

そして、破れた燃料ボックスに火花が散り、大炎上。あとはこの血塗れた体がどれだけ持つか、そして誰かがあとどれぐらいいたら来るかだが。

*「あの、何か落ちる音がしませんでしたか？」

*「そうか？ 別にそれらしきものは——」

オレは運がいい。既に誰かが近くにいたようだ。だから、安心してオレは四日ぶりの睡眠をとることにしよう。それじゃあお休みなさい、また誰かが起こしに来るまでオレは寝る。というか、頭を打ち付けた衝撃で、意識が朦朧としていて、うつらうつらとしてきた。

*「だ、大丈夫ですか？！ えっと、そうだ、……」

……騒がしい奴らだな。そう思ったのを最後に、意識を保つていることが耐えられなくなつて、オレは再び目を閉じた。

—— 0857 自室

——「睦月ケイスケ」

帰投して、報酬を頂戴して、ツバキさんの話を聞き流して、病室で手当てをしてもらつて、エレベーターで新人区画まで行つて、ドアを開けて、……ようやくベッドに倒れこむ。とくにスタミナは切れかけていた。まあ少し休めば回復したわけだが。

朝食は既に摂つたし、1時間後にはサカキ博士のありがたいお話があるそうだが、それまですることは一切ない。眠気があるわけもないから、とりあえずその辺をぶらりと歩くことにする。ついでに、あいさつ回りというのもいいだろう。

そして部屋を出て、……新人区画の静けさに、少し不安を感じた。とりあえずエントランスで時間をつぶそう。そう思って、俺は自室の扉の鍵を閉める。

0900 エントランス

――「睦月ケiske」

ソファで座って寛いでいると、誰かが来た。えっと、確か彼の名前は――タツミさんだったっけ。

タツミくん？ ああ、新入りの。ケiskeだったな、確か」

名前を覚えててくれて助かった。そして、俺の腕の傷を見て少し心配しているようだ。

ケiske「大丈夫ですって。ただのかすり傷かすり傷、あいたた」

あの程度の侵喰ならものの数日で完治するらしい。だがあまり無理をしないことが大切だそうだ。ごもつともである。

ケiske「そういえば、ここへ来た時からずっと気になってたんですけど。そちらの女性は何？」

受付にいる女性だが、彼女は何をしていて、誰なのだろうか。タツミさんが答えようとすると、彼女が直接答えてくれた。

オペレーター「私はここフェニル極東支部のオペレーターを務めています、竹田ヒバリです。ミッシンの受注や外部・内部からの通達などは私がすべて承っております。何かあったら気軽に声をかけてくださいね」

――ヒバリさんの顔を見る。そして、タツミさんの顔を見る。

そして、またヒバリさんの顔を見る。

ケイスケ「……いや、ないか」

タツミ「何がだッ!!」

タツミさんに突っこまれた。そういう反応をしたってことは、やっぱり二人の関係って、

ヒバリ「ん?」——あ、はい。……そうですか、分かりました。

それでは。……どうやら残りの二人も帰ってきたみたいですよ。ちよつとした災難に遭ったみたいですけど」

ケイスケ「災難? やばい敵みたいなのが出たとかそんな感じかな

……」

俺がそういうと、どうやらビンゴだったようだ。ウロ何とかっていうアラガミに追っかけられたらしい。そりゃ災難だ、よく分からないが。

と、ゲートが開いてサクヤさんとあいつらが入ってくる。

レキ「くっ、やはり既に帰っていたのか。しかし、俺たちがミッシヨンに出ていた場所の方が遠いから当たり前だがな」

何負け惜しみみたく言ってるのさ。

コウタ「あれ、怪我してるみたいだけど……大丈夫?」

ケイスケ「まあ、別に軽いケガだし、つば付けときゃ治るさ」

そして、サクヤさんがツバキさんのところへ一緒に報告に行きましようとして声をかける。そして、一時的だが別れた。同時にタツミさんも自室に戻るようなのでエントランスから離れる。

——カタカタとキーボードを打ち雑務に追われるヒバリさんと、ソファアーに座って暇を潰している俺。打鍵音と、自動販売機とターミナルの稼働音以外、何も聞こえない。……そして、ピリリと連絡が入ると同時に、リンドウさんが外から戻ってきた。どうやら煙草を吸っていたようで、少し煙臭い。

リンドウさんは俺に、お疲れさんと言った。だから俺もお疲れ様でしたと返した。

リンドウ「で、今回のミッションはどうだった？」

ケイスケ「あ、えっと。……やつぱり、頑張らなきゃな。あと、自信過剰にも注意——みたいなところで」

そして彼は、気楽に頑張ろうや、と励ましてくれた。気楽にできればここまで苦労はしないんだけどなあ……。

と、通信を終えたヒバリさんの顔が険しくなった。

リンドウ「どうしたんだ、ボーイフレンドと喧嘩でもしたのか？」

ヒバリ「そんなんじゃないやありませんっ。……地下の対アラガミ装甲が破損していたようなんです。何か良からぬものが入ってきていなければいいんですけど……」

良からぬもの。まあアラガミのことで間違いなさそうだな。

……リンドウさんも自室に戻るようだ。またエントランスは俺とヒバリさんの二人になってしまふ。さすがにいつまでもエントランスで時間を潰すのは不精だと思って、俺も自室に戻って退屈な時間をテレビでも見ながら過ごすことにする。

リンドウ「——ん？ エレベーターが来ないな」

壊れてしまったのだろうか。しばらく待ってみたが、やはり来そうにない。

ヒバリ「技術開発部に連絡入れておきましょうか？　すぐに修理に来ると思いますよ」

リンドウ「ああ、そうしてくれるとありがたいが——お、やっと来てくれたみたいだ」

ケイスケ「うーん、何か嫌な予感がする」

そう思いながらドアが開くのを待った。……そして、ドアが開いたので中に入ろうとする。

ケイスケ「あれ？ なんだこいつ」

こけしのようなドでかい何かがぼつと一個。リンドウさんは俺の腕を引つ張ってそいつから引き離す。そしてドアが閉まると、…鋭い棘のようなものが、金属のドアを貫いた。

ケイスケ「な、なんだあれ、も、もしかして、あ、アラガミ……？」
リンドウ「ああ。あいつはコクーンメイデン。まあ、小型のアラガミだから脅威は小さい。だからと言って油断していると痛い目にあるから、気をつけろよ」

そしてリンドウさんが神機を持ってきて、サクツと倒してしまう。ちなみに、こいつ——コクーンメイデンは、一体出てきたら十体は出るらしい。こいつがまだ九体はいるかと思うと、少しぞつとする。

忘れてしまった方がよさそうだ。とにかく、自室に出てこないことを祈る。

—— 0948 エントランス

—— 「榊レキ」

レキ「なんだというんだ、怖いというべきか心臓が止まりかけたというべきか……」

コウタ「寿命が一、二年縮んじやったよ……」

ツバキ上官と話していると、突然間からぬつとコクーンメイデンが生えてきた。ツバキ上官がサンドバッグよろしく殴ったらしばらく気絶してしまったようだ。ツバキさんって本当に人間なのだろうか？ 無論、そのあとは俺の神機で駆除しておいた。

ヒバリ「気を付けてくださいね、まだいるそうですから」

えっと、オペレーターの……ヒバリさんだ、彼女はそう言った。また出てきたらひやっとするのに間違いないな。

レキ「そういえば、ここであいつもゴッドイーターをやってるそうだが、……今はミッシェン中だろうか」

コウタ「あいつってどいつだよ？」

コウタに聞かれたので、彼について語ろうと思ったが、それは許されなかった。

[illegible]

耳をつんざく高周波。そして余分に聞こえる低周波が鬱陶しい。スタングレネードに比べるとはるかに劣るが、それでも少しきつい。コウタ「もしかしてまた、」

レキ「俺じゃない。——それにしても今の声は……まさか……」
聞き覚えがあるというか、昔は何度も聞いていた、あいつの声に
間違いないだろう。

そして『彼』は、エレベーターから飛び出して、少し息を切らした様子でいた。

『彼』「な、なぜ華麗な僕の部屋に、こ、コクーンメイデンがいるんだ?!」

コウタの頭に疑問符が乗った。おそらく『華麗』の部分に引

レキ「久しぶりだな、フォーゲルバイデ。傷だらけの満身創痍でいたか？」

ちよつとした再開のあいさつだ。意趣返し、いや、ここまで来るとわざわざらしいのだが、傷一つなく無事でいたか、と意味で言っ

た。

フォーゲルヴァイデ「な、君は榊っ！　なぜ君がここに——そ、その腕輪はっ！！」

わざわざしつかり見えるように腕輪を見せつけてやる。驚きつぷりが懐かしくて、そんな彼が見れて少しうれしかった。

レキ「今では俺はお前の後輩だがな。だけどよ、昔と変わらない関係でいようぜ」

そういうと少し機嫌がよくなった。すぐ調子に乗るとこれだ、お互い様だが。まあ憎めないからよしとする。

コウタが少しこちらを見ている。——彼とは大抵インフォーマルな話し方をしているから、意外だったのだろう。

コウタ「知り合い？」

コウタが俺に訊いてきたから、俺はエリックに自己紹介を促した。フォーゲルヴァイデ「僕はエリック。エリック・デア」フォーゲルヴァイデ。もちろん、君の上司であり先輩さ」

レキ「こいつとは昔からの付き合いでだな、……まあ正直言っちゃあ腐れ縁なわけだが」

たまたま家が近所で、たまたま親同士の付き合いが多かっただけだ。だが、たまたま遊んでいたわけではない。お互い遊び相手として十分気に入っていた。もっとも、年齢が近かったという理由もあったわけだが。

昔は、射撃勝負と称してモデルガンを二丁持ってきて、缶や瓶を撃ち合ったものだ。ちなみにはば互角だったが、勝った回数は微妙に俺のほうが多い。

ときどき友達全員で集まってサッカーをしたが、知識だけの俺は、全くダメダメだった。こいつにはいつも負かされたものである。エリックシュートは俺たちの中では『最強の必殺技』だったわけだ。もう一度聞いてみたいものだ。

コウタ「とりあえず、よろしくお願いします、……えっと、」
フォーゲルヴァイデ「僕のことはエリックと呼んでくれて構わない。もしミッシヨンと一緒にいることがあったら、露払いは任せたよ」
相変わらず上から目線である。そしてプライドも人一倍でかくなつてゐるみたいだ。——でも、変わらないでいてくれて、少し安心した。

レキ「……ところで、一つ聞いていいか？」

フォーゲルヴァイデ「ああ、構わないさ。何でも聞きたまえ」

フォーゲルヴァイデが入隊したとき、窓の外からその様子を見送った（直接見送りはなかったが、『勉強の時間』のおかげで許されなかった）。——だが、一緒に、近所の『あのガキ』がいるのを見た。そして俺は理解した。あのガキも、入隊するのだと。

レキ「あのガキ、どんな調子なんだ？」

フォーゲルヴァイデ「あのガキ……、あ、ああ、彼のことが。元気そうだよ」

フォーゲルヴァイデは、少し言葉を濁す。コウタは『あのガキ』が誰か分からないようだ。俺たちだけの内輪話だから仕方ないか。

と、そこへダルそうな顔をしながらケイスケが現れる。

ケイスケ「あー、やっぱり自室は退屈だーッ！ お、レキ、コウタ、

……と、こっちは誰だ？」

フォーゲルヴァイデ「僕はエリック、エリック・デア」フォーゲルヴァイデさ。君の先輩で、彼の知り合いさ」

簡素な自己紹介を済ませた（これでケイスケが納得するかどうかは別として）エリックに、ケイスケは握手を求めた。

フォーゲルヴァイデ「君も、僕を見習って華麗に戦ってくれたまえよ？」

そしてエリックとケイスケの手が触れる。

——が、ケイスケの手は不意に払われた。誰に？ ああ、『あのガキ』以外の誰でもない。

『あのガキ』「師匠の弟子は、俺だけだ」

……無論、フォーゲルヴァイデがこいつを弟子に取っているわけではない。こいつの思い込みだ。

フォーゲルヴァイデ「ヨシツグ。……まだ君を、弟子に迎えてはいないし、弟子にするつもりもない」

ヨシツグ「なら、今すぐ弟子にしてください。師匠のその、華麗なる伝説に俺は、魅せられてしまった！ だから俺は、俺は師匠の弟子なんです」

何を言っているのかさっぱりだ。こいつ、俺が見ない間に一体どうしてしまったんだ？

いや、彼のフォーゲルヴァイデに対するあのような態度は、今に始まったことじゃない。彼は昔からそうだった。誰彼構わず見下したが、フォーゲルヴァイデだけには、いつも尊敬の念を込めて接していた。実際、当のフォーゲルヴァイデもこんな感じ（いや、ここまで酷くはなかったか）だったせいもあるのだけれど。

しかし、ここまで彼が歪むとは……一体俺の居ない数年の間に、何があったというんだ？

フォーゲルヴァイデ「何度も断ったじゃないか、確かに僕は師となる器であると自負しているさ、君も僕を師にあおぐ器がある！だが、君と僕とは方向性が全くと言っていいほど違う！……すまない、どうか、華麗なる僕を許してくれたまえ……」

何とも思えない上がりである。少々自惚れすぎてないか？……たぶ

ん建前だな、建前に違いない。

そしてしばらく経って、ギリリと齒ぎしりが聞こえた。彼は背を向ける。

ヨシツグ「——絶対に、弟子になりますから。師匠」

そう言っで、エレベーターを待つ。そしてケイスケは問う。

ケイスケ「どうして彼を弟子にしてあげないんだよ？ 形式上でも弟子にするって言っといたほうがよかったんじゃない……」

フォーゲルヴァイデ「彼の神機はアサルト。それに対して僕はブラストを使って数多の華麗なる伝説を作り上げた。僕には、彼に教えることなど、……教えられることなど、一つとしてないのだよ……」
一瞬、奴の体が強張るのが見えた。……そしてドアが開いて、吸い込まれるようにして彼はエントランスを去った。

コウタ「なあ、あいつ誰なんだ？ 華麗なエリックはヨシツグって呼んでたけど」

『華麗な』を付ける必要性について問いたいが、質問を質問で返すのは失礼にあたる。

レキ「前田ヨシツグ。ケイスケたちと同じ年だ。フォーゲルヴァイデと一緒に彼は入隊し、今まで戦ってきた。……さすがに、俺は彼がここでどのようなことをしたかは知らないがな」

フォーゲルヴァイデに彼について聞くと思ったが、主観的になっでしまいそうだから、あまり会話をすることのないと思われるオペレーターとのヒバリさんに聞いてみた。

ヒバリ「え？ ……そうですね。彼に私もよく苦労させられます。何かと難癖をつけることもあれば、ないものねだりをする。オペレーターは機械のように黙って人に言われた通りのことをしていればいいと言われたこともありますし……」

彼らは、彼がどのような性格をしているか、よく分かったようだ。レキ「恐らく、奴はこの支部のほとんどの奴を敵に回してる。親の七光とは言ったものの、時代錯誤が甚だしいな」

ケイスケ「ななひかりって、なんだそりゃ？ 臨兵闘者皆陣烈在前？」

レキ「ケイスケ、それは九字だ」

なんというマニアックなものを……ニンジャというものに興味があるのだろうか？

コウタ「必殺技みたいなものだよ、必殺・セブンスパーク！ とか……呆れてものも言えない。ネーミングも少々陳腐だ。」

フォーゲルヴァイデ「華麗な僕が説明しよう。ヨシツグの祖父は、ここが日本と呼ばれていた頃、内閣という政治機関のトップ……要するに大統領のようなものだった」

ケイスケ「ダイトリヨー！ ひえーっ。そんな奴の孫だったとはびっくりだぜ。……で、あいつが偉ぶってるのと同じ関係があるんだ？ それを聞く限りじゃ、天狗になってるとしか思えないな」
レキ「要するに、そういうことだ。もう、この国——いや、この世界に、トップに立つべき人間など、居ても居なくても同じようなものだからな。実質ここが日本だとすると、トップはここアナグラの支部長だろう」

コウタ「——つと、もうすぐ博士の講義の時間だよ。研究室へ行かないとね」

レキ「それじゃあ、また後でな」

俺はフォーゲルヴァイデに手を振って、ラボラトリへと向かう。今日の講習はどんな話になるのだろうか？ 楽しみで仕方がない。

——「雨宮リンドウ」

一服して、戻って来てみると少し騒がしいことになっていた。なにやら輪のような人ばかりができています。

リンドウ「どうしたー、何があったんだ？」

サクヤがこっちに気付いたようで、見てないで手伝いなさいよと言われた。

リンドウ「いや手伝えたって。一体何があったんだ？」

すると当事者のカノンは、何があったかを短絡的に口走った。

カノン「そ、空から、空から降ってきたんですよッ！」

空から降ってきた？ 新種のアラガミか？ それとも、救世主か？ ……そんなものはいないか。

なんとか見ることが叶ったわけだが、一人の青年が倒れていた。

……まだ幼さが残っている。子供であることは間違いない。そして、腕輪を見る限り神機使いであることも分かった。

リンドウ「えつと……その神機使いは誰だ？ その降ってきた奴にでもやられたのか？」

とりあえずぐったりとしている彼を指して尋ねる。降ってきたものにぶつかるなんて、相当運が悪いんだろうな。

カノン「違いますって！ だから、彼が降ってきたんですよ！！」

リンドウ「何言ってるんだ、冗談はよせやい」

サクヤ「リンドウ、これは本当の話よ」

サクヤにたしなめられ、とりあえずはまず彼女の話聞くことにする。

——彼女が言うには、フェンリルが所有する輸送用ヘリの残骸

のそばにいたそう。アラガミに撃墜されたようで、近くにいたアラガミはすべて掃討したらしい。

操縦士はすでに捕喰されていたが、彼はこのとおり無事だった。そこへヒバリが新しく入った情報を話す。

ヒバリ「ヘリコプターは操縦士のIDから南米支部のものだと判明しました。この青年についても現在問い合わせています」

さすがここ極東支部のオペレーター、対処が早いな。自分のことのように思えて鼻高々だ。

サクヤ「リンドウ、彼を病室に運ぶのを手伝ってくれるかしら」

そういうのは若い奴に任せておけばいいものを。……まあ、俺もまだまだ若い。しかし、直々に指名されたのだから仕方ない、諦めて手伝うことにする。

リンドウ「妙に厚着だな。確か南米地帯の気候は著しく暑いと聞いたが、脱がせてやった方がいいんじゃないか」

サクヤ「確かにそうね。——あら」

上着を一枚めくると、もう一枚パーカーを着ていた。それはいたって普通である。……だが、そのパーカーには、グルグルと何重にも『鎖』が張り巡らされていて、鎖のそれぞれに錠前が一、二、三とついていた。それは、喻えるならばそう、『封印』。

カノン「近頃のファッションって、変わってますね」

サクヤ「少なくともこれはファッションじゃないと思うわ。……ほら、ソーマも手伝って」

ソーマ「断る」

本当にこいつは。……だが、彼も人の身だ、いつか打ち解けてくれるに違いない。

——彼が『死神』と蔑まされる日も、……終わってくれるに、違いない。

——「睦月ケイスケ」

レキ「——遅いな」

ケイスケ「なあにがちょっと出ていくだ！ 大人のちょっとはこれだから信用ならない！」

早くも痺れを切らした俺は研究室を出る。そして、たくさん人が集まっている病室を確認しに行った。

コウタ「ちよつと待ってよケイスケ、講義嫌だからラッキーって言うてたのはどこの誰なんだよ！」

レキ「こいつの心は秋の空並みに変わりやすいな。——ん？ こいつ、誰だ」

頭に包帯が巻かれていて、足にテーピングがされている。そして、左腕に腕輪が確認できた。

レキ「神機使いか。でも異動の話とかは一切聞いてないな。博士は知っていたんですか？」

博士「ん？ ああ、彼の異動かい？ 知っているよ」

レキ「知っていたんですか。俺たちには伝わっていなかったんですか……。それに、このような大怪我をするなんて」

異動の際にこんな大怪我をすると言えば、やはりヘリがアラガミに襲われたのだろうか。よく助かったな、すごいすごい。

と、リンドウさんが姿を現した。

リンドウ「上様、もとい支部長が伝え損ねたみたいだ。しかし、どこか様子がおかしかったようだが……」

なんだ、そういうことか。宣伝部長もおつちよこちよいだな。そして、リンドウさんは他にも彼についての情報を話した。

彼の名前はウィラード・カーライル・シャムロック（長い名前……）。愛称はウィル（こっちはこっちで短くて言いやすい。仲が良くなったらぜひそう呼びたいな）。性別は男（見りや分かる）。

俺とレキと同じ新型神機使い（同じ支部にこんなに居ていいのか？ 確か新型は稀少とか言ってたけど）。ただし腕輪が左についていることからサウスポーのようだ（珍しいなあ）。

異動前は南米支部配属（確かすごく暑いんだっけ。俺だった放すのは相当惜しかったようだ、彼が行くことを望んでの決定だそうだ（一度どんな戦い方か見てみたい）。趣味は音楽（音楽プレイヤーには俺が聞いたことのないような曲ばかり入っている。えっと、これは何語かな？）と、寝ること（寝ることが趣味って……）。

コウタ「それで、やっぱりケガの影響で意識を取り戻さないでいるのかな？」

見る限り血色はよいようだ。……てか今一瞬いびきが聞こえたような。

リンドウ「ただ寝ているだけだ。あちらさんの話によると、こいつ四日間ぶっ続けて任務に行っていたらしい。ベテランの俺が言うのもなんだが、よく精神がもったな」

歳は、身長からして俺と同じくらいだと思う。本人が言わないと分からないが。それにしても、四日間も戦い続けただなんて。俺だったらきつと一日ともたないかもしれない。

博士「とりあえず君たちは研究室に戻ってくれ。講義を再開するよ」
ケイスケ「あ、すっかり忘れてた。でも博士、エイジス計画の話はもう聞き飽きたって」

俺がちよつと文句を言つと、博士はやはり笑顔で言う。

博士「まあまあ、これから面白い話が始まるから、期待して聞くよ
うにね」

*「——オトナツて、やっぱりそういうところで噓つくんだよな
ア——」

——？……レキが言つたかと思つたが、彼は言っていないよ
うだ。……この場にいた誰もが、誰がその言葉を発したか分からな
かつた。例の彼かと思つたが、高いびきで完全に寝ている。寝言か？
ケイスケ「……まさか、な」

リンドウ「ほらほら、お前らも歸つた歸つた、ここは見せ物屋じゃ
ないぞ」

次々とリンドウさんに追い返されていく野次馬。それに続いて俺
たちも退室して、再び研究室で博士のあまり面白くない話を聞かさ
れることとなつた。レキはとてもよく聞いていた。不思議不思議。

—— 1 2 4 3 自室

——「睦月ケイスケ」

ケイスケ「んつくんつく、……ぷはあ」

息抜きのコーラはやっぱりうまい。

レキ「ケイスケはコーラが好きなんだな」

ケイスケ「そりやもし飲めるのなら十本でも二十本でも飲むほどに
な。さすがにそこまでは飲めないが」

飲めないなら言っとなつ、と突っ込まれる。ちなみにレキは炭酸が苦手だとか。普段何を飲んでいるのかと聞いたら、どうやらコーヒーらしい。大人っぽくて少し憧れるなあ。……だけどコーヒーの苦さが好きな理由がちよつと自分には理解できない。

ケイスケ「たいていここの自販機でコーラ買っていくんだよね。――あ、ほらあの人も絶対コーラ買っね。断言できるよ」

フードをかぶった男。レキは絶対にありえないと言い切ったが、……彼はコーラを買った。

ケイスケ「な、言ったとおりだろ？」

フード男「何がだ？」

ぎろりとこちらを睨んでくる。いや、その、……悪かったというか、うん。俺は目をそらした。

……鼻であしらわれると、次に彼はレキのほうを見る。そして彼に歩み寄った。

フード男「そのルーキー。名前は――どうでもいいが、ミッシェンに同行しろ。……そういう命令だ」

名前がどうでもいいって言うのは俺でも少し腹が立つ。名前は大切な家族から貰った宝物だからな。

レキ「ええ、……はい」

フード男「早くしろ、エリックたちが待っている」

とりあえず腑に落ちない表情をしながらも、レキは男に付いていた。

ケイスケ「……誰だあいつ」

神機使いα「おいおい、行っちゃったぞ、止めなくていいのか？」

神機使いβ「そんなの迷信だ、ただの噂に引っ張りまわされるなよ」

後ろから会話が聞こえたので、ちよつと振り返ってみる。

神機使いα「あ、よお。お前、新しく入ってきたやつだよな」

ケイスケ「あ、あ、うん。そうですけど」

——とりあえず二人は自己紹介する。別に訊いたわけでもない
つてのに。こっちはこっちでおかしな奴らだなあ。

とりあえず、シレッとした方がカレルで、子供っぽい（人のこと
を言えたわけではないが、なんというか年不相応というか）方がシ
ユンというらしい。

ケイスケ「んで、止めなくていいって、何かまずい任務にでも付き
合わされるとか？」

シユン「まあそんなところだな。なんせあいつの任務の同行者は、」
カレル「だからそれはただの迷信、偶然だ。そんなものを信じてい
るだなんて馬鹿馬鹿しいな」

それを聞いてシユンはカレルに突っかかる。喧嘩ならよそでやれ
よ。

シユン「あいつと同行してるのが死神っていう時点でやばいんだよ
ほら、フードかぶった男だ、分かるよな？」

ケイスケ「はあ、死神？ んなバカな」

カレル「ああ、こいつはバカだ。偶然同行した奴らが戦死しただけ
のことを、勝手に面白おかしく囃し立てやがって。戦闘中の不注意
で死んだだけだから、あいつがどうこうの話じゃないと思うんだが
な」

シユン「いや、俺が囃し立てたわけじゃねーよ。俺も誰かが言っ
たからそうじゃないかと思っただけで……」

本格的に口喧嘩が勃発。とりあえず俺はさっさと退避することに
する。

ケイスケ「……死神、か」

確かに、あの眼光は怖かった。人間の心地がしなかった。……も
ちろん、シユンの言ったことを信じているわけじゃない。……もし

かすると、ただ信じたくないだけかもしれない。あの男は、本当に死神なのだろうか？　あるいは……。

心配になった俺は、とりあえずあいつの無事を祈ることにした。

——何に祈ったのだろうか？　神亡き時代に祈る対象など、いる筈がないのにな。

—— 1250 エントランス

——「榊レキ」

レキ「フォーゲルバイデも同行するのか」

フォーゲルヴァイデ「榊、昔から言っているが、君は正しい発音もできないのかい？　僕の名前はエリックⅡデア・フォーゲル『ヴァイデだ」

レキ「だからちゃんと言ってるじゃねえか、フォーゲルバイデだろ？」

フォーゲルヴァイデ「だから——よし、榊。ヴァイオリンといたまえ」

レキ「いいぜ、言ってるよ。ヴァイオリン」

俺はとりあえず付き合ってることにした。

フォーゲルヴァイデ「ヴィデオ、ヴォイスパーカッション」

レキ「こんなことをさせる意図が分からないな。ヴィデオ、ヴォイスパーカッション。どうだ、満足したか？」

理由はもちろんわかってる。そして、彼は一呼吸おいて言った。

フォーゲルヴァイデ「フォーゲルヴァイデ」

レキ「フォーゲルバイデ」

フォーゲルヴァイデ「……もういい」

——拗ねてしまった。彼を弄るのは面白いな……だがちょっと刺激しすぎたか。

レキ「ところでだ、フォーゲルバイデ。あの男は誰だ？」

フォーゲルヴァイデ「ああ、彼は——」

フード男「そろそろ時間だな。……おい、一人足りないぞ」

フードの男が苛立たしく言う。俺とエリックと彼の三人じゃないのか？ 確か一度の任務につき最大4人までだったが、あと一人来るといふことか。

レキ「……で、その一人が来ないわけか。時間ぐらいは守ってくれなくては困るな」

そして、『彼』は来た。

フード男「すでに時間は過ぎている、前田。時間ぐらいは守れ」

それ俺のセリフそのままじゃないか。しかし、よしとする。……いや、よくない。どうして同行者がこいつなんだ？ 納得いかないな。

ヨシツグ「俺自身が志願したんだ。悪いってのか？」

レキ「ああ、悪いな。自分から申し出たのなら周りの奴のことも考えろ、ガキが」

すると奴は鼻で笑った。……そうか、俺のほうが階級が低いうえに、経験の差、だろうな。しかしながら、それとこれとは話が別だ。

レキ「ところで、フォーゲルバイデ。お前、確か頭をよく打っていたよな。サッカーの時だって当たり所が悪くて失神していたしな。というわけで頭上に注意だ。俺のワンポイントアドバイス」

フォーゲルヴァイデ「な、失敬な！ サッカーの件にしる全部君がやったことじゃないか！」

否定する気はない。確かにさ、サッカーは苦手なんだ、こんな俺を許してくれ。

とうとうフードの男がキレた。待たせすぎたもんな、さっさと行くとするか。

1252 神機整備室

——「榊レキ」

俺たちが使っている神機は、ここで整備されている。出発前にここで神機を受け取って、帰投後にここへ渡す。整備が行われなければ、神機もすぐに壊れてしまう。ここで働く人たちは、陰ながら俺たちの活動を支えてくれているわけだ。

女性整備士「——レキさん？ もしもしー、早く神機持っていきなよー」

レキ「あ、あ、……すみません」

彼女は楠リツカ、ここで働いている。若くして働き出したため、その腕前は計り知れない。

——彼女と初めて会ったのは、入隊当初（あの日のことは忘れない）、病室で目を覚ました時だった。辺りを見渡すと、一人の女性がいた。絆創膏を取りに来たようだが、異質な臭い（アラガミの血の臭い。その時はまだわからなかった）が漂っていて、ところどころ煤汚れている。

リツカ「——あ、気が付いた？ほんとにさ、あれだけで悲鳴を上げるなんてこっちがびっくりしちゃった。君には、もっと強いアラガミと戦ってもらう必要があるんだから、ここで倒れてちゃいけ

ないでしょ。

……ああ、申し遅れちゃった。私は楠リツカ。君の、ううん、君たち神機使いの神機は、私たちが整備しているから。無闇に扱ったりしたら許さないからね。とりあえず、今後ともよろしく」

レキ「あ、……はい……」

リツカ「それじゃあ私はこれで。さっさと自分のしなきゃいけないことをしなよー」

——何かを感じた。俺が、閉じ込められていた家の中では感じられなかった想いを。子供のころにみんなで遊んだ時の想いとも違う、今までに一度も味わったことのない、想いを。

……過去を振り返って、あの時の思い出に少し微笑みながら、神機を取った。

レキ「それでは行ってきます。……神機の整備、頑張ってくださいよ」

リツカ「はいはい、分かってるよ」

彼女も微笑んで返してくれた。心が温まる。ゴッドイーターは、確かに大変な仕事だけれど、この場所を通るたび、やる気が出る。

——そしてヘリへ向かおうとすると、後ろから罵声が聞こえた。ヨシツグ「おいおい、なんだよこれ？ あんなに綺麗にしてやっ たってのによ、どういうことなんだっ！」

リツカ「あ、あれのどこが綺麗だっていうのっ？！ あんな神機だと戦闘中に滑ったりして危険だから、」

どうやら楠さんが揉めているようだ。もちろんあのガキと。

エリック「なにがどうなっているんだ？ ヨシツグ、詳しく聞かせたまえ」

ヨシツグ「……塗装スプレーだよ」

塗装？……神機に塗装したっていうのか？……奴が言うにはワックスコーティング用ラッカーを使用したとのことだが、そんなことをしたら神機が滑って大惨事になりかねない。それを楠さんがワックスを落としたものだからこんなことになってしまったのだ。

レキ「とりあえず落ち着きな、ガキ。またあいつが怒るじゃないか」
フード男「黙れ、誰のせいで怒っているんだ」

そして、フォーゲルヴァイデの説得で、ようやくガキをなだめることができた。……去り際に彼は言い残す。

ヨシツグ「ヘンっ、本当に使えねえな、このクソ整備士が！ やっぱり女なんて姉ちゃんに比べたらこんなものなんだよ！」

……俺は、リツカさんに謝った。

リツカ「レキさんのせいじゃ、ないよ。私が、よく考えないでこういうことをしちゃったから……」

レキ「リツカさんは、間違ってますね。ぐうの音が出ないまで叩き潰して分かせてやりますよ。——あっ、冗談ですから、気にしないでくださいね」

フード男「早くしろ、置いてくぞ」

フードの男が再び怒り出しそうなのでさっさと行くことにしよう。

……少し振り返って、リツカさんの背中が、とても悲しそうに見えた。

ケイスケ「はあ、訓練所は全部使用中、受注できるミッションも今はなし。ずるいぜ、レキ！　というかツバキさんもツバキさんだよあれぐらいの任務なら俺でも行けるっての！」

ベッドに寝ところがつてイライラ。コウタにバガラリーの第二巻（定価：1600fc・六話から十話まで。といってもコウタは全部録画したらしいが）でも借りに行こうかな。

ケイスケ「の前に飯ー。とりあえずこのでかいトウモロコシ！　どう調理すりゃいいんだよ？」

実はこれ、しばらく出しっぱなしにしてしまつてカチカチに乾燥してしまつたのだ。まさかここまで乾燥するとは思わなかつた！　ここまで乾燥するなんて知らなかつた！！　冷蔵庫に入れておけばよかつた。

茹でるのか？　ああ、でもおいしくなさそうだなあ。

コウタ「おい、ケイスケー。バガラリーの一巻だけど、」

ケイスケ「あ、ちょうどよかつた。なあ、一つ相談があるんだが……」

1254 新人区画・廊下

「ウィル・シャムロック？」

—— 一体オレは何をしているんだ？　本当にくだらない。勝手に病室を抜け出して歩き回つた挙句、ついには迷つてしまふとは。

*「それにしても、南米支部とはだいぶ作りが違ふな。まア、こういう知らないところを探索するのが面白いんだけど」

正直歩きにくい。足を負傷しているのだから仕方がないのだが。

*「……ん？　なんだか香ばしい匂いがするな。ちくしょ、腹減ツてんのによ。こりゃ拷問じゃねエか」

匂いのもととはあの部屋から。ドアが開放されている。そりゃここまで匂うわけだな。

……？　悲鳴も聞こえてきたような。

少年A「う、うぎゃあ、どうなってんだこれ?!」

少年B「おいコウタ！　わ、わ、こぼれる、こぼれるっ!!」

……気になるし腹減ったしで、オレの好奇心がくすぐられた。とりあえず覗きに行ってみて、ついでにお相伴に与ることにしようか。

3・STRANGER（後書き）

ああ、やつちゃった。まず意味不明な奴が登場して。次にエリックが登場して、やっぱり訳の分からない奴も登場して。……嫌な予感しかないというか、地雷というか。

エリックを生かすも殺すも作者の自由！ だけど、命を弄んではいけません。全て、脚本の通りに物事を進めるだけ。その流れの中で誰が死んで、誰が生きるか。言ったらネタバレになってしまうしね。

何か質問や、気になったところなどがあれば、コメントでどんな訊いてくれて構いません。所詮自分も人の子ですし、とんでもないミスをしてかしてるかもしれないですし……。

それでは次回まで。

4・LOSE HEART

1251 自室

――「睦月ケイスケ」

コウタ「ジャイアントトウモロコシかあ。……茹でるのはどうかな？」

ケイスケ「ほら、よく確かめてみるよ。カチカチだろ？ 茹でてもおいしくなさそうだから、どうやって調理しようか考えてたんだ」

一応お袋に調理方法のデータは渡されたが、生憎乾燥したトウモロコシの料理は書いてなかった。

コウタ「そういえばさ、かーちゃんが一度乾燥させたトウモロコシで何か作ってくれたんだ。確か、ポップコーンって言ったけど、味が思い出せなくてさ」

料理のうちのほとんどは旧世代からのものが多い。ただ、食材の一部はアラガミや環境の変化に耐え切れずに絶滅してしまった。無論、肉類は支部によって制限されているところもあるらしい。

この支部は、幸い家畜の肉などの量産が行われている。……とは言ったものの、生産量は少なく、値段は結構張る。いつも食べられるような代物ではないことは確かだ。それに対してアメリカ支部では生産が活発で、値段もかなり手頃となっている。一度でいいからビフテキをたらふく食ってみたいものだ。もっとも、俺は今の食事で十分満足しているが。

ちなみに後で調べて分かったことだが、ポップコーンは旧世代ではそれなりにポピュラーな菓子だそうだ。劇場で芝居とかを見るときに食べるものらしい。

ケイスケ「作り方は知ってるのか？ 材料も足りるといいが」

コウタ「えっと、足りてるよ。味付けは自由だったみたいだし」

とりあえず作ってみることにした。旧世代のトウモロコシはちゃんと破裂するものが必要だったようだが、このジャイアントトウモロコシは品種改良されているため使うことができるそうだ。さすがフェンリル、すごいなあ。

まずこの乾燥トウモロコシを芯から外す。やっぱりでかいからたくさん取れた。鍋には、ギリギリ入りきったのでセーフとする。そして、コンロに点火。

一応食事なので甘い砂糖ではなく、味の濃いバター……もとい、マーガリンを加えてみる（動物性の油脂か植物性の油脂か。もちろん、この御時勢に動物性などもつてのほかである）。マーガリンなら脂は不要だそうだ。

そして蓋をする。

ケイスケ「それで、あとは待つだけだよな」

コウタがうなずくと、とりあえず俺は皿を用意した。ちよつときめの皿だから、きつとあの量なら入るだろう。

——しばらく寛いでいると、何かが弾ける音がした。二回、三回。四、五、六七、八九十、……。断続的に鳴り響く破裂音。ついにポップコーンが完成してきたようだ。バター、もといマーガリンのいい香りが部屋に香る。

ケイスケ「おいしそうだったのがよく分かるぜ。ああ、楽しみだな」
コウタ「……ねえ、ケイスケ。なんか、鍋の蓋が……」

カタカタと鍋の蓋が揺れる。嫌な予感がして咄嗟に身を屈めると、蓋が破裂音とともに勢いよく跳ね飛んできた。そして、それを合図に部屋中にポップコーンが飛ぶ、跳ねる。

コウタ「う、うぎゃあ、どうなってんだこれ?! って痛っ、痛い痛い!!」

ケイスケ「おいコウタ! わ、わ、こぼれる、こぼれるっ!!」

正直こぼれていることを気にしている場合ではなかったが、もっ
たいたい! 床はきれいだが三秒を超越してしまっている!! ど
う見ても洗えば喰える代物ではなさそうである。

というか痛い! 痛い! 熱い!! どこかに隠れる必要があり
そうだ。

——しばらくベッドの下やテーブルの下に身を隠した俺たちは、
破裂音が聞こえなくなったのを確認して、部屋を見渡してみる。

……そのポップコーンとやはらは、元の体積の6倍程度まで膨れ上
がっていた。あな恐ろしや品種改良。部屋中はバター、もといマー
ガリン臭で満たされていた。食欲がそられるどころか微妙に吐き
気がする。さすが、油つてのは恐ろしいものだ!

ケイスケ「あーあ。……部屋、汚れちゃったな。ポップコーンも喰
えるかな?」

*「ん? それぐらい喰えるだろ?」

部屋の入り口から聞き慣れない声が聞こえてきた。頭に包帯、足
にテーピング。……あれ、この人って確か寝てるんじゃないか
った。なんで起きてるんだ? ——というか、

ケイスケ「日本語っ?!」

包帯少年「日本語? と言われてもな……。この辺り出身の奴がこ
この言葉じゃベツて何が悪いんだよ?」

ウソだろ、おい。確かこの人の名前って、
ケイスケ「ウィラードさん、……ですよね」

ウィラードさん「ああ、ウィラード・カーライル・シャムロック。よく知ってるな。長ッたるいからオレはミドルネームを取ッ払ッてウィラードは短くしてウィル。ウィル・シャムロックで通してる」
完全に欧風の名前である。どう考えてもこの辺り出身とは思えない。

ウィル「この辺りだッての。だいたい、そうだな……寺がある辺りだ」

コウタ「もしかして、親が海外出身ってことかな？」
ウィル「んー、まアそんなところだな」

……コウタはとりあえず納得した表情を見せる。当の本人はというと、微笑んではいるがどこか不気味なオーラを漂わせているというか。

ウィル「とりあえず腹減ッてるんだ。喰ッていいよな、いいよな？」

一瞬尻尾振ってる生き物みたいに見えた。まあ今の彼のイメージはそんな感じだ、獣的な。本当に腹減ってるんだな。

ウィル「それじゃ遠慮なく！」

ケイスケ「おい、まだいいって言って……」

—— 1 2 5 6 自室

—— 「睦月ケイスケ」

ウィル「ぐうう、……すうう……」

……なんという食欲。俺たちが喰うのを躊躇っているうちに喰い散らかしちまった。それでもってすぐに寝た。叩き起こそうとしても起きようとししない。……まるで最初から寝ていたみたいだ。

女性「すみませーん」

系受け「はいはい、開いてますよー」

ノックと声。とりあえず中へ入るよう促すと、ドアが開いた。中に入ってきた彼女は、少し驚いた様子だった。……確か、彼女はレキに人中を殴られたときに介抱しに来てくれた人のだったような。女性衛生兵「うわあ……、ひどく汚しちゃったみたいねえ……。一体何したのよ？」

コウタ「ポップコーン」

ケイスケ「ポップコーン。一房丸ごと」

女性衛生兵「量考えてやりなさいよ！ 一房丸ごとやったんじゃこうなっても仕方ないって」

そして、熟睡中のウィラードさんを見てやつぱりびっくりする。

女性衛生兵「どこに行ったか探してたけど、なんでここに居るのよ

……。連れてきたわけじゃないわよね？」

ケイスケ「腹が減ったーって言って勝手に押しかけてきて、それでポップコーン勝手に喰ったら勝手に寝た」

……。少し首を傾げる仕草を見せる。何か不可解な点でもあったのだろうか。

女性衛生兵「寝ぼけてた、にしては度が過ぎてるわね。まああんたらが悪いんじゃないかなかったらいいか。……それじゃあ、私は病室まで彼を連れて行くから。できれば手伝ってほしいな」

……手伝えって言うてることと同じである。断れそうもないので仕方なく俺が行くと言って、彼の左肩を持つ。重いっ！

ケイスケ「はあ、疲れたぜ」

女性衛生兵「お疲れさま、まあ何も出ないけどー」

くそつ、弄ばれた感じが強いぞ。

女性衛生兵「そもそも、私はあなたの先輩であり上司だからね。しつかり言うこと聞いてよ？」

ごもつともである。だがやはり納得いかない。しかし、仕方がないのでしょうがない。

ケイスケ「ところで、まだ名前聞いてないんだけど」

女性衛生兵「あれ？ まだ言ってなかったつけ。ごめん、忘れてたっぽい」

改めて彼女はこちらに向き直る。

女性衛生兵「私はリリア・エヴァレット。階級は上等衛生兵曹。目標は、サクヤ上官みたいになることかな。とりあえず、私もあなたの手伝いぐらいはできるから、任務へは気軽に呼んでね」

上等衛生兵曹……？ とにかく、新兵との差は歴然だと瞬時に把握した。

リリア「そういえばあなたを殴った人はどこにいるのかな」

ケイスケ「レキか？ 確か任務に出てるって。ヒバリさんに聞けば分かるかもしれないな」

というわけで、休憩中なのかコーヒを飲んでいるヒバリさんに訊いてみた。

ヒバリ「えっと、ちょっと待ってくださいね。……あ、今出るところです。メンバーは、レキさんと、ソーマさんと、……あれ。

四人のはずなのに、三人しか名前が入っていないわね。入力ミスかしら？」

ケイスケ「ああ、レキが出ているかどうか確認できたからもういいですよ」

ヒバリ「いいえ、この極東支部のエントランスを預かるオペレータ

ーとして、この程度のミスはあつてはならないわ。もつと精進しなきゃ！」

……何かに燃えているようである。やる気が感じられるからどうでもいいこととする。

ケイスケ「とりあえず俺トイレガマンしてたから、それじゃこれで！」

リリア「ああ、まだ頼みたいことあったのにー」

漏れたらやばいじゃねえか。そんなのは後回し！　　というか他の人に頼んでっ！

自室まで戻るには、エレベーターを待つ時間があるからさすがに耐えきれない。ということは公共トイレの一択のみとなる。

ケイスケ「到着！　……えっと、せい、そう、ちゅう……とな」

体中から冷たい汗がぞわっと湧き出る。だあぁっ、いつもはもう終わってるはずなのにーッ！？　　そう思ったとき、トイレから女性が出てきた。

清掃員のおばさん「ごめんね、もうちょっと時間が掛かるからね。

全く、あの坊ちゃんトイレの使い方もまともに知らないだなんてケイスケ「あの坊ちゃん……？」

思い当たるとすれば、……やはり、『あいつ』のことだろうな。

あんな奴は、さっさといなくなってしまう方がいい。ヒバリさんだつて迷惑していたようだし。

で、結局待つよりは自室に行った方が早いんじゃない？　　と考えた俺は、急いで自室へ帰ることにした。まあ、間に合ったからよかったものの。

——「榊レキ」

……ヘリから降りると、あまりの湿気に気分が悪くなりそうになった。それはあのガキも同じようだが。あいつと同じというのはいやだな。

ヨシツグ「うう、くそっ、こんなところに来るぐらいなら別の任務に出ればよかった」

志願しておいて無責任な奴だな。お前が代わりに死ねばいいんだ。

……あれ？ 代わりって……、誰の代わりだ……？

レキ「……それにしても、鉄塔というよりは、工場の跡地のように見受けられるが、……有害物質とかは出ていないだろうな」

フォーゲルヴァイデ「ここは工場じゃなくて発電所さ。だから有害物質なんて出ていない。分かったかい、榊？」

やはりいちいち上から目線。ちよつとイラッとする。

レキ「うるさい、お前は上だけ見てろ」

もつとデータベースを確認すべきだったか。情報の仕入れ方を俺はあまり知らない。うちはテレビもなかったし、新聞も経済に関すること以外は取っていないかった。——そして、まともに話す相手なんて、……誰一人として、いなかった。話すのは、ただ社交的に交友関係なんてものは、遠い昔に切り捨てられてしまった。

レキ「とりあえず、敵の位置を確認だ。えっと、まだ名前聞いてないんですけど、」

フード男「忘れていたな。俺は……」

フォーゲルヴァイデ「危ないッ!!」

突然フォーゲルヴァイデは大声を出す。何かと思えば、彼の指先――鉄塔の上に、オウガテイルを一体確認した。
俺は、彼の腕を引いて、フードの男は口を開いた。

「前田、上だ!!」

前田上だという言葉の響きに違和感と可笑しさを覚えたが、それは気にしない。悪いのは前田という苗字である彼なのだ。

……しかし、一瞬彼の姿がフォーゲルヴァイデに見えたような気がした。瞬きをすると消えてしまったが、――きつとそれは幻視に違いない。

オウガテイルが跳んだ。前田はにやりと笑うと、銃口を奴に向ける。

ヨシツグ「へへんツ、こんな奴は一撃で葬ってやるよ！俺を襲ってきたのが間違いだったな、本当に馬鹿だな、お前は!!」

彼は抗った。だけど、死神からは誰もかれも逃げられないだろう。ヨシツグ「……ん？……弾がでねえ。……おつかしいなあ」

彼の撃とうとしていた弾は、OPを多く必要とする弾だったようだ。

だが、今回の任務での彼の装備の特性上、他のパーツと比べて神機のOPの最大値が低くなっているのだ。

……そして何より、このバレットは初めての登用であり、人生最期の登用となってしまった。

俺は反射的に彼に手を伸ばす。たとえ彼があんな奴だとしても、……見殺しにはできない。彼だって、改心はできる筈だ、今からでもやり直せる筈だ――。

——やり直せる？ 本当に？

そして、彼の顔がこちらを向いて、恐怖と驚愕で、顔は皺くちやに歪んで、わずかな涙が頬を伝っていた。後は引くだけだった。後は、腕を引つ張りさえすれば彼を助けることは可能だった。……だが、一つの疑念が、それを阻害する。

……その顔は、オウガテイルの牙によって削がれ、言葉にならない絶叫を上げながら、俺の体を鮮血で濡らした。返り血に俺は目をつぶりながら、ぐつと彼の腕を引つ張った。

——そして、静寂の後、俺はゆっくりと目を開ける。俺は、しっかりと彼の腕をつかんでいることができたのだ。

——俺の手中には、彼の腕『だけ』が、あった。

レキ「あ、……あああああああああ———！」

へたつと情けなく腰が落ちる。俺は持っていたそれを放って、必死に後ずさりをする。

フード男「ぼーッとするな！」

そして、フードの男は一抹の躊躇いもなく、彼の胴体ごとオウガテイルを引き裂いた。

彼の血とアラガミの血を体中に浴びて、俺の意識は真っ白になった。

——「榊レキ」

フォーゲルヴァイデ「……そろそろ落ち着いてきただろう、どうだい？」

レキ「……フォーゲルヴァイデ、か……」

俺は、今の時間が鉄塔の森で、現在地がもうすぐ1400になるうとしていることに気付いた。

頭の中はショートしていて、思考回路も真っ白で……。

レキ「守れなかったんだよ、俺なんかじゃ……」

フォーゲルヴァイデ「……榊。僕は、彼に手を差し伸べることもできなかった。自分だけが逃げ出した。……でも、榊は助けようとしたじゃないか」

でも、結局助けられなかった。……助けなかった。俺はいつまでも、誰も守れず、助けられずに生きていくことしかできないのだ。

フード男「卑屈になるなら働け。……ようこそ、クソツたれの職場へ」

俺の悲しみを遮るようにフードの男は語りだす。

フード男「……言っておくが、こんなことは日常茶飯事だ。いちいち悲しんでいたら身がもたねえぞ」

まるで感傷に浸ることも許さぬかのごとく、淡々と語り続けるのだ。

レキ「あんだ、一体誰なんだ」

俺は感情を露わにして、尋ねた。……他人のことを、初めてあんた呼ばわりした気がする。

フード男「名乗り忘れていたな。俺はソーマだ。……別に覚えなく

ていい」

ソーマという男。……俺はこいつのことが好きになれそうにない。

ソーマ「……時間くっちゃまったな。行くぞ、ルーキー」

フォーゲルヴァイデ「待ちたまえ、榊はまだ、」

レキ「もう大丈夫だ。……どうにもならないから、どうにかするしかないのだろうな」

俺は、俺の生き方を遂行するしかない。俺には他人の生き方を決める権利もなければ、義務もないのだから。

レキ「俺は行く。立ち止まっても埒が明かないことは自分でもわかってるからな」

神機を構えて、用意ができたことをここに証明する。

レキ「……どうした？ 何ぼさつと突っ立ってんだ、フォーゲルヴァイデ？」

震える心を抑えつつも、いつも通りの淡白な俺を演じよう。

フォーゲルヴァイデ「く、だから君はまともな発音もできないのかい？！」

俺たちを無視して、ソーマは行こうとする。どう討伐するのか俺たちはまだ聞いていない。

ソーマ「オウガテイルの方は俺が誘導する。コクーンメイデンの方は煮るなり焼くなりしてやれ」

そう言っただけは、挑発フェロモンを服用する。オウガテイルが彼の後を追っていくのが見えた。彼の手で殺されてしまっても知らずに。

フォーゲルヴァイデ「ターゲットは二体。一人一体でいいね？ ……

……そうだ、榊。……久しぶりに、アレをやらないか？」

レキ「……剣形態も使用できる俺が有利じゃねえか」

フォーゲルヴァイデ「ならば銃形態しか使ってはいけない、それで

いいだろう？」

……お互いに笑い、照準を目の前の繭の処女達にあわせる。ただ、これまでの缶だったのが、アラガミに変わったただけだ。……そして、どちらともなく声がかかって、撃ち合いが始まった。

……どちらが先に倒せるか。無論、ブラストのほうが有利に決まっているが、新型をなめてもらっては困るな。時折飛んでくるレーザーを避けながら、撃つ、撃つ、撃つ。

二つの弾丸が交じり合い、描く軌跡はまさに虚空に蝶が舞うかのごとく……危ない危ない、これがフォーゲルバイデの特殊能力、『華麗結界』というものか（そんなものはない）。

……それが、俺に対しての励ましだってことは、よく分かっていたさ。だから、その好意を無駄にするわけにはいかない。

レキ「つと、弾切れか。Oアンプルを服用だな」

フォーゲルヴァイデ「……ああッ、アイテムがつ！？」

おいおい、切らしてたのかよ。

レキ「ほらよつ、あとで倍にして返せ」

一応フェアに戦いたいから、おれはOアンプルを寄越した。

フォーゲルヴァイデ「……そろそろつ、くたばるんじゃないかい？」

レキ「ああ、じゃあどちらが先に仕留められるかはつ、次の一発つてところか」

だから、最後の一発は間髪入れずにぶち込んでやった。ただ、彼も同じことを考えていたようだ。

フォーゲルヴァイデ「華麗なる、エリックシュート！！」

でた、フォーゲルヴァイデの必殺技。何気に格好つけるなよ。気に入らないな。

レキ「……目標は、二体とも沈黙か。どっちが先にやったかよく分からなかったが……」

フォーゲルヴァイデ「この勝負は持ち越しとしよう。もちろん、次

は僕が勝つから、覚悟したまえよ？」

……そして、ソーマが戻ってきた。あちらも終わったようだ。彼がへりを呼んで、俺たちは少しの間待機していた。

レキ「なあ、フォーゲルヴァイデ」

フォーゲルヴァイデ「……ヨシツグのことかい」

それ以上話すことはないだろう、と空笑いを浮かべる。

あの対決だって、フォーゲルヴァイデが俺に忘れさせてあげたいがためにしたことだから。でも、あんなことで俺の気が晴れるわけがなかった。

レキ「なんであのガキ、死んじまったんだろうな」

決まっている、あいつの不注意であり、自分の力量を把握していなかったためだ。

フォーゲルヴァイデ「……僕にも、責任はあるのかもしれないね。彼を急かしてしまった、彼を、……本当に、睦月君が言うように、うわべだけでもいいから弟子にしておけばよかったのかもしれないよ」

アナグラへ帰って、どんな顔をしていればいいか、分からない。

……そもそも、今の自分がどんな顔をしているのか、分からない。きつと絶望と恐怖で一生しわくちゃだろう。

……いつか読んだ本のような、そんな感覚があった。

アナグラ内に、変化はなかった。……そう、何も、変化はなかったのだ。

……違う、責めなかったわけでも元気づけようとしたわけでもないんだ。

何も、なかった。そう、誰も死んではいなかった。彼らは『三人』でミッションへ行った。

そう、彼の存在を抹消した。ただ、それだけである。不穏分子を排除してくれた彼を、心中では賞賛している者もいるに違いない。ただ、こういった場では誰もそういうことを言わないだけであつて。

ケイスケ「なあコウタ。……あいつの行いが悪かったから、こうなつたのか」

コウタ「うん。誰か一人でも、涙を流してくれる人がいる筈なのに……誰もいないなんて、悲しすぎるよ」

この出来事は、俺たちの心を確かに抉っていった。尤も、一番辛いのは……いくら性格が悪かったとはいえ、『彼』の命が奪われる瞬間を、目の前で見てしまったレキに違いない。

—— 1600 自室

—— 「榊レキ」

ベッドに俯せになって、忘れようとしたけども、目の前の鮮血がどうやっても落ちなかった。

あいつの苦しむ顔、悲鳴。脳裏に焦げ付いて、消し去ろうとしても落ちようとしないのだ。このままでは、完全に気が狂れてしまいそう、俺は誰かに助けを求めようとした。……だけど、すぐに冷

静になって……そんな自分が情けなくなつた。

レキ「——助けてくれる奴なんて、誰もいないはずなのに……」
自嘲して、俺は寝返りを打つ。とその時、軽い金属音が二回。

レキ「……ん。ノックか」

……ドアのロックを外すと、サクヤ上官がいた。

サクヤ「しばらくお邪魔して、いいかしら」

レキ「あ、……はい。構いませんよ」

……彼女は部屋を見渡して、その書籍の量に戸惑いを隠しきれないようだ。

サクヤ「……こんなにあるなんて、すごいわね。一体どうしたの？」
現在は、ここにある書籍のほとんどがデータ化されていて、これらの物は旧世代の遺産とされている。だから、ここまで書籍があるというのはすごいことなのだろう。

父はこのようなものを集めるのが好きだった。俺も、本を読むことは、機械を見るよりも楽しかった。よく、小さい頃は母親に本を読んでもらった。……思い出そうとすると、とても悲しくて、胸が張り裂けてしまいそうで。

もし、また母親に会えるのなら。母が待つ家に、帰ることができるのなら。……すべてを捨ててでも、帰りたい。

……だけど、

レキ「家から持ってきたものです。……もう、あの家には戻れませんか」

……俺の言葉から事情を察するには、あまりにも情報不足。だけど、何かを察したのかサクヤ上官はその話を切り上げてくれた。

サクヤ「それで、……大丈夫かしら」

レキ「大丈夫って、……何がですか」

わざと素っ気ない態度を取った。もちろん、何を意図したことは十二分に想像がついている。

サクヤ「ソーマから聞いたわ。……初めて見るから辛いことは分かっている。でも、」

レキ「違う。……俺は、辛いわけではありませんから。もういいです、……心配してくれて、ありがとうございました。……もう、用事は済みましたよね」

俺は、一人でいたかった。一人でいた方がよかった。……部屋に閉じこもっていた方が、よかった。誰かに、この罪悪感を知られたくない。覚られたくない。

だけど、彼女は部屋から出ようとしなかった。……だから、仕方なく追い出すのをやめる。

サクヤ「……それとも、助けられなかったから、かしら。……あなたのことだから、そっちだってことは分かってたわ」

レキ「一応確認、ってところですか。俺はあいつを守ってあげられなかった。それが悔しいのは、確かです。……もちろん、こんなくだらない問題に正解しても、何もあげられないですけど」

そんな冗談を言ったけど、彼女は少しも笑ってくれなかった。それどころか、くだらなくなんかない、と俺の言葉を一蹴した。……違うのに。助け『られ』なかったからじゃないのに。

レキ「……どうしました？ ……仲間一人守れない俺は、必要ないってことですか」

サクヤ「そんなことないわ！ どうしてそんなこと言うのよ？」

ひしひしと湧き上がる得体のしれない苛立ち、感情。理性はそれを堰き止めることができなかった。

レキ「……だったら、なんでそう言い切れるんだよ。僕は誰の期待にも応えられない。それどころか大切な人の一人も守ることができ

ない！ そんな僕が、なんで必要だつていうんだよ？！」

サクヤ「仲間だからよっ！！ 第一部隊のメンバーとして、極東支部のメンバーとして、……同じゴッドイーターとしてっ！！」

そう、僕は、僕らはゴッドイーター。いつ仲間がいなくなってもおかしくない、死と隣り合わせの職業。そんな仕事を、僕らはしているんだ。……なんで、こんなことをしているんだろう。

……分からない。自分のことが、分からない……。

サクヤ「一人守れなかつたら二人守りなさい、二人助けられなかつたら四人助けてあげなさい、もし百人が苦しむ顔を見せるようなら、二百人を笑顔にしてあげて！！ そのためには、……あなたが必要だからっ！！」

——その言葉を聞いたとき、再び僕は必要とされていることに気付けた。そして、理解したんだ。……なんで、ゴッドイーターになろうと思ったのか。

ただ、自分の存在する意味がほしかっただけなんだ。

ただ、自分を必要としてくれる存在がほしかっただけなんだ。

ただ、……自分の存在を認めてくれる居場所がほしかった、だけなんだ。

レキ「——へへ、かつこ悪いですね、俺。女性にここまで言われるなんて、初めてですよ。……母親にも、……こんな感じで怒られたこと、一度もないんですから。——だから、なんで涙が出るか、……全然ッ、……分からないんです」

壁に額を押し付けて、できるだけサクヤ上官に涙が見えないよう

にするけど、……嗚咽までを抑えることは、俺には到底不可能なことであった。

サクヤ上官は、俺の心に這う蔦を払ってくれた。でも、その根を取り払うにはまだ至らない。それでも、俺は嬉しかった。彼女のおかげで、まだ俺はここに居られると思えたから。

……そのあとどうしたかは、正直覚えていない。だけど、彼女は俺の手をしっかりと握っていてくれた。

……その手は、生きている人の手だった。

—— 1 6 3 0 エントランス

——「睦月ケイスケ」

入隊して2週間が過ぎた。そんな時、俺とコウタはツバキさんに呼び出された。

ケイスケ「へ、……っ、ツバキさん、冗談ですよー」

ツバキ「冗談を言えるほど気が利かないものでな。とにかく、次のミッションは睦月と藤木の二人だけで行ってもらっ」

心配だなーと思う一方、コウタは目を輝かせている。確かに、次のミッションの場所は俺たちが初めて行く場所だからな。

ツバキ「そして戦う相手も初めてだな。おそらく、これまでのアラガミと違って苦勞するだろう」

コウタ「えっと、確かコンゴウだったっけ。データベースで調べたけど、」

……コンゴウはこれまで見てきたオウガテイル、コクーンメイデ

ン、見たことはないが聞いたことはあるザイゴートといった、小型アラガミと違う。

主に体力、攻撃力、耐久力も（小型アラガミと比べると、だが）極端に上がり、多彩な技を仕掛けてくるそうだ。たしか、背中のパイプから風を使った攻撃をしてくる、らしい。

ケイスケ「その分報酬も高めになってる！　これを逃す手はないな」ツバキ「そうか、ならば今からでも行ってもらおうか。弱点に合った武器と、相手の攻撃を軽減できる装備をするように」

……鼓動が早くなっている。そんな時、コウタが少しうらやましい。俺もこれぐらいマイペースでいられたらなあ。

—— 1755 鎮魂の廃寺

—— 「睦月ケイスケ」

コウタ「うわあ、寒いね」

ケイスケ「滑るから気をつけろよ」

辺りが凍っていて、危なっかしいったらありやしない。スパイクに履き替えて来ればよかったかな。

—— ふと、空を見上げると少し欠けた月と、極光のカーテン。オーロラを直に見たのは初めてだ。

ケイスケ「おっとっと、こんな所で油売ってる場合じゃないか。とにかくコンゴウとやらを見つけようぜ」

俺は神機を銃形態に変形させる。奴によく効きそうな取って置きのバレットを作っておいたんだ——？

コウタ「……あれ？　なあ、ケイスケ。今何か声が聞こえなかった？」

ケイスケ「声？　気のせいじゃないか、俺はそんなの聞いて、」

どしゃつと、上から何かが落ちてきた。びっくりして咄嗟に後退すると、……どうやら建物に積もっていた雪が落ちたようだった。コウタ「な、なんだ。びっくりしたなあ」

コウタが笑ってこちらを向いて。……その背後に何かが降り立った。

ケイスケ「コウタ、そこどけいっ！」

俺は二、三発バレットを撃って、……相手の姿を確認した。禍々しく、ただどこか神々しさすら感じる姿。

コウタ「な、なんでここが分かったんだ？！」

ケイスケ「ああ、……そりゃたぶん、俺のせいだな……」

データベースの受け売りだが、奴は聴覚に優れているから、どんな些細な音でもすぐに気付いて向かってくるそうだ。恐らく、俺が神機を變形させたときの音だ。騒音スキルがついていたのが一番の原因か。くっ、油断した。

ケイスケ「とりあえずよ、こいつがコンゴウだな」

戦慄する俺たち。そして猿神は、高貴で粗暴な咆哮を上げた。

俺たちは神機を構えて、各々攻撃を開始する。

コウタ「あ、ああ……ケイスケ……どうしよう」

建物の陰から確認しているが、ケイスケが力尽きて倒れてしまっているのが見える。急いでリンクエイドしなければ、きっと間に合わなくなってしまう。

だけど、その周辺で徘徊するコンゴウのせいで近寄ることができない。

コウタ「俺がコンゴウの攻撃に気付かなかったせいで……」

コンゴウは、風を主体とした攻撃を使用する。俺は遠くから援護射撃を行い、時々飛んでくる空気を固めたような弾を回避していた。……だが、再びコンゴウが弾を撃ってきたようだったが、不発のように見えた。

すると、血相を変えてケイスケは俺を突き飛ばして、足元からの真空による竜巻をもろに喰らった。

天高く打ち上げられるケイスケ。……地面にたたきつけられる。

それを見た俺は、怖くなってそのまま逃げだしてしまった。

……俺が気づいていれば、こんなことにはならなかったんだ。

だから、覚悟を決めて近付こうと思った。……だけど、不意にノゾミとかーちゃんの顔が頭をよぎって、恐ろしい『もしも』が心中に渦巻く。

このまま逃げださないか、とそんな『もしも』を想像する自分が語りかけてくる。

コウタ「確かに俺が、かーちゃんとノゾミを守ってあげなきゃならない……。だけど、目の前の仲間を、放っておけない」

……コンゴウが去ったことを確認して、物陰から飛び出してリンクエイドを施した。

コウタ「――よし、できた。ふう……リンクエイドは体力を結構使ったな」

……とその時、突然二体のオウガテイルが襲いかかってきた。一瞬驚いたが、落ち着いて一体に麻痺弾をぶち込んで動きを止めさせた。

そしてもう一体に照準を合わせて引き金を引く。

コウタ「ッ！ 弾切れかつ！？」

体力は本当に残っていないといえるレベル。回避ももう間に合いそうにない。まさに万事休すというやつだろうか。俺が死を覚悟した時だった。

さつとケイスケが立ち上がり、一発、二発と撃つ。一発目は思いつきり外れたが、二発目はオウガテイルに命中し、ひるませることができた。

コウタ「ごめん、俺のせいで」

ケイスケ「ほら、早く回復しないとコウタも危ないんじゃないか？」

ケイスケは神機を剣形態に切り替えて、二体のオウガテイルを一刀両断する。その攻撃で奴らは力尽きたようだ。

俺はその間に回復錠と、Oアンプルを使用した。

ケイスケ「と、親玉も嗅ぎ付けてきたか」

案の定音を聞きつけてコンゴウが来たようだった。そして、こちら目掛けて弾を撃とうとするが、不発のように見える。

コウタ「同じ攻撃にはもう騙されないぞ！」

俺は横に避けると、空気がその場で爆発する。さて、こっちもどんどん弾を撃っていかう！

ケイスケ「攻撃パターンが読めくると案外楽だな！ おおっと、」
ケイスケがコンゴウのパンチを咄嗟に回避し、剣を振り下ろした。

すると突然、コンゴウの顔面が割れて、頭を抱え込むように倒れる。ケイスケ「これが結合崩壊ってヤツか……。だけど今が攻撃するチャンスだな」

ケイスケは捕喰し、バースト状態になった後にチャージクラッシュを胴体に叩き込む。すると、こちらも砕けた。

コウタ「よし、一気に倒してやる！」

ケイスケ「待った、……。何か様子がおかしいぞ」

ゆっくりと起き上がると、急にいきり立って吼えた。息も荒い。

……。少し嫌な予感がする。

コウタ「ケイスケ、しばらく様子を、」

ケイスケ「——っ、コウタ、下がれ！」

その場でコンゴウが縮こまると、突然コンゴウの背部パイプから真空波が周囲に放たれた。俺はケイスケの言うとおり下がったから無事だった。当の彼は、辛うじてガードはしたものの、頬の下が少し切れているが見える。

ケイスケ「これが、活性化って奴だな。さっさと倒したほうがよさそうだな。んじゃあ、コウタ。お前に託すぜ、俺の弾」

そう言つと、彼はアラガミ弾を三発こちらへ受け渡す。リンクバースト・レベル3。それによって、俺の力は極限まで高まっていく。コウタ「……。任せとけてえっ!!」

昂る意識と裏腹に、視界がスローモーションな感覚を味わう。違う、周りが遅いんじゃない、俺の心が急いてるんだ。奴の激しい攻撃も、遅い世界の中では容易に避けられた。

そして俺は、コンゴウの正面に立つ。後はただ、『モウスイブロウ』の銃口を顔面に押し付けて、

コウタ「これでどうだああああっ?!」

引き金を引いて、濃縮エアスラッグ・レベル3はその場で炸裂する。その衝撃に耐えられず、俺の体は吹き飛ばされた。

頭を地面に強く打ち付けて、少し顔をしかめる。雪が積もっていたからあまり痛くはなかったものの、やっぱり少し硬い。

そしてケイスケが俺のもとへ駆け寄り、起こすのを手伝ってくれた。

コウタ「うう、いてえ。……そうだ、ケイスケ。コンゴウは？」

自分の目で確かめろ、と言わんばかりに親指でくいつくいつと向きを示す。俺はとりあえず倒れているコンゴウを見て、……深くため息をついた。

コウタ「俺たち二人でも倒せるんだ、こんな強い奴でも！」

ケイスケ「なんだよ、今更気づいたのか？　俺は最初っから気づいてたぜ、そんなことはよ」

そう言いながら力尽きたコンゴウを捕喰し、コアを回収するケイスケだった。

4・LOSE HEART（後書き）

退場者は早々に。一応弁解はしておくが、あの人を生かしたいがために彼を出したわけではない。それに、彼がいつ死ぬかは、自分も知らない。

1話で出てきた衛生兵さんにもやっと名前が付きしました。彼女は旧型だけど、それなりにストーリーとの関わりはあると思う。さすがに前面に押し出す気はないけれど。

そしてついに次回は彼女の出番！ やったね！ ちなみにまた新型が追加されてまう。「またオリキャラかよ……」なんて思わないでよね、バーゲンって書いてるほどなんだから諦めてね！ ……とは言ったものの、その、……ごめんなさい。

それでも、筋だけは通す。矛盾だけは避けたいね、いつの間にかキャラの口調が変わってたりしてそうで怖い。それが自分のクオリティ。

それでは次回まで。

5・REINFORCEMENT

— 2 3 4 2 ラボラトリ廊下

——「睦月ケイスケ」

コウタと二人で初めてコンゴウを倒した晩、どうにも興奮して寝付けなかったから、その辺をふらふらと歩き回っていた。すると、神妙な面持ちで研究室に入っていく宣伝部長を見つける。

激しい好奇心に駆られ、ドアに耳でもあてて中の様子を確認することにした。普段の博士と部長のやり取りについて知りたいと思うし。実は意外と仲が良かったりするんじゃないかと。ケイスケ「……んー、何とか聞き取れそうだな」

— 2 3 4 2 研究室内 (Sound Only)

——「睦月ケイスケ (聴覚情報のみ)」

支部長『ペイラー。……重要な話があるということは話したが、』

博士『こつちも重要な話はあるさ。ほら、これだ』

(コトンと、何かを机に置く音。軽い水音も聞こえる。薬品か何かだろうか?)

支部長『これをどうしろと言うのだ?』

博士『飲んでみてくれ。そして感想が聞きたいね』

支部長『……そちらの重要な話は1つか。私は2つだ、私が先だな』

博士『飲んで、感想を言う。こつちも2つだよ』

（わずかな沈黙。ああ、いがみ合ってるっぽいね。この2人、思ったより仲が良くないのかもしれない）

支部長『……何かの薬なのか』

（お、宣伝部長が引いた。博士のほうがもしかして偉い？）

博士『ジュースだよ、まだ名前はないけどね』

（ジュースか。まあ、サカキ博士が薬つてのもあんまり似合っていない気がしたけど）

支部長『はつきり言わせてもらうが、色と臭いからして飲む気にはなれないな。材料はなんだ？』

博士『それは企業秘密さ、強いて言うなら何かの感情かな』

（飲み物を飲む音、おそらく宣伝部長が覚悟を決めて飲んだに違いない）

（続いてグラスが割れる音。あまりの味に落としちゃったのかな）

（そして大人の男性が倒れる音。——宣伝部長——！！——おい、博士……毒殺したのか？！）

（——5分あまりの沈黙。なんか不気味。というかやっぱり殺したんじゃない？……）

（ようやく大人の男性——宣伝部長が立ち上がる音が聞こえる。なんだ、生きてたのか）

支部長『こ、……これは劇薬だ。……あまりにも、危険すぎる』

博士『まだ改良の余地はありと見たね。ところでヨハン、君の用事はなんだい？』

支部長『……なぜ、彼をここへ呼んだ？』

（彼？……誰かを呼んだ？　もしかして、ウィラードさんのことだろうか？）

博士『君が一人呼んだから、僕も一人呼んだ。それでいいじゃないか』

（まあ、たぶんそれが妥当だと思うけど。宣伝部長は納得してないみたいだな）

支部長『——ペイラー、君が何を考えているかはわからないが、

……君はスターゲイザーだろう？　何もする気はないのにもかかわらず、勝手なことをされても困るな』

（スターゲイザー？　超能力者かな？　まさか、その力で世界征服を目指して……バカバカしい）

博士『そもそも、彼がここ極東支部へ来ることは事前に決まっていたじゃないか。彼もこちらへ来ることを大いに望んでいたんだ、君の勝手な都合でキャンセルするのは酷だろう』

支部長『こちらにも事情というものがある。そちらを優先するのは、このフェンリル極東支部の支部長を務める、私の権利であり、義務でもある』

博士『それに君が、伝え損ねたって雨宮くんに伝えたんだろう、君が認めたってことじゃないか』

支部長『それは混乱を避けるためだ。認めたわけじゃない。それよりも、』

（こんな感じの話が延々と続く。いい加減にしてくれよ、ホントに）

博士『——この話はいったん止めよう。このままだと水掛け論になってしまうよ』

支部長『——そうだな。少し時間も遅い、仕事に障っては困る。

……だが、いつか時間が取れたら、詳しく話し合おうじゃないか』

（まだ支部長はあきらめていないみたい。ちょっとしつこいかも）

（結局、彼——ウィラードさんと呼んだ理由は分らなかった。
そして話題は変わる）

博士『それで、もう一つの重要な話つてのはなんだい？』

支部長『——簡単な質問がしたかっただけだ。好きな色——いや、ブルーとピンク、どちらが好きなかな』

博士『そうだねえ……。ピンクのほうが気に入ってるよ。ジュースのラベルにしてもいいかもしれないね。——ああ、そういえば、
——もうすぐだったね。今年で、何年になるのだったかな』

（もうすぐ？ でも、ブルーとピンクってなんだろう。花かな？
花つてことは、もしや——）

支部長『その話は、よしてくれ。……とにかく、用事は済んだ。——さて、入口のネズミは、どうしておくかな』

（ドアが開いた）

—— 2349 ラボラトリ廊下

—— 「睦月ケイスケ」

支部長「聞き耳を立てるとは、感心できないな」

ケイスケ「あ、いや、……そ、そういうつもりじゃあ——」

支部長「ペイラー、彼にも例のジュースを振る舞ってやってくれ」
そう言って宣伝部長はその場を去る。

博士「さあ、睦月くん、君に頼みたいことがあるんだ。ちょっと来てくれるかな」

ケイスケ「いや、ご遠慮しますよ、別に嫌な予感がすると言うか、嫌な予感しかないというか……」

兎にも角にも俺は研究室の中へ連れて行かれて、得体のしれない液体を無理やり飲まされることとなった。

——えも言われぬ味に、意識が飛んだのは言うまでもない。

—— 1108 カノンの部屋

——「榊レキ」

台場さんが、自分の部屋へ招いてくれた。どうやら挨拶をしたかったようだ。

カノン「第二部隊は主に私たちが活動してるんです。私と、タツミ君と、ブレンダンさん」

タツミ「お前もこの間入ったっていう新入りか？ 何度か会ったがなかなか挨拶できなかったからな、引きずっちゃって悪かったな」

正直気付かなかったとは言えない。ああ、おそらく口が裂けてもな。

カノン「レキさんたちも、ここへ入隊してもうすぐ一ヶ月ですよ。もうここには慣れましたか？」

レキ「あ、ええ。仲のいい奴もいますし」

ブレンダン「だからといって、油断するのは得策ではないな」

タツミ「おいおいブレンダン、あんまりプレッシャーかけないでやれよ、今は任務中じゃないんだからなあ」

仲のいい奴とって、真っ先に思い浮かんだのはフォーゲルヴァイデ。なんだかんだ言って、あいつがいなかったら俺の心はとくに折れてたからな。

そして、ケイスケに、コウタ。あいつらとの任務は、結構楽しいと思っている。任務を楽しいと思えるのは、いささか不謹慎だが、な。

雨宮上官に、サクヤ上官。雨宮上官はいろいろなことを教えてくれるから、とても感謝している。サクヤ上官は……心から、本当に感謝している。

お湯が沸いたのを確認したのか、台場さんが台所まで行った。コーヒーのいい香りがこちらまで漂ってくる。

レキ「そついえば台場さんは、料理とか得意なんですか？ 自分はどうも苦手なんです」

これだから温室育ちのお坊ちゃまは。俺の馬鹿、馬鹿馬鹿っ。

カノン「うーん……正直、ちょっと自信はないんですよ。あ、でも今日はクッキーを焼いたんです。おいしいと思いますよ？」

そう言つてコーヒーと一緒におしゃれな皿に入ったクッキーを持つてくる。

——正直、クッキーと言つていいかは微妙な出来栄であつた。見た目はつきり言つてオセンベイ（もち米を薄く延ばして焼いたもの、らしい。写真では何度か見たが、実物を見たことも食べたこともない）だが、味のほうはどうだろうか？

カノン「台場カノン特製、『ボマークッキー』です！ さあさ、どんどん食べてください。……あ、なくなつてもまだありますから安心してくださいね？」

レキ「と、とりあえず大森さんから、どうぞ」

タツミ「あ、ああ。分かつた」

先輩の貫録を何とか保ち、大森さんはそれを口にし、……一瞬間な顔をした。なんと形容したらいいか、——固い？ 固かったのか？

タツミ「——あ、……でも、おいしいな、意外と」

カノン「い、意外とって！ ひどいですよー！」

そして、つぎにバーデルさんが口にした。こちらの表情は揺るぎない。そして、それを租借し終え、一言つぶやいた。

ブレンダン「おいしいじゃないか、意外だ」

カノン「ふ、二人に食べさせたのが間違いでした！ もうあげませんから！！ ——あ、レキさん……、すみません。あとで容器に入れて全部あげますから」

初めて二人に殺気を覚えた。今度一緒に任務に出たら誤射しまくるう。

カノン「——それで、今日からまた新入りが入るらしいんですよ」
ブレンダン「また新入りか。それで、どんな奴なんだろう。できれば落ち着いた人であってほしいな」

つまり、俺たちの後輩ってわけか。何かちよつとドキドキしてきた。先輩らしいところ見せられるかどうか、というのがその心境の大半を占めている。

タツミ「ヒバリちゃんから聞いたけどさ、なんでも3人、そんなもって全員新型らしいぜ」

カノン「ま、まだ続くんですか、新型ラッシュ？！」

極東支部は他の支部と違い、なかなか新型神機使いに恵まれない傾向があった。どうやらこの辺りの人種の体質と関係しているらしいが。

実は俺はこの支部2番目の新型神機使いらしい。ちなみに1番はケイスケだ。俺がもう数時間早ければ、とは思っていない。……思

っていないはず。

そして3人ときたか。俺たち合わせて5人。他の支部に比べるとまだまだ少ないのだが。

タツミ「なんでも支部長が直々に、一人ロシア支部から引き抜いたらしいぜ。あちらさんは新型が多いって聞いたからな。あと、居住地区内から一人」

レキ「——一人足りませんね」

カノン「忘れないであげてくださいよ、南米地区からも一人来てます、……でも、今はまだぐっすり眠っているみたいですけど」

あのウィラード・カーライル・なんとかという奴もか。しかし、起きているところを見た覚えがない。何度か起きてきているとかそういう噂はよく聞くのだが。

タツミ「その辺はどうなるんだろうな？ ……ん、おいカノン、客が来たみたいだぞ」

カノン「あ、はい」

と、ドアを開けに行つて、足を思いつきり滑らせた。

カノン「わっ、きゃああああああ」

そして運悪くドアが開いて、客を下敷きにしてしまう台場さん。

来客「む、むぎゅう」

カノン「ううう……、いたたたっ」

レキ「だ、台場さんっ、早く起きてあげてください！ 下の人窒息してしまいますー！」

そして我に返った彼女はさっと起き上がる。

カノン「わ、ごめんなさいっ！」

寝起きの来客「ひ、ひどいですね……。また寝ちゃうんじゃないかって思ったじゃないですか。……おっと、これはこれは改めましてこんにちは、夜でしたらこんばんは。つかぬ事を伺いますが、いま

何時でしょうか？」

……どうやら例の彼は、ようやく起きたようだった。とりあえず俺たちは、彼をあいさつ回りよりも支部長室へ連れて行かせた。

—— 1148 エントランス

—— 「睦月ケイスケ」

任務をドタキャンしてデートとやらへ行ったリンドウさんに少々突っかった。

だけどリンドウさんは大人の対応しかないものだから、なんとどうかゼリーに釘を刺したような手応えのなさ。

コウタ「ほんとずるいですよ、リンドウさんに俺の活躍っぷりを見せてあげたかったし」

ソーマ「……お前、そんなに活躍してたか？」

痛いところを突かれて言葉に困るコウタを見て俺とサクヤさんは笑った。

—— 死神と噂されるソーマという男。……悪い奴には見えないんだが、あまり集団行動を好まないようだ。一匹狼ってやつかな。よく分からないけど。

コウタ「それで、デートに行ってたらしいですけど、どんな彼女ですか？ せっかくですから、俺にも紹介してくださいよ」

リンドウ「そうか、……まあ、お前の手には負えないと思うがな」

まだ食いつくかコウタ。いい加減その話題から離れる。

—— 突然支部内に発せられる一斉連絡、……俺たちには関係な

さそうだが、リツカさんが少々焦っていたのが見て取れた。

ケイスケ「なんだったんだ、今の。……うろなんとかがどうか。なあ、コウタは知ってるか？」

コウタ「あ——、うん。とってもでかい奴でさ、なんというか印籠みたいだな、」

ケイスケ「なるほどな、さっぱり分からないぜ。サクヤさん、あとは任せます」

ウロヴオロス。——巨大な体躯と、絶大な体力、攻撃力と耐久力、どれに關しても他の多くのアラガミを超越している。詳しくはデータベースを参照、らしいが、聞く限り今の俺たちではまともに戦えはしないだろうな。

ケイスケ「だけど、そういわれると挑戦したくなるんだよな。まあ、もつと強くなったら、の話だけど」

リンドウ「本当に、倒せる時が来るといいな。よし、強くなりたいならもつとおごるがいいさ」

サクヤ「リンドウ、あなた大人でしょう？ 子供からたからないの」

——俺はふと時計を見る。……もうすぐ正午を回る。そう、もうすぐだ。

リンドウ「今日からお前らの後輩が入ってくるということだ。しっかりしろよ？」

サクヤ「先輩って言ってもほぼ1ヶ月の差じゃないの。それに、3人のうちの2人は他の支部からの異動だからあまり気にしないで。いつも通り構えていればいいわよ、あなたたちなら」

気付けば続々とエントランスへ集まってくる他の神機使い。俺たちが既にいい位置を取っていることを妬んでそんな奴らが垣間見える。レキ「横、入るぞ」

俺の左へ少し強引に入る奴。……レキだ。どこで油売ってたんだ

ろうな。ちょっとコーヒー臭い。

リリア「ああ、ちょっとそこ入るねー」

ずいっと隙間から俺の右側へ無理やり入ってくる奴一人。

ケイスケ「なんだ、リリアか」

リリア「新しく入ってくる人って、どんな人なんだろうね」

ケイスケ「少なくとも、俺よりは技量が上だと思っぜ」

——そして時間。エレベーターから出てくるツバキさんと、新入り3名。

ツバキ「本日よりここフェンリル極東支部に配属される新人を紹介する。まず、アリサ・イリーニチナ・アミエーラ」

ツバキさんがそういうと、一人の少女が前へ出て、頭を下げる。

アリサ「初めまして、アリサ・イリーニチナ・アミエーラです。本日1200付でフェンリル極東支部へと異動となりました。どうぞ、お見知りおきを」

それにしても、スタイルはかなりよさそうだ。見た感じ同年代なのに。コウタは女の子ならいつでも大歓迎だと言い出す始末。だけど、俺はあんまりこういう機械的な奴は好きじゃないな。

アリサ「……よくも、そんな上付いた考えでここまで生きてこられましたね」

ほれみろ、そおらみろ。俺の思ったとおりだろ。向こうも脈ありには到底見えない。ざまあみろ、コウタ。——っと、悪乗りしてきた。

ツバキ「次、ウィラード・カーライル・シャムロック」

ウィル「えっと。どうも初めまして、ウィラード・カーライル・シャムロックです。……長いから以下同文でいいですね。名前も長いので、ウィルで結構です。とりあえずよろしくお願いしますね」

レキほど堅苦しくもない、丁寧な口調（だけど、一人称は俺じゃなかったつけ？）。それでいて、俺よりは整ってる顔（ちよつとだけだ、絶対ちよつとだけだからな！）に、爽やかな感じが万人受けしそうだ。

ケイスケ「とりあえず、よろしく」

俺はウィラードさんに握手を求める。さっきの女には拒否されたが、彼は快く受けてくれた。

ウィル「どうも、『初めまして』こんにちは」

ケイスケ「えっ？」

ウィル「えっ？」

わずかな疑問を覚えたが、何でもないと行ってその場をどうにか取り繕った。……『初めまして』じゃ、ないはずなんだが。

ツバキ「最後、橋越ルカ」

ルカ「ルカです。橋越ルカ、以下同文、どうぞよろしくお願いします！」

大声。活発な感じだが、なんだか地味に擦れた感じがする。見た目は、俺たちよりかなり年上な感じ。ソーマと同じくらいの年齢かな。やっぱりコウタは喜んでいるようだ。

コウタ「それじゃあ俺からよろしくっ」

勇敢にもまず一番にコウタが握手しに行った。……一瞬彼女の顔が強張ったように思える。もしかして受け付けなかったのか？

あ、でもちゃんと握手してる。一体何がどうした。

紹介が終わって、だいたいの人が帰っていった。んー、野次馬が多いったらありゃしない。

ツバキ「橋越はメディカルチェックを行う。時間は分かっているな？」

ルカ「はい、分かっています」

ツバキ「……あと、シャムロック。榊博士が呼んでいる。すぐ来てくれ、とのことだ」

ウィル「え？ はい、分かりました」

そして、ツバキさんはエントランスを離れた。

アリサ「——シャムロックさん、早く行った方がいいんじゃないですか？ 時間がかかると橋越さんが迷惑なので」

ウィル「それじゃあそうさせてもらいます。時間がかかったら、すみません。……ところで、研究室はどこでしょうか？ あまりこの支部の構造に詳しくないので」

俺たちが案内に名乗り出たが、結局（なぜか）ソーマと一緒に行くことになった。

ソーマ「なんで俺が……」

サクヤ「当たり前よ、あなた先輩なんだから」

そう言つてサクヤさんは軽くソーマの背中を叩く。彼の頭の血管が少し切れそうになっているように感じたのは言うまでもない。あの人沸点低いから、途中で切捨御免みたいなことになっていなければいいけどな。

1207 研究室

——「ウィル・シャムロック」

ウィル「わあ、ここがサカキ博士の研究室ですか。やっぱり極東支部は進んですね」

博士「あ、来たようだね。君は予想通りの時間に来てくれると思ったよ。——彼を送ってくれたこと、感謝しているよ」

むう、やっぱり舌打ちする。この人はそういう性格なのかな。……
……だけど、少し前の『彼』に似てる。

ウィル「とりあえずありがとうございました、えっと、……お名前は何ですか？」

ソーマ「ソーマだつ。くそつ、お前といると調子が狂う」

——これは独特のツンデレモードというヤツかな？ そんなわけないか。あれ、出て行っちゃった。

ウィル「ところで、話ってなんですか？」

博士「個人的に神機使いがそれぞれどんなパラメータであるかを調べたいだけさ。ちよつと調べるだけで終わるよ」

ウィル「個人的つてところがブラックで、素敵ですね。それに話じやありませんし」

眼鏡がきらりと輝く。まるで悪の科学者みたいでかつこい。直接会ったのは初めてだけど、自分の思ったような人とあまり変わらなかった。

ウィル「ところで、博士。その節はどうもありがとうございます」

博士「いきなり感謝だなんて、どうしたんだい？」

ウィル「……ボクは博士がいなかったら、きっと生きていられなかったでしょうから」

——分かってくれないようなそぶりをわざと見せるものだから、ボクはポケットから『それ』を出してみせた。……『それ』を見てにやりと博士は笑う。だからボクもにやりと笑い返してやった。

ウィル「そういえばアミエーラさんに早くしろって言われてました。橋越さんのために急いでくださいね」

というわけでベッドへ行く。寝ていればよかったんだっけ？

博士「じゃありラックスして、しばらくは寝ないでいてほしいね」
ウィル「すみません、それはできないかもしれないです」

残念ながら盛大に二度寝を開始する。寝ることほど気持ちのいいことはないからね。おやすみなさい。

1502 第二訓練所

——「橋越ルカ」

訓練所。うわー、広い。雨宮上官がいなかったら詳しく調べられたのになー。

ルカ「わたしとアミエーラさんだけですか。シャムロックさんは訓練しないんですね」

ツバキ「彼は3年間南米支部で活動していたらしいからな。アミエーラは確か……」

彼女は、しばらく任務に出ることがなかった。だから仕方なくこの訓練を受けているそうだが、彼女は最初必要ないと言ったようだ。

ルカ「じゃあアミエーラさん、よろしく頼みますね」

アリサ「もう少し大声で返事をすると思っただら……。とにかく私の足手纏いにならないよう、お願いします」

あっちゃあ……。やっぱり大声での印象付けは難しかったかな。ただ、彼女の性格に対する小さな怒りが生まれかけていた。

ツバキ「訓練はおよそ三日かかるが、ちゃんとついて来れるか？」
ルカ「……それじゃあ、一日でお願いします。彼女にもあまり『メイワク』かけたくないんで」

もちろん雨宮上官はそんなに簡単なことではないと言った。——
「だけど、わたしは追いつくためなら、どんな努力も厭わない。いつか強くなったら、——うん。とにかく今は頑張るしかない。」

ツバキ「分かった。橋越がそう言うなら仕方がないが、アミエーラ、異論はないな？」

アリサ「ええ。私もそちらのほうがこんな面倒なことに付き合わせれないで、非常に助かります」

いちいち上から目線だ。——好きになれそうもないな。せっかく同期でここへ来て、そのうえ同性だから会話が合うかなあと思ったのに。

ツバキ「それでは、三日分の訓練を今から纏めて行おう。まずは攻撃、変形、バレット、ガード、道具の使用方法。これらの基本動作ができたら実践の一環としてオウガテイルの討伐任務に出てもらおう。そして、中型以上のアラガミへの対処法も指示する。これをすべて一日で行うため、少しの遅れが大きなタイムロスにつながる。早急に行うように。以上だ。いいな？」

ルカ「了解ですっ！」

—— 1105 自室

—— 「睦月ケイスケ」

ウィル「片付けられるっていいですね。ボクはてんで駄目ですから」

彼がウィラードさん。ここへ彼が来るのも二度目のはずなのだが、彼にとってここへ来るのは初めてのようだ。そもそも、それを確か

めるためにここへ招いたんだ。だから、思い切って聞いてみることにしよう。

ケイスケ「ウィラードさん。……ここへ来るのって、2度目ですよ
ね？——初めてじゃ、ないですよね」

ウィル「君が初めてっていうのなら初めてでしょうし、2度目って
思うのなら2度目ではないでしょうか」

はつきりしろっ。自分の頭で考えろと言ってるように思えた。

ウィル「あと、ウィルって呼んでくれていいですよ。長いでしょう
し。それに、同年代だから敬語なんて使わなくて結構ですよ」

ケイスケ「あ、……うん。その、……ウィル」

ケイスケ「とりあえず、何か飲み物持つてこようか。あ、コーラと
サイダーがあるけど」

ウィル「サイダーで。サイダー」が「いいです。……ボクの言うて
ることの意味は、分かりますよね？」

……この人、サイダーか？（註：サイダー＝サイダー愛好家）
サイダーはコーラをどうも目の敵にしているとかなんとか。

（註：コーラ＝コーラ愛好家）

ケイスケ「はいはい、分かりました。ついでにいろいろと話聞かせ
てほしいです、南米地区の話とか」

ウィル「……そうですね、まずは初めから——」

いざ彼が語りを始めようとしたところで、ノックもなしにドアが
開く。げっ、あのタカビー女じゃねえか。

ウィル「あ、アミエーラさんですか。どうかしましたか？」

アリサ「どうしたもこうしたもありませんっ、メールちゃんと見ま
したか？」

ウィル「メール？　なんですか？」

タカビー女はとぼけないで下さいと一蹴する。

ウィル「南米支部にはそのようなものはなかったの。世界はすぐに進むものなんですね」

アリサ「だから、これから任務へ行きますよ!!」

ウィル「そうなんですか？ ケガをしないように頑張ってくださいね」

うわぁ、天然というかこれ、わざとじゃないか？ ……恐ろしい子っ!!

とうとう痺れを切らした彼女は、ウィルの襟首を掴んで引きずっていく。

ウィル「わ、わ、何するんですかつ!？」

アリサ「いいから行きます！ 文句言ったら殴り飛ばしますよ?!」

ケイスケ「と、とりあえず二人とも、頑張れよ……」

本当に、ただ手を振るしかなかった。

—— 1410 エントランス

——「ウィル・シャムロック」

アリサ「連れてきました。本当にこの人って、自覚が足りてませんね」

ウィル「自覚はちゃんとありますよ。ただ、少し寝不足なだけです」
リンドウ「おい、あんなに寝ていたのにか？」

雨宮隊長に突っ込まれた。ボクは半月ほどぐっすりだったそうだ。

……少なくとも、『ボク』は寝ていたみたいだけ。

ルカ「さて、初任務ですね！　なんか戦争ゲー——ゴホゴホ、潜入取材みたいでめちゃくちゃ楽しみですな」

アリサ「何言ってるんですか！　これからの戦いは取材とかじゃないですよ？　それにあなた方、本当にやる気があるというんですか？！」

ルカ「そりゃもちろんありますよ。10体でも100体でも何体でも蹴散らしてやりますってば」

ウィル「やる気がなければ、このような場所へは来ずに寝ていますから」

空気がちよつと痛くなってきた。アミエーラさん、怒ってるみたいだ。

リンドウ「さ、さて行くとするか。ところで、今回の任務の討伐対象は分かっているな？」

アリサ「シユウ2体です。シミュレーション通りにいけば、10分も時間はかからないでしょう。……あなたが足を引っ張りさえしなければ」

ルカ「シミュレーション、ですか。本当にそううまく行くといいんですけどねえ、あなた一人で」

雨宮隊長は困っているみたいで正直不安だ。確かに、困ったさんがここに二人もいるのだから、相当大変だと思うな。

リンドウ「お前もだ」

ウィル「そうなんですか？」

昨日の訓練の疲れはすっかりとれた。さすがはわたし、といったところかな。体力には結構自信あるし。——あ、でもほとんど栄養ドリンクのおかげのような気もするけど。

ルカ「……緊張、しますね。収まってほしいですよ。どうにかありませんか？」

アリサ「わ、私に聞かないでくださいよ、聞くなああの旧型の隊長をお願いします」

——旧型の隊長、ね。ひどい言い種よ、ほんとに。旧型って言っても隊長じゃないの、ちゃんと敬意を示さなきゃ。

リンドウ「——おい、ウイル。起きてるのか？」

ウイル「……あわわ、すみません。寝かけてました」

隊長は隊長で大変そうだなって思ったけど、一番大変なのはどう見てもアミエーラさんっぽい。わたしもちよっと心配そうに見られてみたい。そりやわたしがこの中で一番実戦経験ないけどさ。ちゃんと訓練は一通りやったから大丈夫だって。……自信ないけど。

リンドウ「それじゃあ行くとするか。じゃあ、お前らに大事な命令を、」

アリサ「結構です。——旧型は旧型なりに頑張っていただければいいので」

なんて横柄な態度なの？ わたしもいい加減堪忍袋の緒が切れそうだった。

リンドウ「おいおい、そんな言い方しなくてもいいじゃないか」

それでも隊長さんの対応は大人。将来はこんな旦那さんがほしいな。——わ、やだ、何考えてるんだろわたし。

アミエーラさんをなだめるように隊長さんは、彼女の肩に手を置いた。

アリサ「きゃっ?!?!」

すると彼女は何かによかれたかのように、その手を払いのけて飛びのいた。……その眼には、恐怖の色が感じられて、ますます彼女が何を考えているのか分からなくなる。ただ言えることは、彼女が男性に障られることを嫌っているわけではないこと。

そして彼女もまた、自分が何をしたか気付いたようだった。

アリサ「——す、すみません。……取り乱してしまつて」

だけど隊長さんはそれを咎めることはなかった。彼は優しく彼女に言う。

リンドウ「混乱した時は、空を見るんだ。それで、動物に似た雲を探すんだ。……そうすれば万事どうにでもなるさ。それじゃあしばらくそうしているといい。行くぞ、ウィル、ルカ」

ルカ「了解です」

ウィル「……あ、はい」

わたしは隊長を追って走り出して、一度彼女を確認するために振り返る。——彼女は素直に隊長の言うことを聞いて、空を見ていた。性格は、そこまで悪くないかもしれないと感じた。

ターゲットを探していると、マップに赤い丸が表示される。向こうがこちら側を確認したようだった。

リンドウ「やっと出てきたか。じゃあ二人とも、援護はしっかり頼んだぞ」

ルカ「了解です！……って、あれ？」

シャムロックさんがポツリと立ち止まっている。まさか寝ているんじゃないだろうか？ 立ったまま寝るとか器用だなあと思った。もちろんそんな特技はほしくない。

ルカ「あの、シャムロックさん？　もしもし、聞いてますか？　気を抜いたら危ないですよ」

ウィル「――」

彼は目をつぶっていた。やっぱり寝てるんじゃないか。とりあえず早く起こしてあげようか。

……だが、彼はゆっくりと口を開く。

ウィル？「なア、……誰が気を抜いてるんだ？」

ルカ「え――？」

彼は重みのある声で呟いた。なんというか、雰囲気さがりと変わったような気がする。先ほどの彼とは違う、なんだろうか。なんと形容すればいいのか……？

リンドウ「うつ、うおおと！　おいお前らっ？！　いい加減に援護をしろ――！」

どうやら火球に手間取っているようだが、遠くで見ていると少々動きが滑稽に見えた。……たぶん面と向かって言ったらぶっ飛ばされると思うけど。

ウィル？「とにかく、あいつをボロボロになるまで甚振ってブチ殺れ、ッてことだろ？　了解了解」

そう言っただけ彼は神機を構える。――やっぱり何か違う。先ほどまでの落ち着いた寝坊助の彼とは違う、好戦的な人。

……そして勢いよく走り出して、シユウの手前で踏み込んで、胴に一太刀浴びせる。そして振り返りざまにもう一太刀。……彼の神機の刀身はどう見てもショートである。だが、この動きはロングのそれと同じであった。かと思えばショート風に切り上げ、バスターのコンボ締めのように剣を叩き下ろす。

ルカ「我流ってやつかな。――なんというか、破天荒ね」

そんな無茶苦茶な攻め方でも、あちらの攻撃を完全に避けているところから見て、あくまで完成形のようだった。

ルカ「って、見てる場合じゃないか。わたしもそろそろ援護したほうがよさそうね。よーし、張り切っていこう！」

わたしは背後のアラガミに気付かなかった。そしてその腕翼がわたしの体を覆って、

アリサ「気を抜きすぎです！　なんで気づかないんですかっ？！」

遠くからレーザーが飛んできて、その弾はシユウの頭部を貫通した。血が体にべっとり付いたが、シユウが一瞬怯んだところでなんとか戒めを解いた。うう、気持ち悪い！

ルカ「あ、ごめんなさい。ちょっと、あなたのこと本当に遅いなあ、遅すぎだなあと思ってたところで」

アリサ「結構です。それより、旧型の隊長は、今どんな状況ですか？」

ルカ「シヤムロックさんが援護しているみたいです。……任せておけば大丈夫ですよ」

無論、彼女はそれを信用できていないようだった。だからこそ、彼の戦っている様子を見て、先ほどの様子とのギャップに相当驚いているようだ。

ルカ「それじゃあアミエーラさん。こっちはこっちで、倒してしまいましょか」

腕組みをして挑発するシユウ。そして攻撃の構えを行ったのを確認してから、遠距離からのホーミング火球を紙一重でかわす。

アリサ「足を引っ張らないようにお願いしますね」

ルカ「あなたこそっ！」

わたしは剣形態に切り替え、昨日習ったとおりのことを次々と行

つてみた。少々きこちないけど、二人がかりなら何とかなりそうだ。

ツバキ『橋越、なかなか物事の呑み込みが早いな。こういったことは得意なのか？』

ルカ『まあ、好きこそものの上手なれってやつですよ。そうじゃなきゃやる気ないですから』

なんだなんだ、シャムロックさんと微妙に思考回路が同じじゃないか。ちよつとシヨックだ。

1515 贖罪の街

——「雨宮リンドウ」

リンドウ「——俺が援護される側なんだが」

彼——ウィルの剣技は、それぞれのスタイルをミックスした、よく言えば独創的な、悪く言えば滅茶苦茶なものとなっている。一体誰に教わったのか、じっくり聞いてみたいものだ。それよりも、困ったことに完全に立場が逆転してしまった。

ウィル？「おいおいどうしたよオ、もつと強く抵抗したらどうだ、えエ？」

彼が先ほどのまでのおつとりした奴と同一人物だと聞かされても、俺はまず信じない。まるで我を忘れてしまっているかのようだ。

リンドウ「おい、ウィル。そろそろ下がれ」

ウィル？「やなこつた。こいつが、こいつが仇だッたらどうするん

だよ？ オレの手でケリをつけなきゃ、いけねエンだよ！」

彼の戦いにおいての冷静の二文字が、徐々に失われていく。先ほどまでは積極的に攻撃を避けているように見えたが、だんだんと傷つくことも厭わなくなってきたようだ。それにしても、先ほど言ったことが引つかかる。仇とは、一体誰の仇のことだろうか。

ウィル？「うおりゃあぁッ！ ……へへッ、見事な血しぶきじゃねエか！！ これぐらい出してくれねエと償いにはならないぜ？！」

顔中にべつとりと付いた血を服で拭い、小さな笑みを浮かべる。

——軽い狂気を感じた。やはり彼を、止めるべきだ。

リンドウ「おいウィル、少し頭を冷やせ。自分の体の心配ぐらい、自分でしたらどうなんだ」

ウィル？「そいつはどここの誰の掟だよ？ オレはオッサンの掟通りに戦ってるだけだ。『殺るなら最後まで積極的に、人を呪わば穴二つ、サーチアンドデストロイ』ッとな」

どんな掟だ。最後のサーチアンドデストロイだけがとても浮いているぞ。

リンドウ「とにかく少し落ち着いたほうがいい。アラガミにどんな怨みがあるかは知らないが」

ウィル？「やだね。オレはあんたのことを気に入ってはいるけど、生憎信用はしてないからな」

……気に入られているのか。悪い気はしないが、……これまで会って話したことなどないというのにな。

再び彼は戦いだす。……彼の体もボロボロだが、それ以上にターゲットのシユウもひどい。頭部、腕翼、下半身、全てが結合崩壊を起こしている。——とにかく3年という年月以上の実力は確かに備わっているようだ。

だがしかし、一つ疑問が生じる。それは、彼が一度も捕喰を行っていないところだ。新型の神機使いは通常、リンクバーストなどを行うために適宜捕喰を行う。そうでなくとも、バースト状態の恩恵は大きい。隙あらばチャージ捕喰を、攻撃の合間を見計らってコンボ捕喰を行うはずだ。だが彼は、その両方とも行おうとしない。自分に課したルールか、はたまた掟とやらか。

ウィル？「——はア——はア——、……あばよッ、奈落の底へ帰れよッ、そして二度と戻ってくんじゃねエ……」

シウは倒れ、動かない。どうやら終わったようだ。結局、彼の独壇場となってしまった。

彼の血走った目と、その口元に浮かんだ歪んだ笑み。——彼がウィラード・カーライル・シャムロックと一致しない。彼のアイデンティティそのものが、揺らごうとしていた。

——1520 贖罪の街

——「橋越ルカ」

ウィル「ふう、ようやく終わったみたいですね」

にこりと、戦闘を始める前のいつもの笑みを浮かべるシャムロックさん。

——「だけど、体はボロボロなうえ、顔にべっとりと付いた黒血が、拭われないでいて少し怖い。」

アリサ「だらしないですよ。ほら、タオルです。……古くなった奴ですからあげますよ。汚された奴を返されても困りますし」

ウィル「わ、ありがとうございます」

彼はタオルで顔を拭くけど、ただ血を塗り広げているようでありきれいにはならないようだった。

アリサ「……あ、橋越さん」

ルカ「なんです？ ……あつ、説教はよしてくださいよ、慣れてるっっちゃ慣れてますけど」

わたしが少し身構えたのを見て、怪訝な顔をする。もう、何が言いたいのか？

アリサ「あなたも自分の顔拭いたらどうですか？ シャムロックさんのこと笑ってる場合じゃありませんよ」

ルカ「べ、別に笑ってないです！ というか笑えませんか」

それは彼女もごもともだったようだが。とりあえずポーチからハンカチを取り出して拭いた。うう、べつとりと付いてたよ、汚いなー。

ウィル「動いたから少し眠たくなってきましたね。ところで、ヘリはいつ来るのでしょうか？」

リンドウ「そう焦らなくてもヘリは来る。……ほら、来たぞ」

隊長がそう言ったのを聞いて、わたしは空を見上げる。そこにはボディーを黒光りさせながら、こちらへ近づいてくるヘリがあった。……わたしはその時初めて、昨日の訓練とは違う何らかの達成感を感じたような気がした。

5・REINFORCEMENT（後書き）

新型を大量投入した結果がこれだよ！ ああ、まさにカオス。というか、この中に本編の主人公みたく悩みも何も抱えていない奴っているのかな。

はつきり言つてこの話の主人公はケイスケ。他の3人のオリジナル新型は、いろいろ問題を抱え込んでる奴ら。どんな問題かは、のちのち明かされていくだろうけど。

とりあえず、目標の『アリサを出す』はクリアしたぞ！ というわけで次の目標は…… 『オオグル（以下省略）
それでは次回まで。

6・COME TO THE END

1658 エントランス

――「睦月ケイスケ」

カノン「……あ、あの。本当にすみません……」

フォローのしようがない。というか、正直言っただけだ。

ケイスケ「何とかありませんか？ ……誤射」

ブレندان「カノンはこういう奴なんだ。だが、それがあつて意味個性とも言えるがな」

ブレندانさんはそう言つたけど、さすがに賛同できない。

ちなみに、俺、俺たちは任務で愚者の空母というところへ行つてきた。討伐対象はコンゴウ二体。一体でも少し手間取つたというのに、それが二体とは泣かされる。けどさすが経験者だ。ブレندانさんとカノンさんがすぐに倒してしまつた。もちろん俺とレキも攻撃したよ！

――ただ、弊害かどうかは知らないが、カノンさんが爆発・放射系のバレットをよく使うおかげで俺たちがよく吹っ飛ばされた。これがもし実弾だつたら確実に殺人鬼と化すね、うん。

ちなみにレキの方はリンクエイドを俺に何度もしてくれたせいか、倦怠感を訴えて寝込んでゐる。まだまだ、俺たちも強くならなきゃダメってことか。

……それにしてもレキ、なんであんなに積極的に俺たちのこと、守るようになったのかな。

カノン「そうでした、おわびにクッキーでもどうですか？ お口に

合えばいいですけど」

—— 煎餅だ。クッキーじゃないぞ、これは。でも匂いは甘い。おかしいな？

ケイスケ「んぐむつ、固い！ …… あ、でも意外とおいしいや」

カノン「うー、タツミさんたちと同じ反応しましたねーっ！ やっぱり男の人に食べさせるべきじゃなかったです！」

急に怒りだした。感情の起伏が激しい人だな。 …… 俺のせいだけど。とりあえず謝ったけど、機嫌を直してくれそうにない。参ったなあ。

—— あ、あいつらが帰ってきたみたいだ。

ウィル「ただいま戻りました。ふわぁ …… 、よく寝ましたよ」

アリサ「よく寝たって、本当にゴッドイーターの自覚あるんですか？ ドン引きです」

帰ってくるなり喧嘩かよ。しかし、喧嘩というには一方的過ぎるな。タカビーの方はウィルにキツイ言葉を浴びせているが、ウィルはそれを素直に聞き入れたり、のらりくらりとかわしたり。

結局、そんなウィルの手応えのない態度に呆れ、彼女は拗ねてしまった。

カノン「あ、そうだ。あの、ウィルさん。クッキー焼いたんですけどどうですか？」

そういえば、ウィルの食べ物嗜好とかは聞いたことがないな。

結構舌が肥えてるのかも。

ウィル「わぁ、おいしそうですね、 …… これは煎餅でしょうか」

早速案の定。天然なのかどうかはこの際どうでもいい、凍ったよ、空気が凍てついたよ！

カノン「 …… と、とにかくクッキーです！ 味は、味はどうです？」

うわあああ、よしなよ、自殺行為だって！ 絶対ハートに穴が開くよ！

ウィル「ちょうどいい甘さです。おいしいですね……って、あれ、もうなくなっちゃいました。もうちょっと食べたかったですよ」
カノン「……あ、……はい。どういたしまして……」
あれ、意外と普通に回答を返した。やはり天然なのか、いや、実は狙って言っているのかも……。もしそうだとしたならば、処世術でも身に着けているのだろうか？ とりあえず、今度詳しく聞いてみたいものである。

1715 研究室

——「橋越ルカ」

その日は講習。『アラガミと人間の共生について』がテーマだ。まずは一步身を引いて、聞くことだけを意識しよう。わたしが話し出したら相手のタイプが全く読めない。

レキ「犬、か。昔家で飼ってたんですけど、結局寿命が来てしまつて。……それで、アラガミとどういう関係があるのですか」

ケイスケ「おい、コウタ、起きろよ」

コウタ「もう食べられないよ、かーちゃん……」

アリサ「……本当に、だらしないですね」

ウィル「——」

とりあえず、全員の印象を一通り確認してみようかな。

えっと、まず榊さん。フルネーム、榊レキ。他の人と見比べてみると、一頭秀でた感じが見受けられる。だけど、結構心と体の両方

が打たれ弱そう。まあ見た通りの人物と言って差し支えはないかも。だから心に留めておくべきことは一切なさそう。

しかし、彼が榊という苗字を持っているということは、もしや博士と何か関係が？ そう思ってから後で訊いてみたけど、別に縁はないそう。少し考えすぎたか。

次に、睦月さん。フルネームは睦月ケイスケ。彼はこの前テレビで見たような気がする。……別に有名人とかそういうことじゃなくって、極東支部のCMの活動風景の一部で。

誰とでも友好的になれる感じがする。それでいて、人一倍正義感を持ち合わせている。だからリーダーとしては理想的な感じかな。もっとも、他の部分は平均的だけど。まだ平均以下でないだけマシか。

とはいっても、今のリーダーは隊長……雨宮リンドウ氏で、彼がリーダーになるのはまだまだ先になりそう。それに、彼はまだ若いからね。……あ、わたしも十分若いですよ、まだ華の十代は終わってない！ 十八をなめるな？！……と、一体誰に向かって叫んでんだろ。

藤木さん。フルネーム、藤木コウタ。アミエーラさんの言うとおり、だらしない感じがオーラとして出ている。オーラがどんなものかは知らないけど。

でも、抜けてるように見えて意外と洞察力は高そうに思える。それが発揮できるのはいつになることや。先はまだまだ遠い。彼は母と妹との3人暮らし。父親はどうしたんだろう？

——たぶん、触れてはいけない領域かもしれない。……だからこそ、よく調べてみたい。趣味とか、特技とか、好きなものとか——あ、何考えてんだわたし。

それで、アミエーラさん。フルネームは確か、アリサ・イリーニ

チナ・アミエーラ。ロシア支部から来たけど、入隊して一年ほどしか経っていないそうだ。

まず、高飛車な感じがする。その点は睦月さんはとても嫌っているようだ。あと、結構人のペースに合わせるのがうまそうだ。そのせいかシャムロックさんというときはペースがガタガタになっている感じが強い。

——でも、高飛車な人ほど、心に大きな曇りがあるということを経験上よく知っている。彼女の『シガラミ』は、一体なんだろうか。それに、彼女の家族構成とか来歴とかは入隊時期以外何も知らないから、よく調べてみたい。

最後に、シャムロックさん。こっちのフルネームは、えっと。確か、ウィラード・カーライル・シャムロックだったような気がする。名前がやたら長い。

普段の彼はとても丁寧な態度を取っていて、特に問題はなさそうだけど、一週間前の任務での戦闘のときのように、態度が急に豹変することがあるかもしれない。

あの時の言動は確実に普段と逆転している。解離性同一性障害だろうかとも考えたが、それを確かめる術は今のところない。というか、彼についての情報はアミエーラさん同様ほとんどない。ようするに全く知らない。このわたしがここまで知らないを連発するなんて……。

それにしても彼はよく寝るな。——と思ったら、やっぱり今も寝てた。

今のところこの五人に対する印象はこんなものである。一人としてまともな奴がいらないような気がする。やっぱりわたしが一番まとまどわ、うん。

レキ「……そんなにじろじろ見るなよ、どうしたんだ？」

ルカ「あ、いや、別になんでも」

で、ようやく今回のテーマの核心についての質問が出た。ずばり、『アラガミと人は共生できるか』。

……できたらいいけど、現実問題として考えてみたら、やはり難しい。……これは主観的意見。

博士「じゃあまずは、睦月くんから意見を聞こうか」

ケイスケ「お、俺ですか。……俺は、できると思う。いや、できたらいいな、かもしれないけどな。……でも、そうならきつと、幸せだと思う」

理想論、か。主観的意見をそのまま口にしちゃうなんて、まだ彼も幼いようだ。物事には本音・建前が必要なのにね。……まあ、子供だから、今のうちに言えることたくさん言っておいた方がよさそうだ。そのうち、そんなことさえも言えなくなってしまうのだから。……わたし？ わたしは子供だからズバズバ言ってるけどね。

博士「次は、榊くん」

レキ「……無理ですね。第一、アラガミとは人類の敵です。……アラガミは人を捕食しますが、人はアラガミを捕食できない。対等な関係が持てない以上、人が待つのは死しかありません」

常識を語る。それが一番いい回答かもしれないし、頭が固そうな発言になるかもしれない。……彼は普通の大人かもしれないし、そう叩き込まれたロボットのような人間かもしれない。そんな二面性の垣間見える回答。彼は、前者であってほしい。

博士「次に藤木くん、君は寝ていたみたいだけど、答えられるかな」
コウタ「そ、そりゃあ、えっと。……俺は無理だと思うかな。だって、いつ、みんなに危害が及ぶかわからないし、今は家族を守ることにしかできないから」

……まず問題に触れることができない。そう、現状の問題はまだ

たくさんある。一つの問題に着目しただけでは、その他の問題を解決することは困難だ。その点ではいい回答をしてくれた。

博士「じゃあ、アミエー……」

アリサ「できません。人とアラガミが共存なんて。……不可能、不可能に決まってます」

彼女のそれは、……思考停止。最もわたしが嫌っていて、そして恐れている回答。まだ理想論を語ってくれた方がよかった。ただ頑なに否定するだけでは、何も始まらない。逆にイエスマンを気取れば気取るほど、自分はドツボにはまっていく。

博士「おや、シャムロックくんは……」

ウィル「……く、くああッ……。……あー、起きたぜー」

静かに寝ていたせいか、誰も彼が寝ていることに気付けなかったようだ。……だが、いつもの彼とは雰囲気はどこか違うことに、彼らは気付く。

博士「それじゃあ君は、アラガミと人間は共生できると思うかな？」

ウィル「できるな、絶対に。俺はどこぞの思考パターンを停止したやつとは違うからよオ、ここでそう確信できるぜ」

アリサ「だ、誰が思考停止したんですか?!」

え、もしかして起きてた？ そう思えるほどの的確な回答。そして、喧々諤々のディベート風味の口喧嘩。いつもの彼とは思えない様子に、わたしたちだけでなく、争っているアミエーラさんまで驚いている。

——それにしてもこの二人、なんか仲が悪いんだよね。喧嘩するほど仲がいいっていうし。……んー、お互い気があるとか？

ケイスケ「なあ、ルカさんよ。お前の考えてることはだいたいわかるが、さすがにそれはない。さすがにそれはない」

ルカ「だからって二回も言わないでください、女心が傷物になったらどうしてくれるんですか。お嫁に行けなくなったらどう責任取るんですか？」

恐らく、二人の言い争いはまだまだ続きそうだ。……しかし、わたしたちが驚いている中で、サカキ博士だけが冷静だったことに違和感を覚えた。

1732 贖罪の街

——「ソーマ」

……討伐対象はすべて沈黙。これで任務は終わったし、ヘリもすでに到着している。

……さて、帰るか。

ソーマ「……？」

気配。これは、……アラガミ？ いや、人か？

ソーマ「誰だ？ ……そこに、いるのか……？」

返事は、……帰ってこない。当たり前だ。俺以外に、人がいるわけが、

うふふ、あはは。

ソーマ「——！？」

笑い声と、素早い足音。何かが駆け抜けていった。……教会の中

か?!

ソーマ「誰だ、いるのは分かっている!」

突然、足音がぴたりとやんだ。……だが、気配はまだ残っている。

——恐る恐る、教会の中へ入り、……ゆっくりと辺りを確認する。しかし、そこには誰の姿もなく、気配もすっかり失われていた。

ソーマ「——ふっ、……気のせいか……」

……俺は結局、そのまま帰った。

そこに、人影があることに気付かず。

——そこで、惨劇の芽が育まれていることに、気付かず。

0921 自室

——「睦月ケイスケ」

なんだかんだ言って何事もなく一ヶ月という短いようで長い日々が過ぎて行った。

鉄塔の森で、リンドウさん、サクヤさんと協力して巨大魚、グボロ・グボロを相手にした。あと、マグマ溢れる地下街で熱い(暑い?)思いをしながらシユウという鳥人間っぽいやつを相手にした。ウィルとも協力したけど、あの時のような豹変を見せることもなく、ただ冷静に、スタイリッシュにアラガミを討伐していった。やはり、武器の性能云々ではなく腕の問題なわけか。もっと鍛えないと。

……ちなみに、俺たちはお金がある程度たまったから武器を新調した。もちろん服も新しいのを購入。おしゃれ感が少し高まったよな気がする。風通しも良くなったしちょうどいいな。……でも、戦闘服ばかりじゃなくてもうちよつとカジュアルなものが着てみたいと思うのは、わがままだろうか。

そして今日は、ヴァジュラというまたまた中型のアラガミを相手にするらしい。一度ミSSION中に見かけたことがあったが、討伐対象外となっていたため見つからないように任務を遂行した。だから、どんな攻撃を仕掛けてくるかは俺は知らない。

ケイスケ「さて、準備完了……あれ、あいつらは……」

ドアを開けると、タカビーとウィルと一緒にいた。なんで二人でいるんだろう？

ちなみにあいつらは同行メンバーではない。どういう選考基準かはわからないが、コウタとサクヤさんとソーマの3人と俺でミSSIONに出ることとなった。

昨日はリリアの奴が、一緒に任務に同行してくれた。……とは言ったものの同行メンバーはサクヤさんとカノンさん。そこにリリアが加わる。なんだなんだ、全員衛生兵じゃないか！ だからたぶん彼女と一緒にいくと言い出したのは、それが狙いだっただと思う。……『たぶん』、だが。

ケイスケ「それにしても、何を話しているんだろうな？ ……気になるからちよつと失礼」

ミSSIONまではまだまだ時間はある。オレはドアを閉めて、ドア越しでじっくり聞かせてもらうことにした。

——「睦月ケイスケ (聴覚情報のみ)」

アリサ『シャムロックさん。——あなたは、どういう理由でここに?』

ウィル?『ここにッていうと、……要するに、どうして俺がゴッドイーターになッたかッてことだよな?』

(いつものウィルじゃない。この前の講義の時と同じ感じたが、ちよっとおかしいな)

アリサ『はい。……まさか、ないとは言わせませんよ?』

ウィル?『ああ、ちきしょッ。言うつもりだッたのによ。……まアいいか。ちよいと長くなるぜ。』

——俺にもな、人生を悲観して、すべてを怨み殺したくなッた時があッたわけだ。まア誰にも分からないだろうし、理解してほしいなんでこれッぽッちも思ッちゃいないが。

そんな時、オッサン——世話になッた奴だ。俺にとッては親父みたいなやつだよ、そいつに助け出された。それで、そのオッサンがゴッドイーターだッたッてわけだ。

……でも、本当のことを言うとしたならよ、……これは、復讐のためなんだ。俺から大切なものを奪ッていきやがッたあいつらを、許す気にはサラサラなれねエから。だからな、それまで俺は死に場所を探して、彷徨い迷ッてるだけだ。……本当に正しいことかどうかも分からねエしよ』

(わずかな沈黙。……彼が、ウィルが。軽い気持ちでゴッドイーターをやっているわけではないことが、とてもよく分かった。だが、彼にとッての大切なものとは、なんだろう? 家族? それとも友

人？)

アリサ『あの、シャムロックさん。……あなたは、全てが終わった
ら、生きたいんですか。……それとも、』

ウィル『生きたい、いや、俺を生かしてくれ。でも、生きられない。
だから死にたい、死なせてくれ。……だけれども、死にきれない』
アリサ『それって、ただ死にたくないだけじゃないですか？』

(意表を突いたような発言に、虚を突かれるウィル。生への執着ほ
どわかりやすいものはないからな)

ウィル『……ああ、そうかもしれねエ。死ねない、まだ死ねねエよ。
死ぬ気なんて一切ないぜ。——もしも俺に、生きることが許され
るのなら、な』

(生きることが許される……？ 普通、生きる生きないは個人の自
由(いや、生きないは絶対に誰も許さないか)だ。だけど、彼の言
葉はまるで、世界が彼の生きること望んでいない、むしろ彼に死
を迫っているようで。……ますます、彼のことが分からなくなった)

アリサ『ところで、先ほどの話を伺いましたけど。結局アラガミを
倒すってことは、共生はできないって意味じゃないですか？』
ウィル『そ、そうじゃねエよ。アラガミにもいい奴とか悪い奴とか
がいてだな、』

(……彼の明後日の方角への発言のおかげで、また口喧嘩が始まっ
た。おい、この状況で部屋を出るのって、相当難しくないか？ あ
あ、もうすぐ任務に行かないと！)

(意を決してドアを開け放つ。その瞬間、二人の視線が一斉に俺に
降り注ぐ！)

アリサ『睦月さん、言ってやってくださいよ。アラガミとの共生は
無理だって』

ウィル『おい、ケイスケよ。お前はできるッて言ッたる？　ならで
きるッてこいつを説得してくれよ』

（逃走開始。……、……、うまく逃げ切れたようだ）

—— 1016 エントランス

—— 「橋越ルカ」

ルカ「あ、あれ？　他のみんなはどうしたんですか？」

オペレーターさんなら知ってそうだから、彼女に訊いてみることにした。すると彼女はキーボードを打ち、調べているようだ。

ヒバリ「防衛班の方は、行方が分からなくなつた神機使いや職員の
搜索へ。あと、あなたが言ってるのは多分第一部隊のことだと思
いますけど、彼らは任務へ出ているようですよ。メンバーは、ケ
イスケさん、コウタさん、ソーマさん、あとサクヤさんの4名です」

ルカ「あれ、……じゃあ、隊長やアミエーラさんたちは？」

再び調べると、彼女は冷静に答える。

ヒバリ「任務へ出てはいないようです。居住エリア内のどこかへ
いると思われますが、たぶんどこか個人の部屋にいるんじゃないで
しょうか？」

—— ちょっとした違和感。彼らはアナグラにいないと思つたの
だが、……いるをいらないに見せるのは簡単。ただ隠れば済む話だ。
だけど、その逆は難しい。身代わりとかがない限り、いない人間が
いないはずの場所に存在することは、できないのだから。

ルカ「……なにか、嫌な予感がする。こういう時の予感ばかり当
たるから、自分のことが好きになれないのよね」

無論、その予感はその後的中することとなった。

1111 贖罪の街

——「睦月ケイスケ」

ケイスケ「……やばいな」

5way雷球をもろに喰らってしまい、ソーマが回復柱を出して
いなければ、力尽きていたところだった。……ソーマって、なんだ
かんだ言っている奴なのかもしれない。

しかし、どうやら左腕をやられたようだ。神機を持つ右腕は無事
だから何とかなりそうだが、支障を及ぼす可能性があるだろう。

俺は機転を利かせて咄嗟にスタングレネードを投げ、俺たちはそ
の場を逃げ出した。だが、それもその場しのぎ。少しずつ奴はこち
らへ近づいてきているようだ。

コウタ「ケイスケ、固まったら危ないんじゃないのかな？ 今は
スタングレネードで見失ってるけど、すぐに気付かれちゃうよ」

サクヤ「そうね、私も散開を勧めるわ。散り散りになったほうが、
相手だってやりにくいでしょうし」

ケイスケ「だけど、それって誰か一人が狙われるってことにもなる
じゃないか。そっちのほうが危ないぜ」

奴、ヴァジュラの攻撃を受けて分かった。あいつは相当やばい。

一対一でどうにかできる相手ではなさそうだった。

すると、ソーマが突然神機を構えて、言い放った。

ソーマ「——俺が囷になる。俺を狙っている隙に、攻撃しろ」
ケイスケ「け、けど。大丈夫なのかよ?!」

大丈夫だと言わんばかりに鼻で笑うと、彼はヴァジュラの前に姿を現す。そして雷球をひらりとかわしつつ、奴が俺たちに背を向けるような位置へ誘導した。

その間に俺たちは、物陰でどのようにしたら奴が倒せるか思案していた。

ケイスケ「くっ、マントは攻撃が全く効かないんだ。どこだ、どこだ弱点は!?!」

サクヤ「落ち着いて。あなたが、あなたが冷静にならないとどうにもならないわ。今の私たちの隊長は、ケイスケ、あなたなのだから」

……そうだ、今の俺は、コウタとサクヤさん、そしてソーマの3人の命を預けられている。

……レキが守ることを固執していたわけが、やっとわかったような気がする。

ケイスケ「——胴体——尻尾——前足——頭——まず動きを封じる。……前足だッ」

それを聞くより早く、コウタは飛び出していった。そして三発弾を撃つ。一発、二発と微妙に弾道がそれ、地面や壁に当たってしまった。だが、三発目は前足に命中。適当に撃ったのか、それともだいたいの弾道を予測して撃ったのか。それは結局わからなかった。

そして、一瞬の怯みを確認したソーマは、コウタが足を狙った意図を察して、神機で前足を薙ぎ払う。その一撃で前足は碎け、ぐたつとヴァジュラは倒れこんだ。

コウタ「いよしっ! 次は頭だっ!」

ヴァジュラを捕喰して、チャージクラッシュを決めた。だが、まだ碎けない。

ヴァジュラはようやく起き上がり、一度吠える。

ケイスケ「くっ、無理か。ならば尻尾を」

ソーマ「おいっ、深追いするなっ！」

彼の言葉で冷静になるも束の間、ヴァジュラは身の回りに電撃を發した。俺はシールドで防いだつもりだったが、スタミナ不足で吹っ飛ばされる。

サクヤ「回復弾よ！ 無茶しないで！！」

ケイスケ「す、すみません。……そうか、活性化したのか」

強力な攻撃が、さらに強くなるということか……考えてみただけでも恐ろしい。

コウタ「なあ、ケイスケ？ データベースで調べただろ、……活性化中は」

ケイスケ「……そうだ。ありがとうな、コウタ」

俺はピンを引き抜き、スタングレネードを叩きつけた。そして光に目がくらんだヴァジュラは、混乱して倒れ込んだ。

コウタ「ビンゴっ、そんなにカッカしてるからこんな目に遭うんだ！」

活性化中は、スタングレネードによる混乱がひどくなるとデータベースには書かれていた。それを思い出させてくれたコウタに、もう一度感謝する。

ケイスケ「よしっ、今のうちに攻撃を、」

だが、それを邪魔するかのように、四方をコクーンメイデンが囲む。ジャベリンを何とか回避したが、やはり鬱陶しい。

サクヤ「私とコウタが片づけるわ。今のうちに攻撃を！」

ソーマ「おい、俺が頭をやる。だからお前は尻尾のほうを頼む」

仲間の協力が、こんなにも素晴らしく感じたのはこれまでになか

った。

だから、チャージクラッシュを思いっきり振り下ろしてやる。いつもよりもすがすがしい気持ちで。そうしたら、尻尾がちぎれた。普段は恐れている悲鳴が、今だけは気持ちいい。続いて無慈悲にもソーマが頭にチャージクラッシュを叩きこむ。

……頭が碎けて、今度のそれは、地獄の底から響くような断末魔だった。

初めての任務の時よりもそれは心地よくて、心の底から小躍りして喜んだ。

……それにしても小躍りって、どんな踊りなんだろうな。俺は延命効果のある健康術っぽい踊りを想像しているが。

コウタ「や……やったあーっ!!」

ソーマ「はあ……相当手こずったみたいが、全員生き残れたみたいだな」

ケイスケ「あれ、ソーマ。なんだかんだ言って、やっぱりいい奴なんだな」

するとそっぽを向いて、黙れと一言。やっぱりどこかいけ好かないな。でも、そういう所が彼のいいところかもしれない。もっと素直になればいいのに。

とりあえずコアとか素材を回収しようか。

ケイスケ「……これは、レアものかな？」

サクヤ「あら、それは『発電体』ね。少し前に全く手に入らないーってリンドウが愚痴ってたわ」

帰投までの時間、俺たちは談笑しているつもりだった。

——「ウィル・シャムロック」

ウィル「どんなミッションでしたっけ」

アリサ「説明を聞いてなかったんですか？」

聞いたには聞いたけど、生憎忘れてしまった。寝起きだったから、仕方ないよね。

リンドウ「それに俺は、アリサは誘ったがウィル、お前を誘ったつもりはないからな」

ウィル「だって、雨宮上官はどこか心配ですから。それ以上にアミエーラさんも心配です」

ため息をつく雨宮上官。アミエーラさんもさつきからこつちを睨んでいる。

もしかして、心配する必要はなかったのかな？ そう思いつつもボクは、口笛を吹く。曲名は……なんだったかな。

しばらく佇んでいると、遠くから何かの咆哮が聞こえた。……近くに確実にアラガミがいる。雨宮上官が神機を構えたから、ボクもそれに倣って構える。

—— だけど、アミエーラさんはひどくおびえた様子でいた。そして震えた手から神機がするりと抜け、重い大きな金属音を立てる。リンドウ「どうした？」

アリサ「あ——、いえ。……手が滑っただけです。……気を付けます」

……ボクは不謹慎かと思い、口笛を吹くのをやめる。

リンドウ「もうすぐアラガミが出てくるから、気をつける。帰って冷えたビールを飲みたいからな、命なくしては帰れんぞ？」

アリサ「アラガミ討伐とビール、どっちが大事なんですか？」

リンドウ「そりゃあビールに決まっている」

アリサ「……ドン引きです」

……アラガミの討伐、か。正直なことを言うならば、奴らが何もしていないというのなら、何も問題はいらなと思う、というよりも関わる必要がない。だって、何もしていないのだから。何かしてからでは遅いと言っけれど、それはボクたちが気を付けていないだけ。

……だけどアラガミたちが、ボクたちを傷つけたなら。ボクはボクの意味に従って殺す。それがボクのスタンス。……だけど恨んでるのかな、みんな、誰彼なしに皆殺しにしたがるみたいだ。人間ってみんなそんなものなんだろうな。……もちろん、人のことは言えないかもしれないけど。

その時、誰かの声が聞こえた。気のせいかと思ったが、今度は先ほどより大きく。

ウィル「何か声が聞こえたような気がしませんか。誰かいるのでしようか？」

アリサ「そんなこと、あるわけないですよ。ここに人がいる筈は――、？」

でも、感じたようだ。だから雨宮上官もアミエーラさんも躊躇ってる。ならばこちらから先手を打たなければならない。

ボクは準備ができたから、神機を構えて角から躍り出る。もちろん彼らは警告したけれど、向こうが先に来たらどうにもならないだろうし。

それにしても、銃形態のままでよかった。騒音スキルのせいで変形するときうるさいし。今度刀身を変えようか。そう思いつつ、と

びかかる彼らに対して、咄嗟に引き金を引いた。

—— 1117 贖罪の街

—— 「橘サクヤ」

しばらくケイスケたちと会話をしていた。それにしても、ヘリはまだ来ないのかしら。もうそろそろ来ていい時間だと思っただけど、

サクヤ「——？ いま何か音がしなかった？」

ケイスケ「音？ えっと、どんな感じの」

サクヤ「何か重いものを落としたような。—— なんとさえいいのかしら、そうね、神機を落としたような」

落としたことがないのか、首を傾げるケイスケやコウタ。

ソーマ「…… 気配がするな」

コウタ「今さっき倒したばかりだからじゃないのかな？ —— あ、でも誰か近くにいるような感じがするよ」

…… 教会の廃墟の、影。角の先。少し曲がれば、そこに誰かがいる。

サクヤ「用心して。アラガミの可能性もあるわよ」

それを聞いたケイスケたちは、改めて神機を構えなおした。私は照準を角の左に持ってくる。何が出てきても、大丈夫だろう。

そして、突然影が動いた。

サクヤ「出たわっ！」

3人が一斉に動いて、私が引き金を引こうとする。—— ところ

が、爆発とともに3人が吹き飛んで行つた。

ウィル「あれ、どうしてあなた方がここに？」

アリサ「しゃ、シャムロックさん！ いきなり飛び出さないでくださいー！」

リンドウ「お、おいウィル。隊長の指示にちゃんと従ってくれないと、」

サクヤ「り、……リンドウ？」

物陰から出てきたのは、先日入隊したウィラード。そして一緒にいたのはアリサと、リンドウだった。

リンドウ「お、お前ら、一体どうして」

サクヤ「それはこつちが聞きたいわよ。どうして同一区画に2つのチームが？」

ソーマ「……詳しく訊く必要がありそうだな」

ソーマがそう言いながら立ち上がり、続いて転がっていた2人が立ち上がる。

もちろん、3人はウィラードに突っかかる。

コウタ「いきなり撃つなよ、しかも放射つてありかよっ！！」

ウィル「そちらが3人で襲ってきたので、反射的に。すみません」

お互い様——いや、3対1だから人数的にもウィラードの方が理あり、といったところね。それよりも、なぜリンドウたちがここにいるのか気になる。

リンドウ「ちよいと、……な。とにかく俺たちは教会の中を探索する。お前らは外で警戒してくれ」

その軽い言葉とは裏腹に、ただならぬ重要さを湛えた表情から察して、私は縦に首を振った。

——「ウィル・シャムロック」

ウィル「中はこうなっていたんですね。この前の任務では入らなかったの」

アリサ「静かに。どこにアラガミがいるか分かりませんから」

雨宮上官は黙っている。……残念ながら、ボクは比較のおしゃべり、だからなあ。

ウィル「アラガミは何度も戦ったから慣れてますよ。でも、ヘリが落ちた時に神機の高かったパーツがほとんどおじゃんになってしまいましたけど」

リンドウ「そのくせ服はバリエーションあるんだな」

それほど多くはないと思うけどな。他の人を見ないとそういうことは分からない。

さて、今回のアラガミはなんだろう。コンゴウ？ シュウ？

……ボルグ・カムランが出る可能性も否定できない。はたまた、ヴァジユラやクワドリガの可能性もある。

リンドウ「よし、お出ました」

雨宮上官がそう言った。だからボクは窓の方を向く。そこにはステンドグラスがあったのだろう。でもそこには虚空、逆光。そして光を背にアラガミが降り立ち、咆哮を發す。それは亡き神への鎮魂歌のように、教会中に響き渡った。レクイエムというにはとても粗暴すぎるそれは、ラプソディとも言えた。教会にはふさわしくない。

ウィル「ヴァジユラ——ではありませんね。これは墮天種でしょ

うか？ …… だけど、 …… 何か違う」

リンドウ「そのようだな。よし、アリサとウィルは援護を頼む。 ……
… アリサ？」

立ちすくむ彼女の顔に浮かんでいるのは、極端な恐怖。戦慄、と言うべきかもしれない。

ウィル「どうかしましたか？ アミエーラさん」

アリサ「—— や… いや… …」

わなわなと震えだし、彼女はとうとう頭を抱えて座り込んでしまった。そんなことも構わず、ヴァジュラに似たアラガミは、襲い掛かってくる。ボクは彼女のことを気がかりで、雨宮上官にまで気が回らなかった。どう見ても危険な状態だ。彼女を教会の外へ連れ出すべきだろうか。

リンドウ「アリサあ、どうしたあっ！？ うい、ウィルっ、アリサを教会の外へ—— ぐうツ？！」

雨宮上官が壁に叩き付けられた。この雨宮上官が、である。 …… 不利であることは目に見えている。

ウィル「しっかりしてください、アミエーラさんっ！！」

アリサ「やだ、やだっ、パパあ、ママあ、やめてっ… …、食べちゃやだよ… … お願いだからっ、食べないでえっ… …！！！」

完全に錯乱している。はやく彼女を連れださないと。雨宮上官に外へ連れて行きます、と目配せをする。だけど、突然地面からせり出した氷壁がボクの行く手を阻んだ。

こんな攻撃は、見たことがない。まさかあのアラガミの攻撃だろうか？

ウィル「な、なんだこれ！？ くツ、壊れる！」

リンドウ「できるだけ早くしてくれ、俺一人じゃ間に合いそうもない」

ウィル「そちらも、できるだけ持ちこたえてくださいよ！」

3発バレットを撃ちこんで、時間差で爆破。氷壁は粉々に砕け散った。今がチャンスだ。ボクは小脇に彼女を抱えようとして、

アリサ「——ジン、……バ、……リイ……」

ウィル「えっ？ ……今、なんて言いました？」

気にする必要はない。だけど、彼女のそれが、とても重要に思えた。だから一言一言を聞き逃さないように、しっかりと耳を傾けた。

アリサ「……アジン……」

彼女は立ち上がる。よかった、錯乱状態から立ち直ったのか。そして彼女は虚ろな瞳で神機を構え、照準を定めた。

……だけど、その銃口は、雨宮上官に向いていた。

ウィル「ま、まさか、まだ混乱しているんですか！？ や、やめてください、正気に戻ってくださいっ！」

アリサ「……ドウバ……」

瞳に光は戻らない。その照準は上官に合ったままだった。

彼女に手を上げることなど、ボクにはできない。

上官に避けるよう言うにはアラガミをどうにかしなければならない。

どうしようか、どうにもできない。

どうしようもないから、どうもしない。

どうかしなければ、どうにもならない。

彼女の混乱を抑える方法、抑える方法、抑える方法は？

混乱、混乱混乱混乱混乱。……混乱？

ウィル「——空。……空を見ろっ！」

アリサ「トウリイっ——!？」

その瞬間、彼女の瞳に光が戻った。そして、空を見上げれば、そこには天井があつた。それはごく当り前のことだ、ここは屋内。まだ天井は崩れてはいなかつた。

[illegible]

リンドウ「あ、アリサあああああつ！！？」

彼女が叫ぶ。

リンドウさんが咆える。

そして、彼女の神機から、一発の弾丸が発射された。照準は、天井を向いていた。――その弾は天井に着弾し、しっかりと喰い込んだ。老朽化のため、大分もろくなっていた天井は、ぱらぱらと崩れだす。

——アミエーラさんは、マリオネットの糸が切れたように、ぱ

たとと座り込む。

ウィル「雨宮上官——」

ボクは彼の名を呼ぶ。このままでは、ボクたちはこの教会の中に閉じ込められてしまう。ボクは彼女を抱えた。あとは、雨宮上官だけ。

すると、答えるわけでもなく、彼は必死な顔でこっちへ腕を伸ばした。何をするのかと思ったら、——彼は、ボクたちを突き飛ばした。そして、瓦礫が頭上から雨のように降り注ぎ、……その向こう側に一瞬彼の顔が見えた。その顔は晴れやかな笑顔で。

……壁に頭を打ち付け、ボクはそのまま意識を失ってしまった。

だけど、それが最後になるなんて、思うはずが、なかった。

1136 贖罪の街

——「睦月ケイスケ」

コウタ「あ、アリサの声がっ！」

サクヤ「ケイスケ、中に行つてあげてっ！」

俺は、教会の中へ足を踏み入れて、……ウィルが壁に叩き付けられて、タカビー——アリサが座り込んでいるのを見つけた。そして、……瓦礫が崩れた。

ケイスケ「あ、ああっ……こりゃ、一体どうしたことだよ——なんだよこれ、……なんだよこれっ!？」

サクヤ「どうしたの、ケイス——ああっ……!」

サクヤさんたちも、見た。彼らがそこにいることを。瓦礫で道が

ふさがれたことを。

——『彼』がいないことを。

続いて獣の声が聞こえた。それは外から。1匹じゃない、2匹、3匹、4匹。

コウタ「や、やばい、囲まれるよ、このままだと！」

ソーマ「くそっ、なんだこのアラガミはっ!？」

外の様子をうかがった彼らは慄く。そこにいるアラガミはきっと恐ろしいに違いない。

そして、アリサが話した。いや、言った。

サクヤ「ちがう、……ちがうよ……。わたしじゃない、わたしじゃないの……！わたしは、……やってないよう……」

その眼に俺たちは映らない。これがアリサとはとても言えない。それは恐らく抜け殻。彼女の精神は、どこにもない。

サクヤ「リンドウ、リンドウっ！」

リンドウ「サクヤ、そこにいるかっ？」

まず彼女はほっとしたに違いない。彼が生きていたということに。そして彼女は神機を手に、瓦礫へ向かって1発、2発。だけど瓦礫は少し爆ぜるだけで、びくともしなかった。だから、俺も爆発系のバレットを使って1発。2発3発。それでも全く手ごたえがなかった。

リンドウ「サクヤ、聞いてくれ。俺はこいつらの相手をする。その間にアリサやウィルたちを連れてアナグラへ戻れ」

ケイスケ「お、おい。リンドウさんは？ リンドウさんはちゃんと戻ってくるのか？」

彼は一瞬黙って、悲しそうな声で言った。

リンドウ「配給のビール、ちゃんととっておいてくれよ」
サクヤ「ダメよ、私も残って戦うわ！」

そして彼女は絶望する。彼が帰るつもりのないことに。

リンドウ「聞こえないのか？ もう一度指示を出す。サクヤはアリスを。ケイスケはウィルを連れて行ってくれ。コウタは誘導、ソーマは退路を開け。」

……そして、これだけは守れ。……全員必ず、生きて帰れッ！
これは命令だ、サクヤアツ！」

サクヤ「いやああああアツ！ いやよ、リンドウ！？ 私を、私を置いていかないで！」

瓦礫にすぎり、掻き進む。彼女のきれいな爪が割れて、そこから血があふれて瓦礫に赤い線が走る。

コウタ「サクヤさん、早く行こうっ！ このままじゃ共倒れだよ！」
サクヤ「いやよ、……私を、一人にしないでよ、……リンドウ、……リンドウっ！！」

このままだと、本当に、みんな死んでしまう。何一つ、命令を守れない。……誰も、守れない。

だから覚悟を決めた。

ケイスケ「行くぜ、コウタ。しっかりサクヤさん引っ張って行け。絶対に離すなよ？ 俺はこいつら二人を背負っていくから。……火事場の馬鹿力を舐めるな！」

……全員生き延びる。その全員ってのは、リンドウさん。あんたも含まれているんだ。

だから、……生きるよ?!」

俺の声が届いた。だから彼は希望を持って答えた。

リンドウ「……了解ッ!」

俺たちは教会を飛び出す。ソーマがしばらく耐えていてくれて、どうにか時間稼ぎができたようだ。

ケイスケ「この際だからパーツと使わせてもらうか。雨宮リンドウ氏の生還を祈ってスタングレネード全部! よし、しっかり目をつぶってろよーッ?! 1、2の、3っ!」

ソーマやコウタも察して、ピンを抜いてありったけのスタングレネードを叩き付けた。目をつぶっても眩しい閃光。アラガミは昏倒し、退路はできた。そして奇跡的なタイミングでヘリは急降下してくる。

ケイスケ「ジャストミートだ、ヘリ! よし、早く乗るぜ!」

ドアがぱかっと開いて、そこへアリサとウィルを放り込む。そしてコウタがサクヤさんを無理やり乗せ、コウタが乗った。そして、アラガミが起きようとしている様子が見えた。

ケイスケ「うおっ、もう正気を取り戻しやがった! 急がないと」

少しずつヘリが上昇していく。ソーマがヘリに飛び乗って、俺はヘリの戸をつかんだ。その時、……左腕の力がすつと抜ける。

ケイスケ「あっ——」

左腕を、やられていた。どうしてさっきまで気付かなかったんだろう? どうして、今になって気付いてしまったのだろう。

下にはアラガミ。落ちれば確実に、俺は奴らの餌食になるだろう。

必死に俺は、戸を掴んでいたけれど……ふっと、手が離れて。

その手を、誰かが掴んでくれた。

ソーマ「しっかりしろっ！ これだから仲間ってのは嫌いなんだよっ……！」

そう言いながらも、ソーマは俺の手を握り、引っ張り上げてくれた。

ケイスケ「……ごめん。……ありがとな」

俺の言葉に反応せず、彼はそっぽを向いた。

……教会の屋根が見えて、そこから中が少しだけ見えた。だけど、やっぱり何も見えなかった。

……だから、俺たちが最後に見た、リンドウさんの顔は。

……笑顔のまま変わらなかった。

—— 1140 教会内部

—— 「雨宮リンドウ」

リンドウ「——行っただか……」

……懐から煙草を取り出したが、……箱の中には、一本しか残されていなかった。これを吸ってしまえば、恐らくもう、吸うことはできない。一瞬躊躇って、……だけど俺は火をつけて、啜える。吸

わずに後悔するよりは、マシだ。

……悲しみを抑え、心を落ち着かせ。……俺は煙を吐き出した。

リンドウ「——サクヤ……俺は、……………」

……口にするのもバカバカしくて、恥ずかしくて、こそばゆい言葉を呑み込む。もう一度煙草を咥え、吸う。

そんな言葉を伝える筈の通信機も、天井の崩落で壊れてしまった。俺は、自分の不運さを今だけ、恨む。

……転がる、3体のヴァジュラのようなアラガミの屍。すでに体力は、尽きかけている。アイテムを使い果たした俺に、もはや回復する術はなかった。

その時、新しいアラガミの気配を感じた。

リンドウ「……お次は誰だ？ できれば、もう少し休ませてほしいんだがな……」

黒いヴァジュラ。……きつと、奴らの親玉に違いなかった。

『……全員生き延びる。その全員つてのは、リンドウさん。あんたも含まれているんだ。』

だから、……生きろよ?!』

リンドウ「ああ、……分かってるさ。……俺は、生きるぜ」

煙を吐いて、もう、走馬灯を見る時間が終わったことを惜しむ。

先ほど呑み込んだ言葉を、伝えなかった。——でも、もう遅い。

俺は、神機を握りしめ、立ち上がる。

——煙草を捨てて、荒神の咆哮を浴びて。

そして、——煙草の火が消え、幕は降ろされた——。

6・COME TO THE END（後書き）

体験版パートはこれにて終了です。ああ、長かった。いや、短い方かもしれないけれど。自分にとってはここまでがとても長く感じた気がする。

……と、いうことは、次回からは体験版プレイヤーにとってネタバレの嵐というわけですね。おお、気を付けた方がよさそうだ。

今回は、オリキャラの紹介も入れさせていただこう。さすがに説明がないと分かりにくいですね。結構細かく書くつもり。
それでは次回まで。

7・CRADLE SONG（前書き）

ここから先は、製品版未プレイ者の方々には未知の領域。

そして、ここから先の展開は、原作そのものを根底から覆しかねない。

貴方のアナグラは、ここではないかもしれない。これは、そんな世界。

貴方のアナグラを変えたくないならば、遠慮していい。

キャラ紹介

Case 1 睦月 ケイスケ：keisuke

Age：15 Bastard/Assault/Shield

ボイスイメージ：男3

フェンリル極東支部に配属された、新型神機使い。まだ少し幼さが残っている少年である。

彼の家族は普通の父親と、普通の母親。住んでいる地域もさほど困るようなところではない。

神機はバスター（強そうだから）、アサルト（連射できるから）、シールド（普通っぽいから）。

普通な親から、こんな子供が生まれてきても、誰も気にはしない。彼を強くしたのは、周りの人たちの影響だろう。

どうやらテストという言葉に弱いようだ。あと注射も嫌い。ちなみに結構器用である。

食べ物には特に好き嫌いはない。母親の作ってくれる料理は何でも好き。

趣味は絵を描くこと。天井の染みを数えることも、一応趣味に入る。

ちなみに逆立ちが得意だそうだ。やろうものなら1時間はできる
とか。……たぶん嘘である。

リアのことを気にしてはいるが、それ以上の感情は特にない。
自室は基本的に物を置かない性格から、少し寂しげで味気ない感
じがする。

7・CRADLE SONG

1 2 3 2 エントランス

——「榊レキ」

レキ「リンドウ上官を？ お前ら、馬鹿かっ!？」

ケイスケ「仕方なかったんだ。そうするしか、なかったんだ」

信じられない。リンドウさんを置き去りにしてしまうなんて。

……原因はアミエーラとシャムロックの二人。話によると、アミエーラが突如錯乱し、天井に発砲。シャムロックはリンドウ上官にここから出るよう言った。が、時間が足らず、アミエーラ共々咄嗟に突き飛ばしたそうだ。

レキ「それで、二人は？」

ケイスケ「ウイルの方は部屋に寝かせてる。頭をぶつけて脳震盪を起こしているだけだったさ。アリサの方は……今は落ち着いてるけど、病室にいる」

……へりに連れ込んだとき、相当暴れたそうだ。ケイスケの顔や体のあちこちに、ひっかき傷が見える。

……と、ツバキさんがエレベーターから出てきた。それを追うように、第二部隊一同も出る。

タツミ「行かせてください、ツバキさん！」

ツバキ「もう捜索班が出ている。必要ない」

彼らも、リンドウさんを慕っていたのだろう。だからこそ、捜索

班ではなく、自ら探しに行きたいと言った。だがやはり、その願いは叶えてもらえそうにない。

カノン「私、あんなにリンドウさんに助けてもらったのに、——
何一つ恩返し、出来てないんです……、お願いします、私たちを、」

ツバキ「だから必要ないと言っている……！」

その場にいた全員が、その言葉に一瞬戦慄を覚えたに違いない。
無論、ケイスケも。——俺も。

そんな静寂を破り、ヒバリさんがツバキさんに言った。

ヒバリ「ツバキさん、支部長が呼びです」

ツバキ「……分かった、すぐ行く。とにかく、行かせることはできない。———すまない」

彼女が最後に謝らなければ、俺は彼女を軽蔑しただろう。実の弟だというのに、彼女は何とも思っていないのだと思った。———そうではないのだ。そう『思わせなければ』ならないのだ。それが、上官だから、……一番冷静でいなければ、ならないから。

レキ「……ところでケイスケ。なんであいつのこと、『アリサ』って呼んでいるんだ？ 少し前までタカビータカビーってバカにしてたくせに」

ケイスケ「そりゃ、いつまでもタカビーじゃまずいだよ。別のあだ名はいつか考える」

別のあだ名ってなんだよ。ケイスケも素直じゃないな。きっと、アミエーラに対して何か特別な感情でも生まれたのだろう。

特別って、なんだろうな。

レキ「——俺の、リツカさんに対する思いも、か」

ケイスケ「ん？ リツカさんがどうしたんだ？」

俺は即刻否定する。今はさすがに不謹慎だ。それに知られたら恥ずかしいったらありやしない。

1 2 3 5 役員区画

——「橋越ルカ」

ルカ「……何がどうだったのよ」

何があつたか聞いて回つたが、だいたい誰に聞いてもはつきりしない情報。だから支部長にじきに訊きに行くことにした。……でも、向こうも忙しいらしく、まともに取り合つてはくれなかった。

ルカ「納得いかない。やつぱり当事者に聞くしか、」

おっと、誰か来たみたい。……あれは、雨宮上官だ。きっと支部長に呼ばれているのだろう。やはりドタバタしているようだ。

ルカ「……わたしも、早くここから離れた方がよさそうね」

彼女とすれ違つて、エレベーターを待つ。

突然の轟音。……壁を叩く音。後ろを見ると、ツバキさんが壁を殴っていた。1回2回じゃない、それを何度も何度も。叩くたびに手の皮がむけたのだろうか、壁に赤い染みを残していく。

ルカ「あ、雨宮上官、やめてください！ 手から、手から血がッ、」
ツバキ「うるさいッ！ ちくしょう、……ちくしょうッ！！」

説得しても、彼女はやめなかった。だから、やむなく腕をつかんで止めようとした。

ツバキ「——っ！！」

彼女はそれに反応するように私の手を振りほどき、手を上げた。

わたしは咄嗟に頭を抱え込むように防いだけど、そのまま引き倒されてしまった。それほど激情に駆られた彼女の力は、強かったのだ。わたしが軽い悲鳴を上げた時、ツバキさんは我に返り、壁についた血染みと手ににじむ血と、倒れているわたしを見て、自分が何をしていたのか気付いた。

ツバキ「——橋越……すまない」

……その時、エレベーターが到着した。だからわたしは逃げるようにエレベーターに乗り込んだ。それに対して彼女は、まっすぐ支部長室へと向かう。

……一番堪えているのは、彼女に違いないのだ。肉親を失った苦しみはよく分らないけど——少なくとも母さんは元氣だから——辛いつてのはよく分かる。

ルカ「どうして、こんなことになっちゃったんだろう」

自分で呟いていて、バカバカしいって思う。……そんなこと、わたしにだって分かるはずがないのに。

『雨宮リンドウ失踪から1日経過』

1012 ラボラトリ

——「睦月ケイスケ」

……静かな廊下。俺は病室まで歩いて、『面会謝絶』の張り紙を無視し、戸を開ける。不謹慎だとは思わなかった。怒られてもいい。俺は、彼女が無事であるか、確かめたかった。

そして、彼女の居る病室は、人がいることを感じさせないほどに静かだった。だから、中で何が起きてても誰も気付けない。

（あれ、……サクヤさんだ）

彼女は衛生兵だ。だから彼女がアリサの面倒を見ているのだろう
と思った。……でも、その手の中にはまず彼女の治療には必要な
もの——果物ナイフがあった。

サクヤ「……アリサ。……ごめんなさい。あなたがいなければ、
……リンドウは、——許せない、許せない……！」
ケイスケ「さ、サクヤさん……！」

俺はサクヤさんの手からナイフをもぎ取ろうとする。抵抗する彼
女。左腕がまだ痛むけど、なんとかナイフを奪うことができ、それ
を床に放り捨てた。

ケイスケ「こ、こんなことを、サクヤさんがするだなんて。……信
じられねえよ、なあ、何かの間違いなんだろう？　なあ、そうなんだ
ろっ？！」

サクヤさんは、まず後先考えずにこんなことはしないはずだ。そ
んな彼女が、ここまで追い詰められるなんて……。それほどまでに、
彼女はリンドウさんに『依存』していたのだろう。

……サクヤさんは、しゃがみこんで涙を流す。

サクヤ「ごめんなさい、私、どうしてこんなことを……！　でも、
許せないのよ、この子が！　アリサが、リンドウを、リンドウを……
……！」

俺は、否定しない。アリサが、リンドウさんを殺したわけじゃな
い。だけど……他に、かける言葉が見つからない。だから、俺はた
だ黙るしかなくて。

ウィル？「なんだよ、これ」

声のする方を振り返って、……彼がウィルであることに気付いた。
ケイスケ「ウィル、いつの間に起きて、」

ウィル? 「黙ッてる。……なあ、今何しようとしたんだ? え?」
サクヤさんは、答えない。ただ、むせび泣いているだけで、何も
言わない。

ウィル? 「何とか言えよッ! お前は今ッ、何をッ、しようとして
いたんだッ!?」

彼は、ただ怒鳴る。彼がここまで怒ったのを俺は見たことはな
かった。

ケイスケ「と、とりあえずよ、落ち着けよ、な? な?」

俺の口から、起こったことを正確に伝えた。嘘を言ってもよかつ
たけれど、俺は嘘をうまくつけないから、嘘がばれてさらに彼の気
を悪くするよりはマシだと思う。

ウィル? 「……オレも、少し気が動転してた。——ああッ、オレ
の莫迦野郎が。サクヤさんの気も考えないでよオッ……」

サクヤ「……私が悪かったわ。とても、許されることじゃなかった。
……ケイスケが止めていなければ、私、きっと——」

ケイスケ「自分を責めないでくれよ。これ以上自分を責めたって、
どうにもならないって」

結果としてアリサは助かったけれど、サクヤさんは後悔している。
俺の、彼女に対する印象も変わっていく。……ここにいるのは、『
やさしい先輩』のサクヤさんだろうか……。

そんな時、場の空気を察したのか、ウィルは語りだした。

ウィル? 「……アリサはな、混乱したら空を見るように隊長から吹
き込まれたんだ。で、オレの指示で空を見たわけだ。でも、空はな
いから天井に穴をあけた。

この場合、誰が悪いんだろうな。……まア、言ッちゃんんだが、
その、……全員お互い様だよな。アリサもオレも、隊長も。——

隊長に責任転嫁しちゃいけないよな、ははは……」
ケイスケ「うい、ウィル……」

場の空気を澁ませただけだった。俺は少し不安になる。その言葉は、慰めにすらならない、自傷気味の言葉。——でも、彼の目を見ればわかる。至って真面目だ。

ウィル？「だけだよ、アリサはちょっと疲れてただけなんだ。問題ないなら、こんなことはしなかったんだよ。それをオレが、させちまった。——だから、元はといえばオレに責任があるんだ……。アリサを責めないでくれよ。オレが、全部悪いんだよ」

あんなに仲が悪そうに見えたのに、ウィルは彼女をかばった。彼はきつと、彼女のことを大切に思っているに違いない。仲間として同期として。

サクヤ「そう——そうよ、彼女は悪くないわ。ウィル、あなたも悪くないのよ……。誰も、悪くない……。誰の責任でも……。ない……。それにそうよ、リンドウだってすぐに帰ってくるわよね。配給のビール、取っておくから、だから、だから——早く帰って来てよっ！……。リンドウ……。リンドウ……。う、……。うああああ、ああああああ……。——」

……悲痛な鳴き声が、病室を包む。

そして俺は知った。

彼がどれだけの人に思われ、慕われていたかを。

……そして、このアナグラから、笑顔が消え去ったことを。

——「ウィル・シャムロック？」

ウィル？「……今は、落ち着いてるんだな。……よかった」

彼女の顔は、安らかだった。でも、その頬にはしっかりと涙の跡が刻まれていた。無事でよかったと思うと、つい微笑んでしまう。

ウィル？「とりあえず、オレタチはアリサを見に来た。そして『彼女のために果物を剥いている』サクヤさんを見た。……それだけだ、オレタチはそれ以外に何をしているか、見ていないぜ」

サクヤ「……ごめんなさい……私、訳が分からなくて、つい……」

ウィル？「未遂だから許す。本当にやってたら半殺しじゃすまなかったかもな」

ケイスケ「半殺しって……。ま、まあウィルならたぶん本当に殺しかねないかもな」

オレは、ケイスケの言葉を聞いて少し笑ってしまう。

ウィル？「殺しやねエよ。……オレ、結構世話になったしよ」

サクヤ「世話……？」

……覚えてない、か。これだから、オトナは嫌いなんだ。

ウィル？「思い出せないなら、思い出せないままでいいさ。ケイスケ、お前になら話してやるからよ、いつでも来いよ」

ケイスケが一瞬ポカンとする。そりゃ驚くよな、突然振ったんだからよ。

そんなとき、グラサン風眼鏡の胡散くせえジジイが突然緩やかに流れている時間を早回しする。

眼鏡ジジイ「き、君たち、外の面会謝絶の文字が読めなかったのか！？ 早くここから出なさい！」

あーあ、こういうオトナが一番嫌いだ。堅物。……勝手に入った

オレタチが悪いのは確かだが。

ウィル？「誰だよ？ こいつのお父さんとか言ったらぶっ飛ばすぞ？」

眼鏡ジジイ「違う。私はオオグルマ ダイゴ、彼女のカウンセラーを担当している。私は医者だ、ほら、白衣を着ているだろう。これでも信用できないというのか？」

オレは無論タテに首を振ってやる。が、事情を察したサクヤとケイスケに襟元をつかまれる。

ウィル「うぎゃー、放せー！」

サクヤ「子供じゃないんだから、ほら、早く！」

うっせえ、まだまだオレは子供だ！！ で、結局オレは病室から引きずり出される羽目に。

1302 自室

——「ウィル・シャムロック？」

別に血が出ているわけじゃないが——たんこぶはある——頭がまだクラクラするから横になる。それから退屈になつて、コンポにディスクを入れて再生した。

……この曲を聞いたのは何度目だったか。そんなことを考えていると、ノックもなしにケイスケが部屋に入ってくる。

ウィル？「……入るならノックぐらいしろよ。それで、いきなり押しかけてきて、何の用だ？」

ケイスケ「いや、さ。さっき言ってただろ。話してやるから来いって」

ウィル? 「ならせめてノックぐらいはしろ。ノックをして入ることくらいならできるだろ」

いつでもいいと言ったが、こんなにすぐに来るとは思わなかった。曲は一番の盛り上がりどころだが、仕方なく停止ボタンを押した。

ケイスケ「話してくれるのか?」

ウィル? 「……ああ、耳の穴かッぽじッて聞きやがれ」

ウィル? 「こんなオレにも家族はいた。それぐらいは分かるよな?」
ケイスケ「家族が居なきゃ生まれてないだろ。で、何人家族だったんだ?」

ウィル? 「父親と母親と兄貴」

ケイスケ「四大家族か。平凡な家庭だな。俺は一人っ子だから兄弟がほしいなあッて何度思ったことか」

本当に、兄貴がいてくれてよかった。世界で一番尊敬しているほどに、オレは兄貴のことが好きだ。

ケイスケ「それで、今はどうしてるんだ?」

ウィル? 「父親と母親はオレが6歳の時になくなッた。……お前らはもう必要ないとさ」

そう、……オレタチは突然捨てられた。平凡な家庭から、一気に突き落とされて。信じていた人たちが、姿を消す。……そんな苦しみ、他人が理解できるはずもない。

ウィル? 「残された家でズツと生活しててよ。みんな、寄ッて集ッてオレタチをいじめたんだ。オトナたちもまるで汚いものを見るかのような目で、オレタチを見ていた。だから、オレはオトナが嫌いなんだ。

——でも、サクヤさんはオレに、オレタチに親切にしてくれた。

メシをくれたり、服をくれたり。隊長も、時々オレに声をかけてくれた。尤も、隊長は隊長で、オレのことなんて忘れたみたいだったけどな。

オレは何か恩返しができないか考えたさ。……でも、結局今になるまで何もできていないんだよな」

ケイスケ「なあ、……同情する必要、あるのか？」

ウィル？「必要ない。そんなものよりか甘い物をくれる方がよっぽどうれしいぜ」

ケイスケ「……ところで、兄貴の方はどうしたんだ？」

ウィル？「悪い、——この話は終わりだ。だッてよ、お前との約束は『サクヤさんについての話』だろ」

ケイスケ「おいおい、もつと聞きたいことはたくさんあるのによ」「ウィル？「約束は約束だ。オレに親切にしてくれたサクヤさんは、

約束だけは確かに守ったぜ」

だけど、一度だけ守ってくれなかった。……彼女は、ここのオペレーターになって、隊長は神機使いになって。サクヤさんも神機使いを目指していた。だから、彼女は去り際にオレたちにつてくれた。

『何かあつたら、呼んでね。絶対に助けに来るから』

……ウソツキ。

ケイスケ「それにしても、どんな曲いつも聞いているんだ？」

ウィル？「ん？……ああ、どれかディスク一枚だけ貸してやるよ、好きなもの持ッていけや」

ディスクを確認したが、なんとどのディスクにも名前は書いていない。これは選ぶのに困る。不親切なだけなのか、ディスクのケースカラーとかで覚えているのか。

ケイスケ「じゃあこれでいいや。とりあえず、ありがとな」

ウィル？「……あ、一応言ッとくけどよ。やたらとこの話、ふりまくなよ。オレが５番目ぐらいに嫌いなのは憐みの目線だからな」

釘を刺された。あ、でもうっかり口が滑るかもしれないな。

ケイスケ「ああ、絶対に話さない。それじゃ」

ウィル？「あ、あと」

今度こそ部屋を出るときに、再び俺は呼び止められる。

ケイスケ「今度はなんだよ」

ウィル？「——アリスには、オレが近くにいてやるから、できるだけ近づかないでやッてくれ。お前がいると、お前によくない噂が立つしよ。お前にも迷惑かけられねエし」

ケイスケ「迷惑だなんて、思ってないぜ。そもそも迷惑ならウィルの部屋へも行けないしな」

ウィル？「全くだ、——すまねエ。……あア、聞き終わッたら返せよ？」

俺は、ドアを閉めて部屋の外へ。

……彼の人生は、恐ろしいものだ。彼の笑顔、強い心の裏には、そんなものが蔓延っていたなんて、思いもしなかった。

数日が経って、捜索班が2度目の捜索から帰還した。前回は瓦礫の撤去のみとなったが、今回は調査することができたそうだ。そして、見つかったのは衣服の切れ端のみ。……リンドウさんのもので、間違いなかった。

「腕輪は？ ……神機は？！ 何も、何も見つからなかったの……？」

サクヤさんは、呆然としていた。それも無理はない、彼の生きている証拠……死んでいる証拠も、何もなかった。

よく喻えられる放射線箱の例を示すとするならば、中の猫がいつの間にか、いなくなっていたということだろう。結局、俺たちは次の捜索班に期待するしかなかった。

『雨宮リンドウ失踪から6日経過』

1424 病室

——「ウィル・シャムロック」

ウィル「面会謝絶、か」

ボクは構わずドアを開けようとするが、生憎鍵がかかっているようだ。そして中からは叫びが聞こえる。

ルカ「あれれ、どうしちゃったの、シャムロックさん」

ウィル「ルカさん、ですか。そちらこそ、どうしたんですか？」

この人は笑ってごまかす。こういうタイプは正直苦手だ。でも、すぐに彼女は笑うのをやめた。

ルカ「……中、大変みたいね。ここからでも十分聞こえる。……彼

女の声」

アリサ『誰よ、私はいやつ、いやよつ、誰か助けて、私を助けて！
パパ、ママ、私を、許して……？ 許してください、許してッ！
！ パパ、ママ？ わたしはここに、ここにいますよ？ どうしてわたしにへんじをしてくれないの？ はやくみつけて、もうひとりはいやあ、せまい、いやつ、みないで、みないでよつ、やだ、こっちにこないで、いや、パパ、ママつ、たすけてたすけてよたすけてくださいわたしはここよここですみつけてよさがさないでくださいわたしはここにいますここにいますよみつけてわたしをみつけてわたしのせいじゃないわたしはせいすわたしはやりましたわたしはやつてないちがうちがいますちがわれないちがうわけないちがうちがうわたしはわるくないわたしはなにもわるくないわるくないですわたしはわるいんですわたしがぜんぶわるいんですごめんなさいごめんなさいごめんなさい、私は、私はうああアああアアアアアアああああアアッ！！？』

衛生兵A『ダメよ、落ち着いて！ 暴れたら点滴がつー！』

ツバキ『くう、鎮静剤を、はやくつ！ クッションも新しいものに交換しろー！』

ルカ「あんなに変わっちゃうなんてね。人って怖いわね、ホントに。彼女は元々ああだったの？」

ウィル「そんなはず、あるわけが……」

でも、言い切れない。彼女は、心のどこかに爆弾を抱えていたのだろう。それが、何かのキッカケで爆発した。キッカケ？

ウィル「あの任務のとき、……ヴァジュラがいました。正確には墮天種のような」

ルカ「トリガーポイントはそれかしら？ あ、でも一概には言い切れないわね」

ヴァジュラに対する、一種の心的外傷。いわゆるトラウマ。

ウィル「最初アミエーラさんは兩宮上官を撃とうとしました。ですが、ボクが空を見るよう言ったら……」

ルカ「天井を撃ったのよね。……空が見たかっただけかしら？ リンドウさんを撃とうとして、引き金を引かけたまま上を見たっていう可能性もあるわね」

しばらく二人で話していると、例の胡散くさいオジサンがでてきた。

ウィル「えっと、あ、思い出しました。オクルマ タイコ先生」

オオグルマ「やれやれ、君は人の名前も覚えられないのか。私はオオグルマ ダイゴだ」

彼はルカと目が合うと、初めましてと彼女にあいさつを交わす。

再び彼女は愛想笑いを浮かべながら、彼に言葉を返した。

ルカ「よろしくお願いしますね、オクルマさん」

……彼女と視線が合うと、ウインク。なんだ、結構わかる人じゃないか、ルカってお茶目なんだな。

オオグルマ「今は、入るべきじゃない。まあ聞けば分かると思うがね。……それに彼女もこんな姿見られたくないだろう」

ウィル「まさかボクが入りに来たとも思ったのですか？ ボクはただ、ルカさんと話をしてるだけです。病室に用事があるのなら、ボクに構わずどうぞ」

ボクはこいつのことが気に入らない。こいつからは悪党の二オイがプンプンする。……言ってみたただが。やっぱりこいつは嫌だ。オオグルマ「そうさせてもらうよ、ウィラードくん？」

気軽に名前ではばないでほしいものだ。ああ、嫌い嫌い。

ルカ「……そうだ。これからミッションへ行くんだけど。シャムロ

ツクさんもどうかかな？」

ウィル「よく平気でいられますね、こんな時に」

皮肉で言っただつもりだが、彼女は悲しげに笑って言った。

ルカ「平気なら、手放して笑ってられるのにね。今は、……作り笑いしか、できないや」

『雨宮リンドウ失踪から20日経過』

—— 1958 エントランス

—— 「睦月ケイスケ」

サクヤ「納得いきません！　だって、まだ神機も、腕輪すら見つかっていないのに！」

サクヤさんは、ツバキさんに不服申し立てをしているようだ。何が納得いかないのだろうか。

ツバキ「上からの命令だ。……搜索は打ち切り。以後雨宮リンドウは、MIAとする」

ケイスケ「リンドウさんの搜索を、打ち切り……？」

今、なんて言った？　MIA……ってなんだろう。

サクヤ「そんな……」

ツバキ「私的な搜索も以後禁止とする。……サクヤ。しばらく休暇を取れ」

サクヤ「で、でも！　私は、」

……確かに、サクヤさんは、あの日からろくに寝ていない。疲れが顔に出ているほどだ、ツバキさんは、きっとそれを察したに違い

ない。

ツバキ「これは上司からの命令だ。……倒れてからでは、遅いからな」

そう言つて、ツバキさんはその場を立ち去ろうとした。

——ふらあ、と。サクヤさんはだんだん重心を後ろへ、後ろへ持つていつて。

ケイスケ「さ、サクヤさん！」

俺が駆け寄ると、彼女は気を失っていた。精神的ショック、じゃない。過労だ。

ツバキ「やはりか……。睦月、ぼさつと突っ立っていないで自室まで運ぶのを手伝え」

俺は彼女の足を支える。……そしてエレベーターの中へ。

……エレベーターの中で、ツバキさんの顔を見る。彼女の目の下には、隈がくつきりとあった。あの日からずっと激務に追われて、憔悴しきっているとしか思えない。

エレベーターが到着して、彼女の部屋へ。運よく鍵は開いていた。そしてベッドへ寝かせる。

ツバキ「……だから言っただろう、サクヤ。……倒れてからでは、遅いと」

そして、ツバキさんは珍しく俺に感謝した。そして彼女は部屋を後にする。だけれども、敢えて俺は彼女を呼び止めた。

ツバキ「どうした、睦月？」

ケイスケ「いや、その。MIAってなんですか？」

すると、ツバキさんはこめかみを抑えてため息をつく。

ツバキ「Missing in Action——要するに、作戦行動中行方不明のことだ。……搜索も終了。二階級特進……。死

亡扱いと、ほとんど変わりが無い」

それは、死亡宣告に等しいものだった。……ツバキさんは、強い人だな。——だけど。

ツバキ「それでは、私はもう行くぞ」

ケイスケ「ツバキさんっ」

もう一度俺は彼女を呼び止める。

ケイスケ「俺、知ってますよ。一番苦しいのは、ツバキさんだって分かってますから。みんな、そう思ってますから。——だから、安心してくださいな」

俺の言葉を聞いて、何を安心するんだ、と苦笑いを浮かべながら訊いてくる。俺も苦笑いをして、答えをはぐらかした。

ツバキさんは、部屋を出た。俺も部屋を出ようとしたとき……机の上の写真に目が入る。

ケイスケ「真ん中に居るのが、サクヤさんかな。まだ少し若い感じがするけど……」

写っているのは、ツバキさんとサクヤさんと、……リンドウさん。写真を見るからに、サクヤさんにとってリンドウさんは……。

ケイスケ「……………」

一瞬、アリサに対して殺意が湧いた。でも、その殺意もすぐに萎んでしまう。

『アリサを責めないでくれ。オレが、悪いんだ』

『誰も、悪くない……誰の、責任でもない……』

怒りの矛先は、行き場を失ってしまった。だから必然的に、アラガミへ向く。

その後俺は、コウタとルカを任務に誘った。……成り行きで、ソ

「マも一緒だった。……みんな、暗い顔をしていた。鏡を見たらきつと俺も。」

任務中もひどいことになっていた。戦闘スタイルもなにもかも、頭に入らない。だから作戦とかも全く考えつかないし、指示もまったく通らない。誰もかれも、本調子じゃなかった。

コウタは弾が全く当たらない。ル力は誤射を繰り返し、目標を逃がしてしまう。ソーマはまだ平気に見えたけど、チャージクラッシュが決まらず苦虫をかみつぶしたような顔をする。俺も、なんとかしようと思っても、敵の攻撃に対応できず、回復薬を浪費した。

—— ともに戦える奴など、まずいなかった。

任務が終わっても、誰も何も言わない。だから、こんな空気に耐えかねて俺は、逃げ出したいと思う。でも、外はまさに地上何メートルだろうか。ついには時間の圧力に俺は吐き気を催す。

—— 2030 自室

—— 「睦月ケiske」

その夜、久しぶりに雨が降る。でも、自室の俺にはそんなことはどうでもよかった。ここ数日、基地内の空気は凍えている。

（そういえば、コウタがバガリーの話を最近しなくなった。たしか今日が放送日だったような。……でも、彼はきつと見ていないだろうな）

ケiske「—— そうだ、ウィルに借りたアレでも聞いて落ち着くとうかが」

突然思いついたことだった。こうでもしないと、心の平穏を保ちきれない。俺はディスクをプレイヤーにかけ、再生ボタンを押す。

壮年の男性？『……あー、あー。ちゃんと録れてるよなあ？』
ウイル？『あア、ちゃんと録れてるぜ』

あれ？ なんだろう、会話から始まった……？ と思つたら、何かの古っぽい曲が流れる。

壮年の男性？『あの日、……引かれたあ、……手の、……ぬくもり、……今は、……どうも、……想いいいだせえな——』

速攻停止ボタンを押す。なんだこれは。まさかウイルって、こんな感じの曲が好きなのか？ いやいやいや、そうは思えないというか、これはさすがにないって。今度会つたら返してやる。

とりあえず最後まで聞いてみることにした。お世辞にもうまいとは言えなかったけれど、その夜は、いつもと違って少し辛くなかった。もしかして、彼はそれを狙つてこれを……。
ケイスケ「考えすぎだよな。俺が選んだから、きつと偶然だ。……偶然でも、いいか」

『雨宮リンドウ失踪から25日経過』

0912 病室

——「睦月ケイスケ」

病室に立ち寄ると、オオグルマ先生がいた。

ケイスケ「あ、今日は落ち着いているんですね」

オオグルマ「ああ。……できれば、当分はこのままの状態であつて

ほしいのだが……」

錯乱しだしたら、余程悲惨なことになるのだろう。だから軽く察した。

ウィル？「お見舞いが上がってやるぜーッ、と。お、ケイスケ。：

…と大根のジジイ」

オオグルマ「私はオオグルマ ダイゴだ」

わざとだな、あの眼はどう見ても。なぜかウィルはオオグルマ先生を目の仇にしているようだ。

オオグルマ「不愉快だ。私はしばらく席を外させてもらっ」

ウィル？「そんなにいやなら、パパーッと治してやれよ。つーかお前医者だろ？ さっさとアリサ治してくれよ。メンタルだか何だか知らないけどよ、医者ならどうにかできるんだろ？」

先生は何も答えずに、病室を後にする。俺はウィルをたしなめた。彼がいくら先生のことが嫌いだからとはいえ、あそこまで言うのはひどすぎる。

ウィル？「——ああ、そうだな。……分かつてるさ、逆恨みだッて、逆ギレだッてよ。でも、どうにも腹の虫がおさまらねエんだよ——こいつが何をしたッてんだ。こいつは自分の正義のために戦ッてたんだ。それなのに、——どうしてこうなッたのか、さッぱりわからねエんだよ……」

ケイスケ「ウィル……」

俺は、どうやら大きな勘違いをしていたようだ。彼は、アリサを庇おうとしたから、それぐらいの覚悟や理解があると買い被っていた。

……でも、そうじゃないんだ。ウィルだって、人の子だ。悩むときは悩む。苦しいときは苦しい。俺たちと、同じ。

ウイル？「なア、教えてくれよ、アリサ。あの日何があつたのか、……教えてくれよ……」

ウイルは、彼女の手を取った。そして、ぼろぼろと涙を流す。……彼の涙を、初めて見た。

彼女は意識を取り戻さない。無理もない、さっきオオグルマ先生が精神安定剤を投与したんだ。しばらくは目を覚ますはずがない。でも彼は、彼女の手を握る。強く、強く力を込めて。

—————
***** 病室？

——「ウイル・シャムロック？」

ウイル？「……ッ——」

何かが違和感を呼び起こした。隣を見ると、ケイスケがいた。……でも、動かない。……時計を見れば、針はぴたりと止まって動こうとしなかつた。

ウイル？「おいおい、何の冗談だよ、こりゃア一体……？」

混乱してきてオレは握っていた手を放そうとする。でも、手は不思議と離れない。違う、手が放そうとしないのだ。錯覚。錯覚。ますます混乱は膨れ上がる。

ウイル？「とりあえず、落ち着こつ。落ち着こつ。……」
目を閉じる。そして息を吸って、吐く。そして、再び吸って、微妙な違和感。

ひんやりとした空気。冷房じゃない。自然な、空気。それは冬の空気のように、ますます訳が分からない。オレが目を開けた時、そ

の謎は解明された。

ウィル? 「ここ、どこだよ?」

建物の廃墟が立ち並ぶ場所。この辺りにこんな場所があったか? それよりも、オレはいつ外へ出たんだろう。

それに、こんな場所がこの辺りにあったとしても、ここまで涼しいとは思えない。それよりも気になるのは、辺りがセピア色に染まっ
ていてまるで過去の映像を再現しているかのようなところだ。

ウィル? 「……あ、アリサ——」

握っていた手は、気付けば消えている。オレは一体どうしてしまっ
たんだ?

* 「むう……これ、一体なんだろうね」

ふと声が出て、横を向けば『彼』がいた。それ自体にも疑問を覚
えたが、気にしている場合ではない。まずここがどこなのか確かめ
なければ。

『彼』 「よく分からないよ……ほんとになんだろう、ここ」

ウィル? 「オレに聞くなよ。答えられないぜ」

彼はうなだれる。……そうやってすぐ所が彼の短所だろうか。も
う少し頑張ってほしいものだ。

『彼』 「……あれ。今、声が聞こえなかった?」

ウィル? 「声だと? オレは聞かなかったが、気のせいだろ」

オレが流そうとすると、あいつが突っかかってきた。そのくせ意
固地な奴なんだよ、そういうところが気に入ってるわけだな。

ウィル? 「——えっと……こりゃ数字か?」

誰かが、数を数えている。これは、ロシア語だろうか。もちろん、

自分にロシア語の嗜みは一切なかったが、不思議と理解できた。ならば、どこで誰が数えている？

ウィル？「よし、ちよいと見に行こうか。怖いんだッたらその辺で隠れてるよ」

『彼』「こ、怖くないよ！」

あいつもオレと一緒に来る。声がどこからするか探して、ようやく音の発信源を見つけた。それはクローゼット。その中で、誰かが数を数えている。

『彼』「あ、これかくれんぼだよ、きつと」

ウィル？「かくれんぼ、か。……興味ないな」

そして、中にいた彼女（声だけなので、女と断定はできないが）は、もういいかい、と言った。やはりロシア語。

ウィル？「訳が分からねエな……。ロシア……。女？」

『彼』「あ、それって、もしかして！」

あいつは閃いた。だからオレも少しのラグの後、閃く。クローゼットの中にいるのは、アリサだ。だが、アリサの声にしては高い。中の声は子どもっぽい。そして辺りのセピア色の光景。一致した。パズルの凹凸が、うまくかみあって合わる。

ウィル？「アリサの過去の、記憶だな。オレたちはアリサの意識とリンクしたんだ」

『彼』「り、りんく……？ よく分からないや」

そして、そこへ彼女の両親と思われる人たちが来る。オレたちの姿は、見えていない。干渉することはできない。……彼らの笑顔をみて、心が少し痛んだ。

『彼』「——元氣出しなよ」

ウィル？「言われる筋合いはない。それに、俺には父親も母親もない。俺の家族は、兄貴とオッサンと、お前だけだ」

それを聞いて『彼』は少し照れたようだった。これだから、オレはこいつが飽きないんだ。

アリサ母『もういいかい？』

彼女の母親がやさしく言う。それに応えるように、彼女もまた、もういいよと言った。

ウイル「あいつの気持ち……なんとなく分かってやれるかもな」

……親を困らせてやりたい。見つけてほしい。必要としてほしい。ここに居ることを知ってほしい。その思いが、このような行動に出てくる。彼女もまた、寂しさを感じていたに違いない。兄貴といった頃はオレはちょまかと逃げ回ったものだ。

『彼』「楽しい思い出、みたいだね」

『彼』が少し笑った。だから、俺も無理にでも笑おうとした。その時。

*『あ、アラガミだ！ アラガミが、あ、ああああああああああああー！』

突然の襲来。彼らも予想していなかったに違いない。彼らは、決してここから出ないようにと、アリサに諭す。

そして、来た。ヴァジュラ。違う。この前の青いヴァジュラ？

それでもない。黒い、ヴァジュラ。こいつは、——えっと——うっ……、

『彼』「……ど、どうしたの？」

ウイル？「悪い、……ちょッと痛むぜ。頭が」

オレはこいつを知っている筈だ。でも、今は思い出そうとしていない場合じゃない。奴は、無抵抗のアリサの両親を、喰い散らかす。……見れば、クローゼットの戸の隙間から、恐怖におびえる瞳が見えた。

——見ていたんだ。アリサは、この瞬間を見ていたんだ。目の

前で、アラガミが彼女の両親を貪り喰らう瞬間を。そしてアラガミは、まだ人の臭いが残っていることに気付くだろう。そして、クローゼットの中に隠れる彼女を、引きずり出そうとするに違いない。

隙間に顔をぐつと寄せる、黒いヴァジュラ。万事休す。オレタチはそれを指を咥えて見ることにしかできないもどかしさに憤りを感じていた。

その時、アラガミは悲鳴を上げる。地獄の底から湧きあがるその声は、痛みを伴っていた。ぼたぼたと、黒い血が地面を染める。右の目から、ぼたぼた、ぼたぼたと黒血を垂らしながらアラガミは去っていった。後に残ったのは、オレタチと、クローゼットの中の少女。

ドアは開かれ、肩で呼吸をする少女がそこにはいた。その手に握られているのは、……ガラスの欠片のようなもの。奴にダメージを与えられたということは、対アラガミ装甲の欠片かもしれない。

何はともあれ、彼女は生き残った。……いや、無様に生かされた。だから彼女は、大声を上げて泣いた。神がいたなら、恨むだろう。だから彼女は、アラガミを恨んだ。

これが、アリサ・イリーニチナ・アミエーラの封印した物語のページ。その幕開けは、とても残酷なものだった。

『彼』「なんて、——ひどい……！」

ウィル？「これが、あいつのゴッドイーターになつた理由か。……なんだ、オレと大して変わらねエじゃねエか——ははッ」

乾いた空笑。景色は薄れ、現実に取り戻されていく。『彼』の姿が薄れ……当たりの光景は、病室へと戻る。

そして、再び時計は時を刻み始めた。

——「ウィル・シャムロック？」

ウィル？「——ッ！」

電撃のようなものが腕に走り、バツと手を放した。そして彼女も目を覚ます。この光景を見てケイスケは、目をぱちくりさせている。

アリサ「……シャムロックさ——」

ウィル？「なア、アリサ」

オレが突然呼び捨てにしたから、彼女もまた驚いた。

アリサ「私……夢を見て——、それで、シャムロックさん……
あなたは——」

ウィル？「人の話を聞けよ」

オレはアリサの話を遮る。そして、オレから切り出す。

ウィル？「敢えて言わせてもらう。……辛かッたら、相談してくれてもよかッただぜ。苦しかッたら、頼ッてくれてよかッただぜ。
……言わなきゃ気付けないんだよ。お前自身が言ッてくれないと、オレたちも分からねェんだよ。仲間ッて言ッても、所詮他人だからな。……それに、オレは無条件でお前の味方だ」

アリサ「え……？」

ウィル？「こいつに聞いてみるよ。レキに聞いてもコウタに聞いても、きつとそう答える筈だ。……それが、仲間ッてもんだからな」

……そしてアリサはうつむく。ぼそぼそと、何かを語りだした。
アリサ「……私……思い出しくなくて——でも、私……私は、

もう気づいてる。……パパとママが死んだのは、私がわがままだったから。私があんなことをしなければ、パパとママは死なずに済んだのに。……それに、雨宮隊長が死んだのも——、」

やはり彼女は気付いていた。自分の犯した過ちに。あの錯乱状態でも、意識はあったんだ。

アリサ「私が、私がいなかったら、助かったのに、私が、私が雨宮隊長をつ！」

ウィル? 「大丈夫だ。あんな奴だから、大抵ふらつと戻ってくるに決まってるさ。——オレが、お前より重い罪を背負ってやるからよ。……罪の重さに耐えられなくても、誰かと共有することができれば、きつと耐えられるはずなんだよ。……オッサンがそう言うてたから」

アリサ「私が全部、……悪いのに……?」

彼女の顔は、今にも泣きだしそうな表情で、彼女がまた何か一言でも口に出したら、一緒にこぼれてしまいそうだった。

ウィル? 「アリサは、リンドウを撃ったのか? 撃ったのは、天井だけだ。悔やむ必要はないツての。勝手に殺したら失礼だろ、——オレも、生きてるツて信じてるんだからよ。……それによ、アリサ。これはお前一人の問題じゃないんだ。だから、……オレが罪を背負うから、手伝ってくれないか?」

それは、一人で背負う必要はないと言ったつもりだったが、なぜかケイスケは顔を真っ赤にしている。そして、彼女はついに堪えられなくなった。

ウィル? 「なんだ、何泣いてるんだよ、これじゃオレが悪人みたいじゃねエか!」

ケイスケ「うわぁ、泣かせたよこの人」

ウィル? 「うツせエ!」

なんだよ、こんな時ににやにやして。でも、こいつの笑い顔を見るのも久々だな。

そして、部屋のドアが開いて、オオグルマが入ってきた。そしてこの光景を見て驚いたようだった。

オオグルマ「な、なんだとっ?! 精神安定剤を投与したにもかかわらず、……まさか、お前っ!!?」

ウィル? 「そりゃオレのハンドパワーだ。思い知ったか、ヤブ医者め」

それを聞くなり、彼は焦って部屋を飛び出す。感応現象という意味深な単語を残して。

—— 1 3 2 3 サクヤさんの部屋

—— 「橋越ルカ」

ルカ「付きあわせちゃってごめん。ま、同意の上だからいいよね」
リリア「私も、先輩のことは心配ですからね。気を落としてなければいいけど……」

そう言いながら、彼女はドアを叩く。するとサクヤさんの返事が返ってきた。

サクヤ「誰かしら?」

リリア「あ、リリアです。えっと、少し……気になって、……そのあっちゃー、この子しどろもどろだねえ。落ち着けばいいのに。サクヤ「……ありがとう。でも、今は一人にしておいてくれるかしら」

リリア「で、ですよ、はは……すみません」

そう言って彼女はため息をつく。なんだか、安心したようながっかりしたような顔をしている。こういう時はつきりしないと、いつか後悔するのね。

ルカ「……わたしも人のこと、言えないか。……言わなきゃ伝わらないし、形にしないと、届かないよね」

リリア「好きな人には、好きって言わなきゃ。自分の純愛を伝えなきゃいなくなっちゃうよ？ ま、私もまだ言ってないけど」

ルカ「そこまで分かってるなら伝えないと」

彼女とは、結構話をする。だからわたしに好きな人がいることも知ってるし、わたしも彼女に好きな人がいることを知っている。

リリア「もし、私の思いを伝えて、相手がその思いを受け取らなかつたら。そう考えると、怖くてとても伝えられないよ。……でも、伝えられずに誰かに盗られてしまうか、それとも、——」

そのまま命を落としてしまうか。……橘上官と隊長さんの関係はちよくちよく目にしていたから、見ていてピンと来ていた。でも、付かず離れずなのだ。きつと、どちらか一方が動くだけで、状況は大分変っていたに違いない。

……だけど、そんな弱々しいことを彼女は言ったから、年上としてガツンと言ってやることにしよう。

ルカ「愛は思いっきりが大事、だと思うよ」

コウタ「愛がどうしたの？」

突然の声にびっくりして振り向くと、藤木さんと榊さんがいた。

レキ「愛——もしや、好きな人がいるとでもいうのか？」

ルカ「ち、ちがつ、そ、そんなんじゃない！」

反射的に手が出て、榊さんの眉間にクリーンヒット。

ルカ「わ、わー！ ご、ごめんなさい！！」

リリア「もう、こんな忙しいときにこれ以上怪我人増やさないでよ

！
」

建前上彼女はそんなことを言っているが、彼女も心中ではこいつが悪いと思っっているに違いない。実質目が笑ってる。

レキ「だ、大丈夫だ……。な、慣れてはいないがこの程度なら、まだ十分、」

倒れた状態で言われても信憑性ないなあ。とりあえず彼を起こして、彼らに橘上官を一人にしてあげるよう言った。でもやっぱりまだ起きない。仕方がないので放っておいて、エレベーターを待つ。遅いなあ。

コウタ「あ、やっと来た」

中には睦月さんが乗っていて、いかにも彼女の様子を見に来たようだ。

ルカ「残念だけど、今は一人でいたいんだってさ。そら、ガキは帰った帰った」

ケイスケ「俺はガキじゃねーよ。やっぱ、大分落ち込んでるんだな」
リリアは頷いて、後ろからようやく起きた榊さんと藤木さんが来る。

レキ「さて、このフロアにはもう用はないな。行くでしょうか」

次々と乗り込み、わたしが乗ると、あれ？ ブザーが鳴ってしまった。

ルカ「ウツソー、わたしそこまで重くないのに」

ケイスケ「とりあえず鳴ったんだから降りなよ、次で乗ればいいじゃないか」

渋々エレベーターから降りる。きつと壊れてるんだ、絶対！

ルカ「はあ、また待つのかあ。——と、あれ？」

橘上官の部屋の扉が開いて、彼女が出てきた。

ルカ「橘上官。……大丈夫ですか？」

サクヤ「今は休暇中だから、サクヤで構わないわ。……ほかの人たちには？」

もう別のフロアへ行ってしまった旨、わたしがそこまで太っていないことの旨を示すと、彼女はクスリと笑った。もう、笑い話じゃないのに！

サクヤ「あ、気分を悪くさせてしまったのなら謝るわ。それに、みんなにもせっかく来てくれたのに、追い返しちゃったみたいだから、謝らないといけないわね」

そして、不意に神妙な面持ちで、わたしに話す。

サクヤ「……そういえば、大丈夫かどうか聞いてくれたけど、やっぱり少し話をさせて。……上官と部下じゃなくて、私、橘サクヤ個人としての話よ。あなたの都合がよかったら、聞いてくれるかしら。年齢の近い女性として。……彼のことを、あまり知らない人としてルカ」——話して、苦しくなりませんか」

彼女はゆっくりと横に首を振る。苦しくなるに決まっている。だけど、彼女は話す。聴かなければ、彼女の想いを踏みにじることになるだろう。

ルカ「分かりました。……上がってもいいですか？」

サクヤ「ええ、結構よ。立ち話だと疲れるでしょう？」

彼女は、わたしを部屋へ招き入れた。

7・CRADLE SONG（後書き）

なぜか超スピードでアリサ復活まで行きそうになってしまつ。アリサの衣装チェンジが来たので小躍中な現在。微熱はそのせいではないはず。

ウィルが目立ち始めたような気がするが、主人公はあくまでケイスケ。オリジナルキャラの難しさはこれだろう。うまく出番を配分してやらないと……。

今回は手取り足取りアリサの任務の手伝いかな。少々スピードアップって感じ。急ぎ過ぎて変な方向へ行かないようにしないと。それでは次回まで。

追記：一通りセリフに発言者の名前を書き込みました。これで混同は防げるはず。時々ウィルの名前の後ろに「？」がついているのは御愛嬌。

8・SEEKING STRENGTH（前書き）

キャラ紹介

Case 2 榊 レキ：Reki

Age：17 Short/Sniper/Tower shield

ケイスケと全く同時期に配属された、新型神機使い。冷静さを信条としている青年。

博士曰く、『予想より少し数値が低い』程度。また、『何か迷いがある』とツバキさんが言っている。まだ実力を出し切れていないよう。

ケイスケのことは仲間であり、大事な親友である。彼がそう思っているだけかもしれないが。

裕福な家庭に育ったものの、ゴッドイーターに志願するといった手段で家から逃げ出した。どれほど彼は追い詰められていたのだろうか。

神機はショート（OPを早く貯めるため）、スナイパー（援護射撃を正確に行うため）、タワーシールド（確実に守るため）。

好きな食べ物はカレーにラーメンなど、実に庶民的。どうやら彼は家で碌なものを食べていなかったようだ。

趣味は読書。また、テレビも相当気に入っている様子。彼の家にテレビがなかったからだろう。

エリックは古くからの友人のため（本人曰く腐れ縁）、とても大事に思っている。こちらがどう思っているかは知らないが。

ちなみに、ちよくちよくリツカと会っているようだが、本人は顔を真っ赤にして否定している（一方のリツカにはそういう気はないようだ）。

自室にはたくさんの本が置いてあり、その大半は旧世代の遺産と

して高価で取引されたものである。

8・SEEKING STRENGTH

1330 サクヤの部屋

——「橋越ルカ」

ルカ「ちゃんと休んでますか？ 折角の休暇なのに、今のうちにしっかり休まないと持ちませんよ」
サクヤ「休めるはず、ないじゃないの。だって、眠っても、リンドウは夢の中まで付きまとうんだもの。彼を忘れることなんて、できない……」

別にわたしは忘れると言った覚えはないわけだが。……空気が重いし、なぜか口の中が乾いた。

サクヤ「飲み物はいるかしら」

ルカ「あ、……それじゃあ、お構いなく。できれば冷たいものがないです」

ちよつと前はよく厚かましいと言われたことだけど。でも、人が施そうとしているのだから止める由はどこにもないし、だからいつからか受け容れるようになった覚えがある。

橘上官「……いや、サクヤさんは、冷蔵庫からアイステイーを取り出そうとして。……冷蔵庫の横のビールを見て一瞬手を止めた。

ルカ「ちゃんと取っておいてあげてるんですか。配給券って大抵期限ありましたもんね」

といったものの、もう彼のしぼ——失踪は確定された。だから、もう彼に対する配給券は今後出ることはないだろう。少なくとも、帰ってくるまでは。

サクヤ「ええ。……いつ帰ってくるか分からないから、たぶんいく

つか飲んでるかもしれないけど」

……でも、数的にはまだ一本も飲んだ形跡はなさそう。無理して嘔つかなくてもいいのに。

ルカ「アルコールでも摂れば、ちょっとは楽になるかもしれないですよ。今冷やしているビールだって、いつ飲むんですか？ とにかく、ストレスが一番の敵です。こういう時はスカツとすることでもしたらいいです、今から任務とか」

サクヤ「今、休暇中よ」

分かってて言った。たぶんサクヤさんも気付いてた。……冗談つて、やっぱり難しい。

……冷蔵庫が開きっぱなしだったから、閉める閉めろと音が鳴る。そしてサクヤさんが閉めようとしたとき、なぜか冷蔵庫のビールの缶の下モノに目が行った。

ルカ「待ってください。そのビール、何か底に……」

サクヤ「え、……そのビールって、どの」

少々じれったくなってきて、わたしが直接冷蔵庫の前まで来て缶をひょいっと取る。すると、その下の何かが軽い音を立てながら転がっていく。サクヤさんは、それをそっと拾い上げた。

サクヤ「——これは、ディスクね。何のディスクかしら。そもそもなぜここに」

ルカ「……きつと、雨宮上官がこうなることを予測して……としか言えませんが、わたしには」

好奇心が高らかに湧き上がる。わたしは彼女にターミナルにディスクを挿入して、中身を確認するよう促した。雨宮上官が一番信用している彼女に渡したのだから、それほどに重要な内容なのだろう。

サクヤ「……出たわ。これはリンドウの任務履歴みただけ。ちようどあの出来事がある寸前までの記録を、——あら、……おかしい、ないわ」

ルカ「ない？ データが壊れてたりしてるんですか？」

サクヤさんは深刻そうな顔で首を横に振る。手にはかすかに汗が。サクヤ「あの日のデータだけが、ないのよ。人為的に消されてる…

…？」

これは、単なるミスか、それとも陰謀？ —— ふふつ、やつぱそんなことでしたか、ちよつと熱くなってきたね、こりゃ。

サクヤ「他にもファイルはあるみたいだけど、どれもロックがかかっているようね」

ルカ「ロック、ですか。どんな感じの？」

サクヤ「腕輪認証よ。解除には、ロックをかけた本人の腕輪が必要なのよ。リンドウがどこにいるか分からない以上、どうしようもないわ」

リンドウさんがいれば。……リンドウさんの、腕輪があれば。しかし、きつとどちらに戻ってくる可能性は、ほぼないと言えるだろう。

これ以上の情報は現時点では得られない、ってことか。ちよつと興奮めしたかも。結構期待してたからなあ。

ルカ「じゃあ、わたしはそろそろ帰りますね。……少しだけでも、元気になってたからよかったです。休暇が終わったら、任務にみっちり付き合ってもらいますからはやく調子取り戻してくださいね」サクヤ「ええ。今日はありがとう。いろいろ話したら、結構楽になったわ。……それじゃあ、今度任務に行きましょうね」

わたしと話したくらいで、彼女は楽になったのだろうか。……本人が言ってるんだ、それならよかったって、喜ばうじゃないか。だから、わたしはサクヤさんに、作り笑いで微笑みかけた。

——「睦月ケiske」

リンドウさんがいなくなったから、俺たちが所属している第一部隊の隊長席は実質空席になっている。一応緊急を要する場合は、サクヤさんが隊長の代わりを務めるが、そのサクヤさんも今は休暇中で、その場合三番手としてソーマが当たるはずだが、隊長らしき仕事をやるつもりは見る限り、なさそうである。

まさにトップ不在。だからこそ、アラガミの襲撃を受ける度にパニックになることが多いのだろう。第二部隊、第三部隊もともにその波及を受けやすくなっている。

そもそも、第一部隊とはある種の新人養成部隊である。新人（無論俺も含めてだが）が伸びなければ、他の部隊に配属されてもどうしようもない。要するに第一部隊はここアナグラの要と言っても過言ではないだろう。現在はまだ新しい適合候補者が出ていないため、一安心といえよう。だが、いつ新人が入ってくるかは、誰も予想できない。今の状況では、どうにもならない。

ウィル「どうにもならない、ですか。どうにかしなければなりませんね」

ケiske「——ウィル」

白ウィルだ（こんな感じの温和な方が白ウィル。とげとげしい方が黒ウィル。これじゃ二重人格みたいじゃないか。もしかして本当に？ ……まさか、それはないな）。いつの間にかいたのだろう。

レキ「さつきから何をぶつぶつ言っている？ 独り言はもう少し音量を下げてくれ」

コウタ「確かに重要な問題かもしれないけど、それならみんなで話し合った方がいいよ」

コウタもいる。彼の言葉は、除け者にするなど言っているように聞こえた。レキは、ちよつとうざい。

レキの横にもう一人いるけど、名前なんだっけ。脳内散策を行う

も、やっぱり顔と名前が一致しない。

ケイスケ「話し合って解決する問題ならいいけどな。それでリンドウさんが戻ってくるなら儲けものだけだ」

レキ「そんなうまい話があると思っていたのか？ 確かに、俺もそう思っていたことを否定する気はないが、やはりそこまで甘くはないようだな」

レキですら、首を傾げるような難題。宣伝部長なら何とかしてくれると思うが、どうだろう。横の人の名前はなんだったかな……。

ルカ「でも、何か怪しいんだよね、あの人」

カノン「そ、そうですか？ 私は、そうは思いませんけど」

ルカと、カノンさん。どんどん集まってくるなあ。

それにしても、ルカの宣伝部長に対する考えはどういったものなのか。だが、彼女は話題を転換する。

ルカ「でも、シックザール支部長よりもあの精神科医が怪しいかもえっと、ぐるぐるいたいこ？ いや、おおまるだいこ？」

レキ「オオグルマ ダイゴ先生、だな。俺はあの人のこと結構信用してるけど」

白ウィル「ボクは……よく分かりません。少なくともオレは怪しいと思ってますけど」

怪しいの？ それともよく分からないの？ 黒白はつきりしないな。急な性格の変化とか、謎の多さとか。いろいろと分からないことが多いからなあ。

この話題を続けることに抵抗を感じたようで、ルカは話を逸らした。

ルカ「そういえば、台場さんはこの前休暇をもらって実家へ帰ったんでしたっけ。どうだったんです？」

カノン「久しぶりに母さんのご飯が食べれたんです。とても幸せでした！ でも、コトミがいなかったから少し残念でしたよ……」

コトミ？ カノンさんの妹かな。確か、極東狼谷学院に志願して今はそこに通っているんだったっけ。あそこに入るのにはそれなり

の学力が必要だったり、金銭面の問題とかいろいろあるからな。…俺は絶対に無理。天と地がひっくり返るか、アラガミと人間の関係が素晴らしくよくなったなら通えるかも。

この時代にも、ちゃんと勉強は必要だってことは当たり前である。中学課程までが終わっていれば、あとは高等部に進学するもよし、デザイナーやらエンジニアやらに就職するもよし、ゴッドイーターに志願するもまたよし。ましてや無職の奴などはまずいはずだ。ちなみに、中学課程までの間にゴッドイーターになった場合（全体のおよそ半分がこの段階で志願し、適合する人が多いようだ）は、特例としてゴッドイーター専用のカリキュラムが施行される（通信制から定時制まで。なかなかの値段にお袋はひっくり返った）。かく言う俺も、親の脛をかじってここに居るわけで。真面目に勉強しているかと言われたら、何も言えない。うん、ごめん。本当に悪いと思ってるけど、世界のためだから。そんな免罪符が通用するはずもない。

前に述べた極東狼谷学院は、高等課程に加え、ゴッドイーター養成用の訓練も行っている。そのコトミさんって人も、頑張ってるんだろうな。

ルカ「いいなあ、狼谷。私も入りたかったけど、どうにも勉強不足が祟ったみたいでねえ。独学や趣味は頑張れるけど、普通の勉強は無理」

コウタ「それにしても、その歳でゴッドイーターになるって、すごいよな。大抵13〜16辺りが適合するのに」

それを聞いて彼女は、私の心はまだ16歳ですようと言い切った。

……まあ、鯖読みとしてはまだ許容範囲内か。

……こうやって話をしていると、みんな笑顔でいるものだから。本当にいつもの団欒のように思えてくる。リンドウさんがいなくなっただけが、いつものようになっていて。このまま彼が忘れ去られるかと思うと、……心が痛む。

ルカ「藤木くんにも妹がいるんだっけ。えっと、ノゾミちゃん、だったかな」

コウタ「うん。それはもう俺に似て賢くって、」

レキ「信憑性が皆無だな」

横の人「俺にもね、本当に素敵な姉ちゃんがいてさ、絶対姉ちゃんが世界で一番だね」

「その理屈はおかしい！」

でも、こんな光景がこそばゆくて、眩しすぎて。……辛かった。

白ウイル「——あれ、なんで泣いてるんですか？」

ルカ「って、どうしたちゃったのよ睦月さん。何か嫌なことでも思い出したの？」

俺はただ、何でもない何でもないと言って、その場から離れた。みんなに涙を見られたことが、とても嫌だった。泣くものかと決まっていたのに、情けない。

*

エレベーターの中で、俺はやり場のない悲しみを握りつぶした。でも、涙は止まることを知らない。だから、いつまでも俺は情けない面をしているしかなかった。

リリア「ほんと、情けない顔しちゃってるわねー。何があつたのよ」

……リリアが、厭味つたらしい言い方で声をかける。俺は放っておけと言わんばかりに無視を決め込んだ。

リリア「無視しても、どうにもならないでしょうが。どうせリンドウさんとかそのあたりのこと気にしてるんでしょ。時期考えればそれぐらいわかるよ」

ケイスケ「放っておいてくれよ。みんな能天気だ、リンドウさんがいなくなつたのに、普通に笑ってる。みんなおかしいんだ、どうか

しているんだ！ どうして普通に笑ってられるのか、俺には分からないよ！！」

それを聞いて、呆れるようにリリアはため息をついた。

リリア「……上官がいなくなったら、話し合ったり笑ったりしちゃういけないっていうルール、私は知らないけど。誰が作ったの？ あ、もしかして、俺ルールってやつかしら。自己中心的過ぎて正直笑えるわね」

ケイスケ「うるさいっ！ ルールとかそんなんじゃない、普通そうだろう？ 自分にとって大切な人が、いなくなっただんだ！ もしかすると死んでるかもしれないんだ、それなのに、どうして——」

ついにリリアが形相を変えた。そして俺を思いつきりひっぱたく。リリア「ああ、あんたの言葉が一番おかしい。あんたがリンドウさんに命令したんじゃないかな？ 絶対生きろって？ あんたが命令したんでしょ？ あんたがああ時の隊長だったんでしょ？ それなのに責任放棄？ ふざけるなっ！ 自分で自分の心を否定して何が楽しいっての！？」

ケイスケ「あ——」

——そうだ、忘れてた。あの時、リンドウさんに命令したんだ。生きて、生きて。そしてリンドウさんは何て返したんだ。つげ。

『……了解ッ！』

リリア「みんな信じて待つてるんだよ。いつものように振る舞って、いつでも帰ってきてもいいようにしてるんだよ。そこに、悲しみも後悔もいらぬ。リンドウさんの席は、まだちゃんと残ってるから……自分のことを、傷つけないで」

……もう、涙は止まっていた。でも、心の中に、なんだか苦しいものが集まってくる。

ケイスケ「苦しいんだよ。……胸が、痛いんだよ。自分を信じたいのに、信じられないんだよ……」

いつまでも帰ってこないリンドウさんを思うよりも、死んでしまったと思えた方が、どれぐらい楽だろうか。信じるのがこんなに辛いだなんて、思いもしなかった。

そんな俺を見て、リリアは微笑んで言った。

リリア「私たちは信じてる。私たちが信じれるんだもの、あんたにだって、それぐらい簡単なことでしょ。

——だから、信じよう?」

1 4 5 3 エントランス

——「榊レキ」

レキ「——それでやはり、俺にも兄弟姉妹がほしかったのだがナルカ「ま、みんなの話を聞く限りは、いたらいたでめんどくさいけど、いなかったら心細いんだよね」

うんうんと縦に首を振る奴ら。だがフォーゲルヴァイデはそんなことはありえないと言ったように大げさに横に首を振る。

レキ「それで、ウィルは兄弟とかはいるのか?」

白ウィル「いる……いや、違うかもしれませぬ。います、とは……言いにくいですし」

はつきりしてくれ、とみんなが言う。相変わらずこついうところが不可思議すぎる。

白ウィル「……オレには兄が一人、いました。もう、……死んでしまいましたけど」

カノン「あ、——ごめんなさい」

気にしないでくださいと、笑いながら言う。でも、苦笑いだ。

白ウィル「詳しく話す必要は、ありますか？」

コウタ「あ、いや。ウィルだって、話したくないだろうし」

すると、意外にもそれを否定する。一体どうしたんだ？

白ウィル「——心の整理のようなものです。だから、これから話すことは独り言なんです。聴くなり耳をふさぐなり好きにしてください」

彼は語りだし、他の奴らはそれを黙って聞くことにした。

白ウィル「兄は、オレにとっての唯一の肉親でした。オレには、心が許せる親友がいたけれど、やはり兄がいなければ、どうにもならなかったかもしれない。憎しみに心を押しつぶされていたに、違いない。今だって、オレはきつと心のどこかで自分を捨てた両親を恨んでいる筈ですから。

……オレと兄にいた、共通の親友。ちよくちよく会いに行つては遊んでましたけど、……あるとき、そこへ来たんです」

ルカ「来たって、……まさかシャムロックさんのお兄さんを殺した人？」

あくまで彼は、独り言のつもりで語っている。だから、質問には答えず、『補足する』。

白ウィル「来たのは、アラガミでした。どんなアラガミだったかは、あまり覚えていません。生憎その時のオレは9歳ほどでしたから。

……そして、そいつは襲い掛かってきました。『親友』も、兄も、そいつに殺されてしまいました。オレだけが、生き残って。残された兄と『親友』の体は、氷みたいになんて冷たくなっていました」

ルカ「生き残ったって、逃げたんですか？」

軽く横に首を振って、再び『補足』。

白ウィル「殺される前に、一人の神機使いが助けてくれました。今となつてはオレの師匠ともいえる存在です。その頃はまだ、この地で戦っていたみたいです。そしてオレは、南米まで――」

そこまで言つて彼は言葉を切った。正直続きが気になる。

白ウィル「独り言はこれで終わりです。……結構、整理できたような気がします。……ありがとうございます」

そう言い残して、彼はエントランスを後にする。……愕然とする俺たち。彼には父も母も居なくて、そのうえ兄と親友を失った。不幸、と言えば片づけられる人生。でも、そんな言葉で片付けてはいけない人生。

コウタ「……そういえばさ、ケイスケに聞いたんだ。あのアリサっていう奴も――」

レキ「アミエーラか。彼女がどうしたんだ？」

事の次第をコウタから聞く。そんな話を聞いていると、俺の不幸がとてつもなく矮小なものに思えてきた。もつとも、不幸に大きさなどはないのだが。

ルカ「復讐者^{アウエンジャー}、か。そういえば、アミエーラさんの神機もそんな名前だったような気がするわ」

レキ「復讐のために戦っているなんて、――悲しいことだな」

おそらく、二人は自覚しているはずだ。だけど、彼らは神機を振るい続けるだろう。成し遂げられるとは思えない。……いつか、こんな復讐が無意味であることを、伝えたい。

ルカ「それじゃあ、わたしたちも戻るから。んじゃ」
カノン「し、失礼します」

橋越と台場さんは自室へ帰っていった。さて、これからどうしたものか。

レキ「ところで、これからミッションへ行きたいんだが。一緒に行

つてくれるか？」

コウタとフォーゲルヴァイデに聞いてみる。フォーゲルヴァイデの方は、二つ返事で了解してくれたが、コウタは無理だったようだ。そこに、入れ違いで二人が来る。誰と誰だったか。顔は覚えているのだがな……。

シユン「今から任務か？ 俺たちは行くぜー、な、カレル」
カレル「任務の割に合った報酬が出るのならな」

ああ、そうだ。シユンとカレルだったな。ケイスケは先に会ったようだが、俺もその後彼らに偶然会って、自己紹介を勝手にされた。どうりで印象が薄かったわけだ。

レキ「メンバーはばっちり4人だな。よし、今すぐ行ける任務があるか聞いてこよう」

そして、俺の知らないアラガミの名が告げられ、一瞬焦った。しかし、このメンバーなら十分やれるだろう。確信があるわけではないが、たいてい俺の予想は的中する。

フォーゲルヴァイデ「クワドリガか。榊、そいつと戦うのは初めてだろう？ ならば上に気を付けたまえよ」

レキ「お前じゃあるまいし、大丈夫だ。報酬の額は4分の1で、おっと、なかなか値が張る仕事だ。これなら満足だろう」

カレルも不敵に笑う。どうやら納得がいったようだ。シユンはどう行く準備は万端といった様子である。

いつもの光景だ。リンドウさんのために、……ケイスケのために、このままいつもの光景を保とう。

旧世代の空母が、今ではアラガミの巢窟と化しているようだ。まさに負の遺産というべきだろう。この型の空母は、昔読んだ本の挿絵に出ていた覚えがある。昔は幼心地に乗ってみたいと思っていたが、いざ乗ってみてもまったく楽しいとは思わない。

レキ「ところで、クワドリガってどういう奴なんだ？」

シユン「あれ、知ってそうだと思ってたんだけどな。俺はめんどくさいから、カレルが説明してくれるって」

カレル「面倒くさがるな。……戦車を想像してもらえば、だいた想像はつくだろう？ 戦車も知らないとは言わせないからな」

それぐらいは知っている。だが、そんな機械的なアラガミがいるとは思えないな。

フォーゲルヴァイデ「榊、クワドリガを侮らない方がいい。攻撃の火力は、華麗な僕でもひとまりもないのだから」

レキ「へえへえ、それは恐ろしいアラガミだな。百聞は一見にしかず。実際に見るまではあまり信じないぞ」

そして、轟音が聞こえた。マップを確認すると、3時の方向にターゲットを確認した。さて、拝ませてもらうか。その恐ろしい姿ってやつを。

で、案の定みんな仲良くぶっ飛ばされたわけだ。いくらなんでもミサイルは反則だろ。

1546 病室

——「ウィル・シャムロック」

サクヤ「気づいたみたいね。……安心したわ」
アリサ「橘上官……。……その、私……」

アミエーラさんはサクヤさんに謝ろうとしているみたいけど、サクヤさんがそれを制止させる。

サクヤ「いいのよ。アリサ、あなたはただ天井を撃っただけ。それ以外は、何もしていないのだから」

でも、やっぱりアミエーラさんは謝ってしまう。それはやはり、彼女に罪の意識があるからだ。ボクがしっかり支えてあげないといけないのに。情けないなあ……。

サクヤ「……ウィルが、いつもあなたのことを気遣ってくれていたこと、知ってるかしら？」

白ウィル「わ、わあああ、それは言わないでください！ は、恥ずかしいじゃないですか」

別にボクはアミエーラさんに対して特別な気持ちを抱いているわけではないけれど、異性としてやはり意識してしまうことは否定できない。……まさか、ボクがこんな感情を抱いてしまうなんて、思ってもいなかった。

白ウィル「ごほん。それで、ボクは確かにサクヤさんを連れてきました。これで、ボクが頼まれたことは全部です。……後は、アミエーラさんがどうにかしなければいけません。……でも、ボクはまだここにいますから。辛くなったら、助けてあげられますよ」

アリサ「……ありがとうございます」

初めて、彼女に感謝されたような気がする。素直なのが一番いいんだよ。もっと早く、彼女も気付いていればどんなによかっただろう。……気付いてあげられたら、よかったのに。

サクヤ「……話してくれるのね。あのとき、何があったのか。どうして、アリサがあんな行動をとってしまったのか」

アリサ「はい。……それは、私がロシア支部に入隊した頃からです」

アリサ「私は、両親がアラガミに殺されたんです。ヴァジュラに」
サクヤ「そう、だったのね。……続けて」

アリサ「そして、私は誰かに助けられて——誰だったかは、思い

出せませんけど——そして、しばらく経って気づいたら、どこかの病院に入院していました。そのあと適合候補者として半ば強引にロシア支部の附属病院に移されましたけど。

……ロシア支部では第三部隊、防衛班の一員として活動していました。アラガミとの戦いの中で、カウンセリングの先生がいてくれたから、何とか心の平穏を保っていられたんです」

白ウイル「そのカウンセリングの先生って誰ですか？ 何か微妙な胡散臭さを感じますけど」

アリサ「この支部についてきてくれたんです。オオグルマ先生ですよ」

サクヤ「オオグルマ先生なら、突然ロシア支部に呼ばれて明日帰ることになったんですって」

それを聞いて、少しアミエーラさんは悲しげな顔をする。やはり、信頼していただけあって帰られるのが辛いのだろうか。

アリサ「……あ、ごめんなさい。えっと、先生は私にとっても親切にしてくれました。私にいろいろなことを教えてくれて——例えば、アラガミについて、戦い方について」

白ウイル「意外とよく知っているんですね。フェンリルに勤めている医師だけあって戦闘に関する知識も豊富だなって」

アリサ「それと、勇気の出る不思議なおまじないも教えてくれました」

サクヤ「おまじない？ 私も聞きたいわね」

アリサ「簡単なことです。ロシア語で、1、2、3と数えるだけなんです」

そう言うのと、彼女はとても思いつめた表情になる。聞けば、そのおまじないを唱えようとしても、言葉にならないらしい。

白ウイル「何かショックをうけたんですか？」

アリサ「そんなことはないはずですけど。……そして、先生は。私の両親の仇についても、教えてくれました。あの時の私は、何があったのか理解できなかった。そのときのことを、オオグルマ先生は

思い出させてくれた。本当は思い出したくなかったけど、これは罪なんだって。だから、思い出したんです。

……そのアラガミの姿、声、特徴、他にもいろいろと。だから私はあの戦闘でアラガミに対峙した時、頭の中が真っ白になって、オグルマ先生の声が聞こえて。ゆっくりと数えるよう言われた気がしてっ、私、数えました。3つ数えた時、頭の中がぐちゃぐちゃでどうして私が雨宮隊長を憎んでいたのか分からないっ！ どうしてっ！？ なんで私の仇は変わってしまったんですか！？ いやっ、なんで隊長がつ、いや、いやいやっ、いやあああああっ！！」

白ウィル「落ち着いてください。……リンドウさんを、あなたは撃つていません。撃つたのは天井です。それは、あなたが違うと思うたからじゃないんですか？」

……アミエーラさんには、リンドウさんの命令が意識下に存在していた。だから、天井を撃つたんだ。やっぱり彼女は強い。ボクなんかよりも、ずっと。

—— 1600 病室

——「ウィル・シャムロック」

サクヤ「話してくれて、ありがとう。そういえば、ツバキ上官に聞いたけど、もうすぐ戻ってこられるわよ」

アリサ「そう——ですか……」

浮かない顔をする。そうか。もうこの支部の連中の一部は、彼女のせいでリンドウさんが死、……いなくなってしまったと思っているんだ。

白ウィル「大丈夫です。……そんな奴らはボクが頭から喰ってしまいますから」

アリサ「え？」

白ウイル「あ、いやいや、そんな奴らに手は出させませんよ。だから一緒にがんばりましょう」

ふう、ついつい本音が出てしまった。喰ってしまうなんてアミエーラさんの前で行ったら悪いことを思い出してしまうじゃないか。今度から気を付けよう。

サクヤ「それじゃあ、私たちは失礼するわ。私もそろそろ休暇が明けるから。……正直、リンドウなしの戦いは怖いわ。もしかすると私はどこかでリンドウに依存していたのかもしれないわ。……だから、リンドウが戻ってくるまでに負けないくらい強くななきゃね」
白ウイル「そ、そんなことしたらリンドウさんの立つ瀬がなくなってしまうですよ」

その言葉にサクヤさんが笑って。ボクも笑って。……アリサも笑ってくれた。少しぎこちないけど、彼女の本当の笑顔を初めて見たような気がする。

心の中で、一瞬。『アミエーラさん』が『アリサ』に変わった。その時ボクは、ボクも彼女のことを少しは意識しているのだと改めて気付いた。

1630 神機整備室

――「榊レキ」

レキ「死ぬかと思った」

カレル「大袈裟だな。だがしっかり稼がせてもらったよ。それじゃあまた、稼ぎのいい任務があつたら報せてくれよ」

カレルは涼しい顔で神機を置いて行ってしまう。

シュン「……レキ、だっけ。もうちょっと鍛えた方がいいと思うぜ」
レキ「い、痛いところを思いっきり突かれたっ！」

そう言い残してシュンも行ってしまう。確かにどうもスタミナがおかしい。別に装備に運動不足のスキルがついているわけでもないが。

フォーゲルヴァイデ「榊、それは君自身が運動不足だったからだ」
レキ「すまん、フォーゲルヴァイデ。殴らせろ」

無論、殴ろうとすると咄嗟にかわされる。こいつは俺と違って運動が得意だからな……。くそっ、その運動能力を8割ほど俺に寄せせ！

リツカ「あ、レキさん。こんなところで暴れちゃだめだよ」

レキ「あわわ、り、リツカさん」

しまった、ここが神機整備室であることを忘れていた。ここは彼女たちの仕事場なんだ、ここで騒いだら迷惑に決まっている。

レキ「す、すみません。仕事なのに、ほんと」

謝ると、彼女は笑って言った。

リツカ「今は休憩時間だから。そうだ。飲み物を買に行こうと思ってただけど、何かほしいものはある？ おごるから」

レキ「お、おごってもらうだなんて、とんでもない！ むしろ俺がおごるべきなのに……」

ここへ入隊してからいつもそうだ。なぜか相手の空気に流されてしまう。……本当の自分を見せているようで、恥ずかしさとうれしさが混じったような感情でいっぱいである。

リツカ「もう、だったら適当に買ってくるから。何が来ても文句言わないでね」

レキ「わ、ちよっ——」

少し怒った様子で行ってしまった。

フォーゲルヴァイデ「榊、君は少し郷に従うべきだと思うよ。まあ、僕は華麗に従い、華麗な毎日をご過ごしているからね」

レキ「郷に入りては郷に従え、か。確かにそうかもしれないな。ところで、このアナグラにルールなんてあったのか？」

……フォーゲルヴァイデ曰く、謙遜はほどほどに、恩恵はありがたく受け入れる。命が一番、生きていることが何よりも大切。……俺の知っている誰かが言いそうな言葉で、少し目頭が熱くなった。

フォーゲルヴァイデ「じゃあ、僕は部屋へ帰らせてもらおうか。今の君を見ているとなぜだか少し怒りたくなる」

レキ「怒りたくなるって、どういう——」

彼も神機を預けて自室へ戻る。入れ違いにリツカさんが戻ってきた。

リツカ「お待たせ。適当に選んできたから、文句は言わないって約束だからね」

ラベルを見ると、冷やしカレードリンク。……何度が気になっていたが、何度も躊躇っていた。味の方はどうだろう？

レキ「……お、なんだ、思った以上においしいじゃないか」

リツカ「あれ、気に入ってくれた？ レキさんって『通』だね」

通？ 意味がよく分からないが、とりあえず褒められたと受け取っておくとするか。そのあとなぜか会話が弾んだことは語るに及ばない。

0915 エントランス

——「睦月ケイスケ」

アリサ「……本日より、原隊復帰となりました。……ま、また、よろしく願います」

アリサは、俺とコウタとウィルの前で儀礼的にゆっくりと頭を下げる。緊張で、震えている様子が見て取れる。俺はこちらこそよろしくと言っておくことにする。コウタも、温かく迎えてくれた。

タツミさんもカノンさんも、ブレンダンさんも彼女を支えてくれた。サクヤさんもリリアの奴も、ルカさんも、レキの奴も。カレルやシュンはいつも任務で出払っていたけれど、彼女を陰ながら応援してくれていることを俺は知っていた。ソーマは……よく分からない。

彼女を一番支えていたのは、ウィル。境遇が似ていたのもあったけど、アリサのことをいつも考えて、本気で心配していたのは彼だった。病める時も、健やかなる時も。なんだか結婚式みたいなフレーズだが、それが彼の性格を端的に表している気がする。

そんな時、エレベーターから二人の神機使いが出てきた。

神機使いA「それにしてもよ、第一部隊隊長を殺した奴が、原隊復帰するらしいな」

神機使いB「ああ、なんでぬけぬけと戻ってこられるんだろっな。

一生戻ってこなければよかったのに」

……アリサがここに居ることに気付いていないのか。または、気付いていてわざと聞こえるように言ったのか。前者にしろ後者にしろ、許しがたい言葉であることに変わりはないかった。

白ウィル「……あの二人組、殺してきていいですか？」

ケイスケ「お、落ち着きなよ。確かに許せないけど、我慢するべきだよ。殺すだなんてとんでもない」

コウタがどうにかしてウィルをなだめようとする。そして、彼は少しため息をついて、冷静さを取り戻す。白ウィルも、怒るときは怒るみたいだ。だがこれは怖い。

奴らの言葉に罪悪感を感じ、アリサは唇を噛みしめる。

アリサ「やっぱり、戻って来てはいけなかった。——もうここに、

私の居場所はないんですよ」

ケイスケ「そ、そんなことないって」

そう言った後に、失言だと気付いた。こんな言葉で彼女を安心させられるはずがない。アリサは、泣きそうな顔でぽつりと言った。

アリサ「——私が全部悪いんです。あなたたちも、……責めればいいですよ」

コウタ「俺たちは責めたりしない」

その言葉は意外、コウタが口にしたのだ。その言葉に迷いはなく、そして彼の眼には、一種の決意のような何かがあった。

だけど、俺たちの視線に狼狽した途端に、彼の目から決意は消え去る。そこに見えるのは焦りの色。

コウタ「そ、そういえばさ、ほら。リンドウさんがやられたし、新種のヴァ、ヴァアジユラだけどさ、えつとえつと、お、お欧州支部でもみ、見つかったそうだけど、い、いやその、ほら、これ、これはさっ、何かの前触れだよきつと、絶対、いや、たぶん。……あ、いや、その……なんちゃってええ……」

空気が完全に凍結する。今さっきまであった好感が一瞬で結合崩壊を起こした。

コウタ「あ、えつと、ケイスケ？ すまん、後は頼む」

お、俺に振るなよ！？ ちょ、おいっ、逃ーげーるーなーッ！！
ケイスケ「……まあその、……これも、あいつなりの気遣いなんだよ。たぶん。……いろいろと余計だったがな」

アリサもウィルもポカーンとしている。アリサは本気で放心状態。ウィルの場合は、……地味にキレかけている。だけど俺と視線が合うとすぐに落ち着きを取り戻す。抑揚が激しい奴だな。

と、とにかくここは何かを言わなきゃな、とりあえず何かを……。ケイスケ「えつと、ほかの奴らにも、何も言わせないようにするからさ、……自分のことを嫌いにならないでくれよ。みんなアリサのことを必要としてるから」

アリサ「ひ、必要ですか？ わ、私が……」

とにかく必死に縦に首を振る。

白ウイル「ボクも昨日言いましたよ。あんな奴らには、手を出させないって。もしかして、ボクのこと信用できませんでしたか？」

アリサ「そ、そんなことないです！ 私はウイルさんたちのことを信用して、」

……普段人のことを苗字で呼んでいた彼女が、初めて名前で呼ぶ。……彼女自身もそれに気づいて、少し顔を伏せた。

白ウイル「みんな仲良くしたがってるんですから、もう少し肩の力を抜いてくださいよ。ボクたちのことは、名前で呼んでくれていいんですよ」

アリサ「そ、そうなんですか？ け、——ケイスケさん」

ケイスケ「そりやいいに決まってるっての。俺もお前のことはアリスって呼んでるから、俺のこと名前で呼べっ。こ、これは先輩からの命令だっ」

都合のいい時に先輩面をしてみる。とはいったもののほんの2、3週間の差だが。

ケイスケ「とりあえず、体鈍ってるんじゃないですか？ 少し肩慣らし任務へ行くのもいいと思いますけど」

アリサ「わ、私……本当はまだ、戦いに行くのが怖いんです……」

彼女が、本音を出す。まだ任務へ行きたくないようだが、どうしようかと少し考えを巡らせる。そして、俺が思いつくより早く、ウイルは代案を出した。

白ウイル「それなら、付いていくだけでいいですよ。見ているだけで、結構変わるものですから。……ボクと、アリサ。ケイスケは、どうですか？」

なんだか空気を呼んだ方がいいような気がして、ごめん、忙しいからと横に首を振った。

白ウィル「それじゃあ、二人ですね。少し時間がかかるかもしれないですけど、アリサには詳しく知ってほしい。みんなと一緒に戦える方法を」

アリサ「——ありがとうございます」

そして、簡単な任務を受注すると、二人は行ってしまう。俺は、もう大丈夫だな、と謎の確信をした。これが、仲間に対する信頼というものだろうか？

それよりも、まずは俺自身の神機を強化すべきだと思い、必要な素材を探すために任務を受注した。

8・SEEKING STRENGTH（後書き）

アリサ復活に秒読みがかかりました。くっ、任務開始には至らなかったか。

ウィルのキャラがぶれてきた？ そんなことはないと思う。彼はあれが『普通』だからなあ。

ここ最近になって一度キャラ設定を確認してみると、「あ、あれ？ 何か違う？」となってしまう。おお、恐ろしい。もちろん書き直し。疲れるなあ。

次回からはなんとかぶれないよう微調整していくことにしよう。愚痴終了。ホントにスマセン。

……ここまで来てなんですが、主人公はケイスケ。……たぶん。それでは次回まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2274z/>

GOD EATER -PL/RAYERS-

2011年12月28日01時53分発行